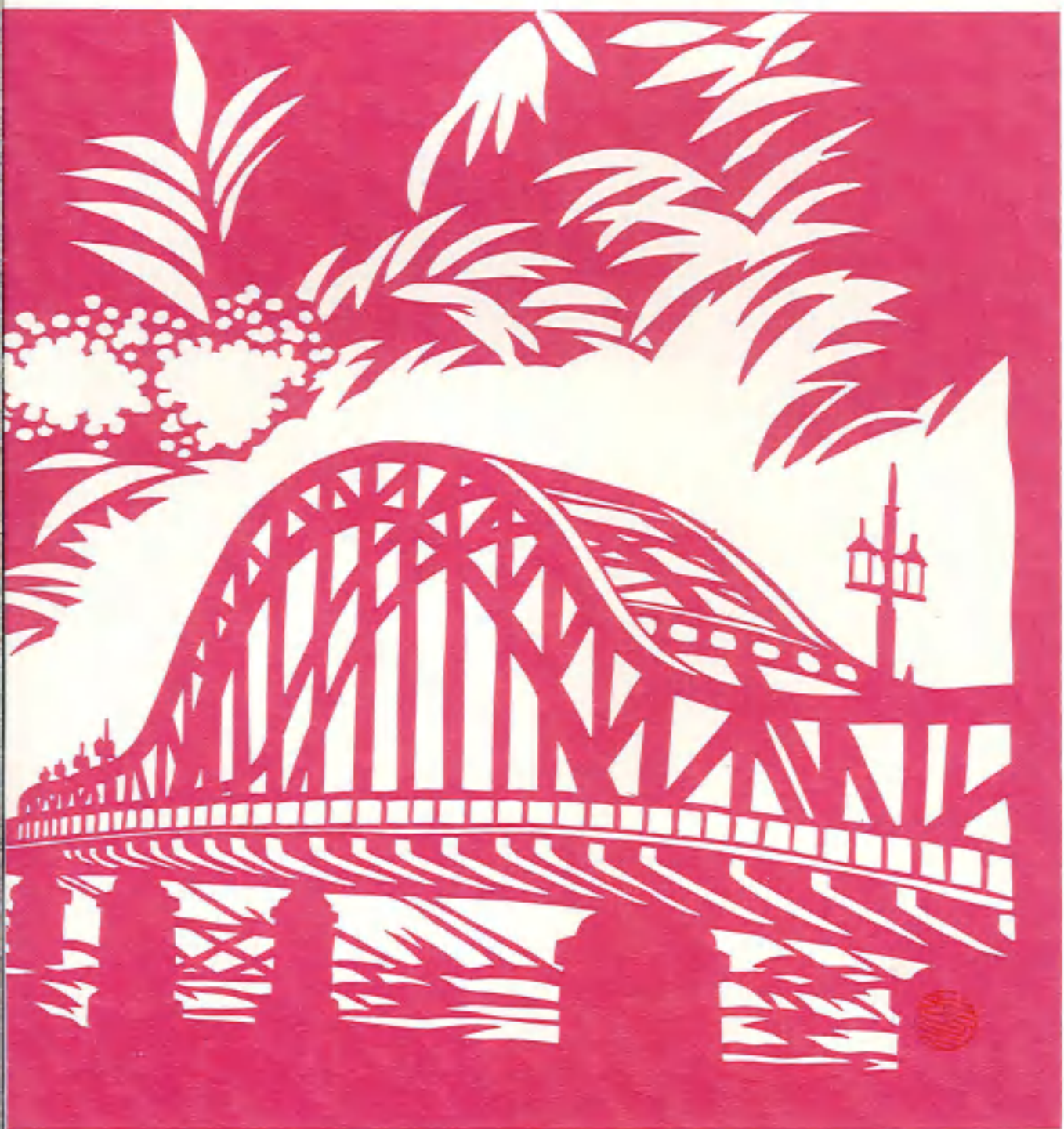


● 第39回 全国造形教育研究大会
第36回 全道造形教育研究大会

旭川大会報告書



第39回 全国造形教育研究大会 旭川大会
第36回 全道造形教育研究大会

報 告 書

大会テーマ

「子どもの心をゆり動かす造形教育」
—つくる心のひろがりと深まりを求めて—

会 期 / 昭和61年 8月 1日(金)・2日(土)・3日(日)



目 次

大会要項	3
旭川大会をふり返って	5
大会第1日概要	8
校種別分科会	10
全国代議員会	15
開 会 式	16
大会宣言	17
記念講演	18
大会第2日概要	19
公開保育・公開授業・分科会A	
幼稚園・保育園	20
小 学 校	30
中学校・高校・大学	46
分 科 会 B	60
幼稚園・保育園	62
小 学 校	69
中 学 校	87
高 校 ・ 大 学	101
あ と が き	105



第39回 全国造形教育研究大会
第36回 全道造形教育研究大会

旭川大会

1. 主催 全国造形教育連盟
北海道造形教育連盟
旭川市教育研究会 図工美術部

2. 後援 文 部 省
北 海 道
北海道教育委員会
旭 川 市
旭川市教育委員会
北海道国公立幼稚園教育研究会
社団法人北海道私立幼稚園協会
北海道社会福祉協議会 保育協議会
北海道小学校長会
北海道中学校長会
北海道高等学校長協会

3. 大会
テーマ

「子どもの心をゆり動かす造形教育」

—つくる心のひろがりと深まりを求めて—

4. 会期 昭和61年8月1日(金)・8月2日(土)・8月3日(日)

5. 会場 (1) 全体会場

●旭川市民文化会館

(校種別分科会、全国代議員会全体会、記念講演、幼小中高総合作品展)

(2) 授業・分科会場

●旭川市立緑が丘小学校……幼稚園・小学校

●旭川市立緑が丘中学校……中学校・高等学校・大学

(公開授業、分科会、全国幼児児童生徒作品展)

6. 日程

●大会第1日：8月1日(金) 旭川市民文化会館

	9:00	9:30	10:30	11:00	12:00	13:00	14:30	16:00	18:00	19:30
	受付		校種別分科会	全国代議員会	昼食	アミューズメント	全体会		実行委員会	レセプション
					受付		開会式	記念講演		
	旭川 幼児・児童・生徒作品展(文化会館展示室) 一2日まで									

●大会第2日：8月2日(土) 緑が丘小学校(幼・小)、緑が丘中学校(中・高・大)

	9:00	10:00	10:30	11:10	12:30	13:30	15:30
幼小中高	受付	公開授業	校種別分科会	分科会A	昼食・中絶会	分科会B	閉会式
大学							
	全国 幼児・児童・生徒作品展						

●大会第3日：8月3日(日)

研 修 視 察

旭川大会をふり返って

旭川大会運営委員長 柳原寿夫

旭川大会は、大陸性気候の特徴を端的にあらわした30度の気温の中で展開されました。

来賓各位のご出席をいただき、全国千数百名の会員の皆様のご参加を得て、無事終了させていただきましたことを心から厚く御礼申し上げます。

私共が本研究大会をお引受け致しましてから、わずか1ヶ月という短い準備期間でございましたので、いろいろとご迷惑をおかけ致したのではないかと危惧致しております。

私共は、本研究大会をお引受けするに当たり次の4点を特に配慮しながら準備を進めて参りました。

「良いものを見せようと気張るより、ありのままを見ていただいて私達の実践の糧としよう」

「研究会全体として、貧しくとも心のこもったものにしよう」

「幼・小・中・高・大の各校種の人間的つながりを深め、強力な結束の機にしよう」

「授業や提案は、地域の特徴が出ているものを考えてみよう」

幸にして、文部省新川先生から次のようなご講評をいただきました。

「本研究会は大変充実しており、感動致しました。特に小中のみでなく幼、高の協力体制は、すばらしい」とのことでした。

又札幌のある会員は、「授業のどこをとってみても、うなずかせるものがあり、提言にも、説得力がある」との感動的なことばをいただきました。

一ヶ月の苦勞がむくわれるようなことばでした。「やってよかった」これが心からの実感でございます。

しかし展示された作品への尊い示唆や、授業における問題の提起もたくさんございました。字数の関係で十分に集録はできませんが、本報告書のまとめを通して、明日への実践の糧としたいと考えます。

自然や風土は人間に強い影響を与えます。旭川にはたくましく風雪に耐える子どもたちがございます。この子どもたちに、種々のご教示を生かし、たくましく創造性豊かな児童生徒の育成のため更に努力を誓いたいと思います。

今後共、造形教育連盟が力を合わせ、明日の日本を担う児童生徒の育成のために、結束をかためていきたいものと考えます。

大会全体を通して、レセプションやアトラクションはいかがでしたでしょうか。駐車場等ではご不便をおかけ致したことと思います。

「あと一週間もすれば、涼しい風が吹きますよ」等と話しておりましたが、残暑は残りましたものの、今は、さわやかな秋風が吹いております。

最後になりましたが、本研究大会に種々ご指導いただきました文部省、道教委、上川教育局、旭川市教委の方々に心から御礼申し上げます。

又ご協賛下さいました多くの方々にも心から御礼申し上げる次第でございます。

秋涼の候をむかえ、あの熱気を日々の実践の中に生かしながら、次年度開催地、千葉市でお会いできることを楽しみにして、報告書の挨拶にかえさせていただきます。

旭川大会を終えて

北海道造形教育連盟委員長 森川昭夫

遠くに見えていた全道連旭川大会が、あっという間に目の前にあらわれそして風のように過ぎ去っていったように思われます。北国はもう秋風が吹き、木の葉が舞い始めました。

物事を行うには、まず天の時、地の利、そして人の和の3つが揃わなければならないといわれています。旭川大会が成功裏に終了し得たのは、この3拍子が揃い、とりわけ人の和に恵まれたといえましょう。柳原委員長は「旭川の仲間には、若い者達が育っています。私達のような年寄りが動かなくとも新鮮なエネルギーがうなっていますから…」と話されました。確かにその通りでありました。本当に眼を見張るばかりの見事な運営ぶりに敬服いたしました。

私はこの大会でたくさん学ぶものがありました。

特に、新川視学官と授業を見て回わりながら、先生がつぶやくように言われる言葉は千金の値打がありました。

「この先生は勉強していますね。ああ、いい作品ですね。よくここまで準備ができましたね」

「彩色……これはむずかしい言葉です。色を塗るも頂けません。色はぬるものでないから何がいいかな、色をつけるとか、色でえがくという気持ちがいいですね。」指導案は少なくとも子どもに話す言葉で書くべきでしょう。子どもにわかりやすく、感動させる教師の言葉は、指導案を書く時に、もう練られていなければならないからです」等、等でした。

私は、この大会でひとつの重みを感じとりました。

いうまでもなく、図画工作・美術の目標は造形的体験を通しての人間教育であります。それは物をつくることによって、物事を認識し、人間及び自然の美しさ、偉大さを発見しながら、自己の世界を確立していくことであります。

今の子ども達は、豊富な商品の中に埋まり、あふれる様な情報に誘われ、知的好奇心や主体性を失いつつあります。コンピューター・ゲームや塾やおけいこ通いで、戸外で思い切り遊ぶ喜びや、友だち同志のつながりやふれ合いが薄れてしまいました。それが「いじめ」や問題行動の要因であることは周知の事実であります。情感豊かな心の教育は今や急務でなければなりません。

現在いわれている一連の教育改革の最終目標は、人間性の豊かさをめざすものでありましょう。そういう意味からこの教科の存在意義は誠に大きいものです。今の子ども達にとって、図工・美術の授業は、救いの教科であります。豊かな人間性を回復するための教科であります。そこにはできる、できないの世界でなく、ただひたすら作品を通して、自己との対話に没入し、他人への思いやりが育つ場であります。ものごとに感ずることの少なくなった子ども達の心を揺さぶるものとして、この教科の役割は重いものであります。

立派な旭川大会 本当にありがとうございました。関係者各位の絶大なご協力に感謝し、そして何よりも、旭川の皆さんの惜身ない献身的なご尽力に厚くお礼申し上げます。

大会を終えて

全国造形美術教育連盟委員長 鷹野 改 三

第39回全造連・第36回全道・旭川大会ごくろうさまでございました。本大会が所期の目的を果たし、成功裏に終了することができました。皆様と共に心からお喜び申し上げます。大会に向けて、ご努力された旭川の榊原先生はじめ諸先生方、道本部並びにご支援を戴いた文部省をはじめ関係諸団体の方々、大会を盛り上げてくださった全国からご参加の皆様たいしまして、感謝と御礼を申しあげる次第でございます。

大会を終えて一ヶ月余、旭川の余韻いまだ覚めずの感があります。やはり、日本の北端北海道旭川には、言わば異国的な風土・文化・美術教育に対する執力があります。一度は足を踏み入れてみたいという願望があると思います。本大会が願望の何ものかを満たしてくれたことと信じます。大会主催地の方々のご苦労は並大抵ではなかったと思います。準備期間の短かさ、少数精鋭での万般への対応等々、大会の常として予想外のこともでてまいります。それらを超えて“旭川に美術教育あり”を全国に紹介する機会となりました。この波紋は、道内のみならず大きく広がることと思います。

夏の北海道は、二輪車で疾駆する若者の天国と見受けましたが、わが全造連においては、ご家族づれ、年配のご夫妻組が多数ご参加くださり、誠に喜ばしいことでありました。感銘を与えた高橋延清先生の「森のメルヘンを語る」記念講演、ユニークに演出されたアトラクションとレセプションは、北海道ならではの味わいがありました。又、私共が散見した富良野の丘陵を色どるラベンダー、はるか十勝の積経など忘れ難いものでありました。

北海道の短い夏が、一度にやってきたような酷暑の中での大会でありましたが、木影での冷風とともに、つめたい牛乳や麦茶のPTAの接待が身にしみました。「子どもの心をゆり動かす造形教育」このテーマと旭川の実践を結びつけるものは何か。授業を参観して、まず落着きのある雰囲気の中で、子ども達が、心を込めて製作に没頭している姿があった。踏みこんで見ると、そこには、周到に練られた準備、指導過程があり、教師は一步引きさがる位置で助言するという姿勢であった。子どもを大事にする旭川の実践に触れる思いがしました。子ども達のそれぞれの個性を依據し、感性を豊かにし、創造力を伸ばし、彼等の生活に生きいきとした活力を与える、造形を通しての美の教育の重要性を改めて感じた次第であります。

校種別部会で検討され、代議員会で決議された大会宣言の経過をみまして、この教科に寄せる全国の先生方の熱意にうたれました。臨教審は、来春の最終答申を控え、教育課程審議会も今秋、中間まとめを公表するという大事な局面を迎えています。東京に戻り、直ちに文部省をはじめ、関係方面へ決議文を送付すると共に、緊急に本部役員会を開き、今後の対応策を協議し、目下必要な行動をとっております。各界、各校種におかれましても、ご支援をお願いいたします。

昨春秋、郷土色豊かな奈良大会を展開された、辰己先生はじめ先生方が多数参加されました。次年度開催地千葉県より代表の服部先生から、力強いご挨拶を戴き万雷の拍手を呼びました。この流れの中に、諸先輩が築きあげてきた全造連の伝統と各県地域的美術教育充実発展のいぶきを感じとることができました。千葉県先生方のご健闘と大会の成功を祈念いたしております。終りに、皆様方の益々のご精進とご発展をお祈り申し上げます。

大会第1日（8月1日^⑤）

- 校種別分科会
- 全国代議員会
- 全 体 会
 - ・開会式
 - ・記念講演

（※幼・小・中・高総合作品展）

〔会場〕旭川市民文化会館



開 会 式



校種別分科会・全国代議員会



1. 開会

2. 議長挨拶 会長代行 亀川 豊（東京）

- ・幼稚園・保育部会として、現状は非常に組織づくりがむずかしい段階である。
- ・現実、幼児の保育は日々なされている。
- ・現場の先生達があつちりとスクラムを組んで、全国的な組織づくりにあたらなければならないと思う。
- ・旭川大会で少しでも先の見えるものにしていきたい。協力をお願いしたい。

4. 自己紹介

5. 議事

(1) 61年度役員選出（午後、各都道府県代表者の話し合により決定）

会長（暫定） 亀川 豊氏

副会長（保留）

事務局長（暫定） 鈴石 弘之氏（東京・戸塚第二小学校）

- ・全国的な組織がきちんとできていない段階であるが、各都道府県の組織強化を呼びかけ、現在ある諸々の問題点を解決しながら保育活動を高めていくためにも、会長・事務局長を決める必要がある。
- ・全造連事務局としても、幼稚園・保育部会の組織強化発展のために、今までも各都道府県への働きかけをやってきているが、今後も、更に力を入れて、その活動にあたる。
- ・単に名前だけの会長ではなく実際に働ける立場の人をお願いする。造形大会のためだけの役員であってはなにもならない。役員の人選は来年後に向けて暫定的なものとしてほしい。
- ・各都道府県の代表が一堂に会する造形大会を契機に前進しようとする気運が高まってきているので、旭川大会で暫定であっても役員を決めた方がよい。会長を亀川氏に、事務局を東京にお願いする。
- ・組織強化と部会の発展のために全造連事務局長に暫定的に幼稚園部会事務局長をお願いする。
- ・当分科会の話し合い、決定事項は「全造連ニュース」に載せ知らせる。

(2) 都道府県代表者挨拶（自己紹介）にかえる。

(3) 大会宣言について

一部修正

幼児期における幼児の活動を明るく豊かにさせるため、造形教育の内容充実、更に、組織の強化発展に努力する。

6. 閉会

1. 昭和60年度 全国小学校造形教育連盟会計決算報告があり承認されました。

2. 昭和61年度 役員選出

事務局より新役員の推薦提案があり、下記の通り決定されました。

会 長 鷹野 改三（東京）

副会長 辰巳 文一（奈良）

副会長 森川 昭夫（北海道）

事務局長 鈴石 弘之（東京）

3. 出席されていた都道府県の代表者が事務局より紹介されました。

4. 大会宣言について

○第39回全国造形教育研究大会旭川大会大会宣言（案）が事務局より提案され採択されました。

○意見

- ・週2時間確保は大賛成であり、できれば4時間ほしいところである。図画工作科の名称を造形科と改称するのが望ましい。（東京 古市氏）
- ・週2時間確保は賛成であるが、専科教諭の配置については、愛知県の現状では難しい状態である。全国の状況がどうなっているのか知りたい。（愛知県代表）
- ・東京都では、全部の学校に図工と音楽の専科が配置されている。兵庫県でも取組んでいると聞いている。校長会でも専科教員の配置を要望している（事務局）
- ・専科教員の配置拡充については臨教審においても答申されている。音楽は全学年専科にしてほしいと要望しているが、図工科では、高学年を主眼に要望していきたい。（鷹野会長）

5. 都道府県代表者会議の開催について

鷹野会長より、組織の強化と指導要領の改訂に向けての意見交流をねらいとし、今年度の適当な時期に会合を開催したいとの提案があり了承されました。

- ・大会実行委員長挨拶 千葉 豊治(旭川聖園中)
- ・全中美研会長挨拶 武藤 忠春(東京都中野区立第三中)
- ・大会経過報告 事務局長 間鍋武敷(大阪市立天下茶屋中)

教育改革に関して中学校美術科の転機、あふない状況で、要望書を作成した。その内容は、中学校の美術科が必修でなくなる部分が考えられるとして、義務教育として国民を育てる基本的な教科の一つであり必修でなければならないことを最大説課題としている。十月頃から教科の審議が行なわれるので、研究実践を通して、本当の美術教育のあり方について考えてほしい。

・協議

1. 大会宣言(案)検討

司会者が大会宣言案を朗読し、全員の拍手をもって承認した。

2. 教育課程改訂に関する諸問題

・武藤会長よりプリントによる提案

戦後の教育は「知、徳、体」と常に「知」が先行してきた。人間教育の源は「直、善、美、聖」の四つである。歴史的に美術を取り除いた人間教育はありえない。

教科時数の必修が、2・2・0になるという論議について、3年生の必修時間をなくす事は、教科構造そのものを無視したもので、生徒の発達段階から見ても3年の美術こそ必修にしなければならない。それと同時に美術教師の数も減少する事が予想され、弱体化につながる。

今会員の先生方に考えていただきたいのは次の3点です。

- ①美術教育は、当然必修を前提としたものであり、週時数の確保は直接、明日の美術の授業にかかわる大きな課題であること。
- ②本質的には2時間が適切であること、
- ③組織的なまとまりで主張すべきである。

・尾上 治(東京都新宿区立淀橋中)より後半部分提案

3年生の必修をはずし、選択必修という形にまとめられないようにしよう。

- ・名古屋の先生から、現場ではどうでもいい感じがあるので我々はがんばらなくてはならない。
- ・間鍋先生から補足意見、2月の終りころ、全日中校長会の方から美術科としてはどういう意見を持っているかということで、校長会試案に対する意見を出した。6月19日付をもって教育課程審議会会長に意見書が出ている。その内容は、主要5教科を必修とする。技術科等は内容の選択の問題があるが美術科についてはふれていない。しかし、3年生は選択の機会、質、量共に拡充するとしているので3年生の美術科は一層、危険な状況にある。

12分オーバーして、諸問題に対する意見が出されました。参加者は31名でした。

1. 教育課程をめぐる今日の情況

(1)教育課程審議会へ全造連として、要望書を本年3月31日付で提出した。内容については、幼稚園、小学校、中学校、高校、大学における今日の図工、美術、工芸科の問題点を明示した内容のものである。高校での要望は、「高等学校(全日制普通科)における芸術教科4単位を必修とし、美術工芸教育を充実するよう努力する」の内容のものである。

(2)文部省と教育課程審議会へ全造連が要望書を本年7月29日付で提出した。

・内容について

①幼稚園での絵画制作という名称は、高度であるので名称を「造形」とする。

②小学校では、目標・内容・時数は現行でよいが、造形的創造活動の基礎・基本を養う大事な時期であるので内容の範囲・程度を明示すべきだ。

③中学校は、真の美意識に目ざめ美にあこがれ、感性と知性の調和のとれた中で創造性や表現力を一層豊かなものにするため、実技教科としての最低の時数を確立する。個人差に応じて好きなことをさせればよいというような選択性は、国民の基礎的な義務教育では望ましくない。

④高等学校における美術・工芸の単位は、校長裁量により自由になるが、美術・工芸軽視の向きがあり望ましくない。

⑤以上関連して、デザイン・工作・工芸の内容に関して充実を図る。教員の实技研修規定をもつける。障害者の指導資料と施設設備等の充実を図る。条件整備の充実を図る。

2. 各都道府県的情況報告から

・美術・工芸科の専任教員採用が少ない。将来的にみると生徒数減少、美術工芸軽視などで減少の方向にあるのでないか。この点を小・中・高の連携を重視し問題としていきたい。

・全造研、全高美工連、全国総芸術祭など、組織が複雑でありまとまりがないので整理して考えていきたい。

・学校規模にそわない専任教師、専任講師について問題がある。

・美術、工芸の単位時間数の問題については、各地域でかなり差がある。

3. 全国造形教育研究大会旭川大会宣言の確認と可決

4. 校種別、高校会部長の選出について

部長に 和田 晶先生(東京)選出

1. 討議の柱

- (1) 宣言案の内容検討 (2) 次期部会長選出について (3) 明日の討議内容について

2. 話し合いの内容

(1) 宣言案の内容検討

- ①宣言案の文中の1行目「豊かな創造力」の豊かなを別の表現にすること。
②項目1～5については、主語を我々と挿入すべきである。また、～つくる心のひろがりと深まりを求めての～の～は適当でない。一に訂正すべきである。
③現行の管理的な面の強い教員の研修を改善し、教員養成大学における研究・教育との連携を図り、自主研究を尊重・推進すること。
④今までの大会では、宣言案が不備であったので、別紙用意してきたが、本大会では準備されていることに敬意を表したい。案内については、少々充足すべき点があるが、代議員会に要望していきたい。

(2) 次期部会長選出について

- ①熊本会長の基に寄せられた調査・要望では、京都市立芸術大学の川村善之教授への推選が高いので、ぜひお願いしたい。
②全美教・全造連との関連と規約から、熊本会長の任期終了時点、及び総会の意向から決定をされたい。
③全国の国立私立の大学との輪番制について考える時期にきている。

(3) 大会2日目の討議内容について

- ①大会紀要183ページに要項があるが、別紙資料を用意した。

②別紙資料の項目は次のとおり

1. 大学における教員養成のかかえる当面の諸問題について

- A 大学入試と教員養成
B 教員養成課程のカリキュラム
C 今次教育改革への対応
D 就職事情について

2. 教科教育の充実について

- A 大学院の現状
B 研究の国際交流
C 研究の推進
D 理論的研究の動向

3. 全造連大学部会と一体である全美教の活動について

4. 今後の問題点

- A 教員養成大学の充実
B 教員採用に関して
C 美術教師の研修
D 教員養成に関する現場からの批判

全国代表議員会

司会者 尾上 治（東京・落合中学校） 記録者 青柳 明雄（旭川） 黒沢 宏光（旭川）

○「閉会のことば」～「議長選出」まで省略

〈議 事〉

1. 校種別分科会報告

(1) 幼稚園・保育園分科会

- ・61年度役員選出について
- ・組織が大きく母体がちがうため組織固めが困難……今後の課題
- ・大会宣言案については一部字句修正

(2) 小学校分科会

- ・会計決算報告及び61年度役員選出について
- ・大会宣言案・都道府県代表者会議の開催について原案通り承認（週2時間以上の時数絶対確保、専科教員の配置要求等の意見を含む）

(3) 中学校分科会

- ・美術が選択教科化されそうな気配があることに対して重大な決意で対処すべきである。
- ・美術教師としての自覚が乏しく、実践を通じた理論的な面での力量をつける事が全造連の使命

(4) 高校分科会

- ・教育改革の中で、必須選択の必須がさずされる危険性がある。又、4単位が3単位にもどる心配がある。それらについての対処。
- ・全高美工研と全造連とのかかわり、高文連の組織化等について、11月、全高美工研で討論する。

(5) 大学分科会

- ・大会宣言案は大筋では良いが一部不鮮明。一部字句修正
- ・教員養成課程における現状の6教科を8教科にすべき。又、採用試験には実技を取り入れるべきである。

2. 本部提案

(1) 会計決算及び会計監査報告について（承認）

(2) 62年度以降の大会開催地について……62年・千葉、63年・愛媛、64年・青森（承認）

(3) 全造連運動の今後の進め方

- ・定期的に本部役員会を持ち、縦、横のつながりを充実させ、組織の強化拡大に努力する。
（付帯意見、「全造連の基本的性格は、規約、事業の第1項にあり、今日的課題が山積している中で、事務局はすみやかに的確な情報を各県に伝達すべきである。又、限られた範囲でなく、造形教育という広い視野に立って、縦横の交流を深めるべきである。」をつけ承認）

3. 大会宣言（案）……一部字句修正の上承認（別紙）

4. 61年度役員の確認、62年度役員について……（別紙通り承認）

○以下「議長解任」～「閉会のことば」は省略

開 会 式

- | | | |
|-----------------|--|--------------------------------|
| 1. 開会のことば | 大会運営副委員長 | 大谷 勝美 |
| 2. 挨拶 | 大会運営委員長
北海道造形教育連盟委員長
全国造形教育連盟委員長 | 柳原 寿夫
森川 昭夫
鷹野 改三 |
| 3. 祝辞 | 北海道知事
旭川市長
文部省視学官
北海道教育委員会教育長 | 横路 孝弘
坂東 徹
新川 昭一
植村 敏 |
| 4. 来賓紹介 | | |
| 5. 祝電披露 | | |
| 6. 研究概要の報告 | 北海道造形教育連盟研究部長
旭川大会研究部長 | 金井 秀男
飯塚 礼二 |
| 7. 代議員会報告 | 全国造形教育連盟事務局長 | 鈴石 弘之 |
| 8. 大会宣言 | 大会実行委員長 | 千葉 豊治 |
| 9. 次期開催地大会旗引き渡し | | |
| 10. 次期開催地代表挨拶 | 第40回全国造形教育研究大会
千葉県造形教育研究会会長
第37回北海道造形教育研究会
オホーツク造形教育連盟委員長 | 御園 正男
豊島 豊 |
| 11. 閉会のことば | 大会運営副委員長 | 川島 信也 |

第39回 全国造形教育研究大会旭川大会大会宣言

私たちは造形教育を通して、21世紀に生きる青少年に、生き生きとした創造力と情操豊かな人間性を培う教育を一層推進するため、美しい自然に包まれた北海道の地で大会を開催した。

今日、教育の危機が叫ばれているが、その原因として、偏差値偏重による教育の弊害が子どもの意欲を摘みとり、画一化された教育が行われ、個性の伸長を阻害しているなどが指摘されている。

また、今日の社会では、物質中心主義、生命を尊重する心の不足、自然との触れ合いの希薄化などが子どもたちの生活の中にも、いたるところで指摘されている。

やがて到来する国際化、情報化社会の中では、心豊かな調和のとれた人格の形成をめざす教育が、今後ますます重要視されることになると思われる。

この時期に、造形教育の果たすべき役割を自覚し、造形教育を通して「豊かな人間性の回復」「美しさを求め、創造する喜び」「郷土を愛する心」「自由と自立の精神」などの、心豊かな調和のとれた人間形成をめざし、鋭意推進しなければならないと考える。

本大会の主題を「子どもの心をゆり動かす造形教育」～つくる心のひろがり～と深まりを求めて～と設定した所以もここにある。

今、私たちは、清流、石狩川の源流の地、旭川に集い、造形教育の原点を見極め、今後の造形教育の在り方について、第39回全国造形教育研究大会旭川大会の名において下記の事項を宣言する。

私たちは

- 1 幼児期における幼児の活動を、明るく豊かにさせるため、造形教育の内容充実、さらに組織の強化発展に努力する。
- 2 小学校における図画工作科の授業時間を、現行通り全学年週2時間確保し、特に高学年では、図画工作科専科教諭の配置を全国的に推進するよう努力する。
- 3 中学校における美術科の授業時間を、全学年必修として週2時間確保し、美術科免許状所有教諭の配置を全国的に推進し、指導の充実をはかる。
- 4 高等学校（全日制普通科）における芸術教科4単位を必修とし、美術・工芸教育を充実するよう努力する。
- 5 教員養成過程における美術・工芸教育の拡充をはかるとともに、現職図画工作・美術・工芸担当教員の自主的研修を、一層推進する。

昭和61年8月1日

第39回全国造形教育研究大会旭川大会

全国造形教育連盟委員長 鷹野 改 三

旭川大会運営委員長 柳原 寿 夫

講師 東京大学名誉教授 高橋 延 清 先生

最初に講師の紹介があった。自らをドロ亀さんと呼び、北海道富良野にある東大演習林長として36年間を森林と共に過ごし、一度も東大本郷の教壇に立つことなく定年退官。森林の研究では、世界の第一人者であり、多くの受賞がある。自然に向ける目と心にはその人柄がにじみ出る暖かさがあり「樹海に生きる」他、多数の出版、テレビ等への出演も多い。

講演は、科学映画「北国の森林」で始まった。この映画は、東大演習林長時代に多額の自費と募金により製作されたものである。

森林のなりたちがどのようになされ、植物や動物がそれにどのようにかかわっていくかを科学的に、しかも誰にでもわかりやすく映し出された。大木や低木、雑草や苔、菌類がそれぞれの条件の中で育ち、虫や鳥、動物が、樹木の恩恵を受けて生き、森林全体が息づき新しい世代を造り出していく様子は感動的であった。

次はドロ亀先生のスピーチ。何十年も前から愛用されている登山帽、つぎはぎだらけのリュック姿で登壇。森林と過ごした多くの体験の中から、森の中で繰り広げられる造形美の世界へ導く。

この大会のために写したスライドをもとに、ドロ亀さんの見た森のメルヘンは素朴な語り口で展開された。髪切り虫が樹木の幹を食べたあとの溝が、その樹木の枝ぶりと同じ形になっていたり、大樹を夜中に見上げた時の雄大な構成美、ベニテング茸が成長過程で徐々にその容姿を変えていく不思議さ、きのこの菌が土中に造り出す美しい網、更には、我々でもよく見かける街路樹の表皮の中からもユーモラスな形をみつけ出すなど、ドロ亀さんの目は、自由奔放に、しかも愛情を持ってかけめぐる。

森の中で造り出される造形美は、全て森林の生命とかわりあっており、素朴で変化に満ちたメルヘンであり、私たちが見落とししたり、失いかけているロマンが感じられた。

やわらかい木の葉の森、小鳥がえさを探してる
 スーッとおりてきた 小さな命
 ドロ亀さんの手のひらに
 やれやれ助かったと言いたげに
 からだをあちこち尺をとる
 そんなにきちんとはかるなよ 網長短足ばれるから

ドロ亀さんが講演の最初に披露した、本人お気に入りの詩である。

ドロ亀さんにとっては、虫も鳥も木も人間も全て同等であり、友達である。

ゆったりと優しく、深く自然を見つめるドロ亀さんの生き方には、造形教育の中で考えなければならない原点があるように思われた。



大会第2日（8月2日^土）

- 公開授業
- 分科会 A

（※幼・小・中・高総合作品展）

〔幼・小会場〕旭川市立緑が丘小学校



〔中・高・大会場〕旭川市立緑が丘中学校



分科会 A

●内容 1. 旭川でのとりくみ 2. 授業を中心とした話し合い

●分科会共通テーマ「つくる心のひろがりと深まりを求めて」

会場	校種	分科会番号	領域	司会者	提言者	助言者	記録者
緑が丘保育園	幼稚園	1	造形あそび	旭川市野正 治 札幌・学園小 永井 恭子	旭川・大谷ひかり幼 長谷川 秀男	旭川・穂合中 大谷 謙美	旭川・大谷ひかり幼 古小高 利枝 中島 真由美
		2	絵画・造形	旭川・長谷川大 守野 綾子 札幌・西古小 小尾 高	旭川・こたばた 本 朋 清	旭川・通利通 森 田 喜 昇	旭川・こたばた 鈴 本 淳 枝 山 崎 祥 子
		3	総合	旭川市 岩間 昇 札幌・新野中 吉 朋 度 龍	旭川・ユリアナ幼 老久保 小夜子	札幌・評議室 伊 藤 忠	旭川・ユリアナ幼 大 西 忠 子 高 橋 由 美 子
		4	造形あそび	旭川・教育大附属幼 大 口 章 子 札幌・第四小 鈴 本 将 夫	旭川・神楽坊 藤 澤 ち ず	札幌・大谷研大 辻 悦 平	旭川・神楽坊 新 穂 悠 世 生 山 内 悦 子
小学校	小	5	造形的なあそび	上川・一の橋小 小 杉 信 雄	旭川・東区小 飯 塚 礼 二	網走・富田山小 山 宮 高 也	旭川・太田東小 宮 本 義 明
		6	絵画 A (低学年)	旭川・通利通 飯 塚 雄	旭川・東国小 高 橋 直 一	洞爺・愛国小 西 弘 治	旭川・東光小 勝 島 アヤ子 坂 本 幸
		7	絵画 B (中学年)	上川・気道小 渡 辺 正 勝	旭川・吾文第一小 角 邦 雄	空知・美瑛東小 一 戸 信 雄	旭川・吾文小 森 智 春
		8	絵画 C (高学年)	上川・朝国小 出 倉 功	旭川・華光小 紙 谷 順	上川教育局 渡 部 稔	旭川・木崎南小 伊 藤 久 登
		9	版 画	旭川・志和町小 根 本 正 昭	旭川・知国小 新 井 相 恵	上川・中富本小 萩 原 常 良	旭川・千代田小 川 村 由 美 子
		10	デザイン・工作	上川・宇治別小 碓 山 尚 明	旭川・吾町小 青 柳 晴 雄	札幌・新野南小 佐 藤 吉 五 郎	旭川・豊田小 弘 田 洋 子
		11	彫 塑	旭川・高古小 宮 下 林	旭川・吾文第二小 吉 永 一 江	空知・白鳥小 佐 伯 達	旭川・神楽町小 増 田 正 子
緑が丘中学校	中	12	絵 画	旭川・朝国中 牧 野 和 夫	旭川・豊二中 川 合 廣	旭川市教委 大久保 正義	旭川・北国中 島 本 捷 夫
		13	版 画	旭川・東国中 入 井 隆 生	旭川・水山山中 及 川 輝 夫	札幌・しみじ市中 坂 田 武 夫	旭川・広陵中 島 本 淳 子
		14	デ ザ イン	上川・北谷中 大 西 勤	旭川・太田中 大 口 優	旭川・明国中 吉 田 一 龍	旭川・神楽中 吉 本 博 二
		15	彫 塑	旭川・北都中 寺 原 実	旭川・旭町中 原 完	札幌・東国中 末 谷 哲 夫	旭川・神楽中 長 野 晃 晃
		16	工 芸	上川・美瑛中 小 松 吉 隆	旭川・教育大附属中 山 理 利 春	上川・富良野中 伊 藤 功	旭川・北国中 菅 海 紹
高大校学	17	工 芸	旭川・電管高 平 田 和 也	旭川・東高 院 誌 忠 晴 旭川・西田高 西 田 武 文	旭川東高 院 井 善 則 上川教育大 熊 本 高 工	旭川・山崎 長 尾 教 逸	

公開保育・公開授業一覧

領 域	年齢 学年	題 材 名	氏 名	学 校
造形あそび	5歳児	牛乳パックの家 -お家ごっこ-	西 山 美 秋 元 智 恵 百合子	大谷ひかり
絵画・造形	5歳児	海 の 中 -水に親しむ-	岡 屋 か 藤 嶋 お 前 田 聡 子 由紀子	旭川こぼと
総 合	5歳児	つくってあそぼう -舟づくり-	小 原 啓 高 橋 由 大 西 美 子 恵子	ユリアナ
造形あそび	5歳児	遠足に行こう	飯 澤 ち 山 内 ず 新 徳 悦 子 弥世生	市立神楽

造形あそび



分科会



絵画・造形



分科会



分科会 A-1

幼稚園・保育園（造形あそび）

司会者	今野 正治（旭川）	永井 恭子（札幌）
助言者	大谷 勝美（旭川）	
提言者	長谷川秀男（旭川）	
記録者	古小高利枝（旭川）	中島真由美（旭川）

1. 分科会テーマ つく心のひろがりと深まりを求めて
2. 提言主題 毎日の生活の中で、見たりふれたりしている素材をいかしみなどと仲良くつくる楽しさを味わう。
3. 提言要旨
 - ・現在の子どもは、1人遊びが多く集団遊びが乏しい。また、作られた物、与えられた物の遊びはできるが、自分から働きかけたり物を作ったりする意欲が乏しい。子ども本来の姿によみがえらせるためにも造形あそびは、子どもの生活、遊びそのものである。
 - ・子どもは、いろいろな事をしたいという欲求を持っている。それを自分の力で作りだし、工夫し苦勞し最後まで頑張ってきたという感動を味わわせてみたい。
 - ・造形活動を通して、自然の変化に敏感に気づく子ども、美に対する感覚を鋭敏にし感動する子どもをつくりたい。
4. 公開授業 ◎題材名 牛乳パックの家（お家ごっこ）（幼稚園）
◎指導者 秋元百合子 西山美智恵（大谷ひかり幼稚園）
◎指導者より
 - ・大型積木ではスムーズに造れた家づくりだが牛乳パックではテープ貼りの作業が大変だった。
 - ・グループの人数が少ないほど、意見がまとまりやすくすぐ作業に移ることができた。しかし、グループの人数が多いと意見が分かれ、それがまとまらぬうちに個々に作業に入ってしまう、作品にもまとまりのないものがあった。
 - ・大型積木を使ってのお家ごっこの経験が、牛乳パックにいかされダイナミックな作品が造られたようだ。
 - ・牛乳パックの色分けを事前にしておいて、作品造りをしたら、色彩的にもおもしろい作品ができたのではないかという反省点が残った。
5. 研究討議の内容
 - ・牛乳パックでの作業は大変難しい。それを幼稚園でするねらいは何か？という質問に対して、一つには、見たりふれたり身近な素材を選んだこと。二つには、物を造る過程で牛乳パックを貼る作業が必要となるが、自分が造りたい物を頑張る最後まで造れる根性のある子どもを育てることも一つのねらいとした。
 - ・造形あそびとは、内面的な意欲が必要ではないか。牛乳パックだけでは、意欲の持続に無理があると思うので、材料の種類を多くしたらよいのではないか。（例：ダンボール）
 - ・導入部分が明瞭でなかった。回を重ねるごとにあきが出てくるので「さあ、頑張ろう。」というエネルギー、感動が必要ではないか。

また、助言者からは幼児は感動を持続する力が未分化である。今日の導入は、自然な形で保育に入れたので良かったと思う。導入方法には、そのような形があっても良いと思う。

・グループ活動について

- ① 共通のイメージがまだまとまらないので、2～3人ならよいのではないか。人数が多くなると保育者の指導が必要な時期である。
- ② リーダー格の子どもがいる場合は、スムーズに作品造りができるが、そうでない場合はどっちつかずになる。
- ③ 幼児では、グループとしての機能を十分に発揮するのは無理ではないだろうか。
- ④ 原則的には、先生が意識的にグループを組織化する必要はないと思う。自然発生的に、グループがうまれるのがいいのではないだろうか。

6. 討議のまとめ

・保育の中での先生の注意のしかた

- ① 全体の中に必要な事は大きな声で話す。
- ② 全体に話す助言と、個人の発想を促すような助言を研究する必要がある。

・何かを造るために意図的にグループづくりをするのは難しい。自然発生的にグループをつくるのが一番望ましい。しかし、友だちをつくるという観点からグループづくりを考えなければならない。

・美意識は、幼稚園の遊びの中、生活の中で徐々に育てていくもので、意図的に育てようとしても、育たないものである。美意識は、総合的な活動の中から育つものである。

・造形あそびの例

- ① 並べて遊ぼう
- ② 地面に絵を描こう
- ③ 枯木に花を咲かせましょう
- ④ 紙テープ、新聞紙などで自分の果をつくろう

分科会 A—2

幼稚園・保育園（絵画・造形）

司会者	守野 綾子（旭川）	小尾 喬（札幌）
助言者	森田 喜昇（旭川）	
提言者	本田 清（旭川）	
記録者	山崎 祥子（旭川）	鈴木 淳枝（旭川）

1. 分科会テーマ つくる心のひろがりと深まりを求めて

2. 提言主題 壁面づくり—総合保育と絵画・造形—

3. 提言要旨

・幼稚園の保育活動には、とすると、次の様なマンネリ化が見受けられる。

その1. 行事中心の諸活動

「子どもの日」「えんそく」「うんどう会」「おたんじょう会」など

この繰返しが活動の主流となっている。これ等行事の意義は認めるが、それだけでは、質的な変容が望まれそうもない。

その2. お絵かきごっこと作品集

作品展には、お絵かきごっこ式の作品が羅じられていく。そこには、ハツラツとした子どもの活きた姿が見られない。みんな画一的で型にはまったものしか出来ない。

以上の様な問題点を打開していく試みとして、

① 主題を明確にするための「総合活動」

② 子どもの活きた姿を写し出すための「壁面づくり」

③ 園と家庭がはたらき合える「こどものかべ」を取りあげたのである。

4. 公開授業 ◎題材名 海の中—水と親しむ—（5歳児）

◎指導者 前田由紀子、岡屋かおり、藤島聡子（旭川こぼと幼稚園）

◎指導者より

・週1度、年長組のみで大きな絵を描いたりなどの活動を行い、6月下旬から海の方へもっていった。

・週1度、アスレチックに行き水泳指導を行っているので、泳ぐという形をとり入れて、大きいマニラボードにのびのびと描けてよかった。

・普段、仕事の遅い子どもまわりの雰囲気刺激され、皆と一緒に出来た。

5. 研究討議の内容

・旭川さくら岡幼稚園の奥田先生による感想、質問

本田先生が付属小学校で先生をしている時の、社会の授業でも、とても勉強意欲をそそられたのですが、また本田先生水泳、テニスなど色々を行っているようなので、幼稚園の先生方の研修の仕方など教えてほしい。——本田先生より、先生方が子供に真剣になって見本を示し、模範となり計画を立てて、その経過の記録をとり財産とするようにしている。また本田先生がいつも言っていることは、常に子供を指導する時には、子供の前に立ち眼を見て指導することと、いつも具体的にメモをとることである。これがとても大切である。

・千葉鶴川の東条幼稚園の木下さんより、感想

幼稚園という所は、子供を育てている場所である。ものをいかに上手に作るかなどではなく、原点に戻るといことが大切である。また、幼稚園は“園”でなくてはいけないと思うが、こぼと幼稚園はそれに近い幼稚園であると感じました。そして、子供と一体となっている先生方の笑顔がとてもよかったが、表現を行う時にもっと広い場所を使った方が良いと思いました。

・登別のふじ幼稚園のすわさんより

自由に子供らしさを取り入れていても、作品がどうしても大人の概念によるきれいな絵になってしまう。これは知らず知らずのうちに先生方の、内面にこういう概念があるからではないか。また、絵を描く活動とハサミを使う活動は違うので、うまく描けた絵が切ることによってダメなものになってしまったので、切る前に一声、声がけが欲しかった。

・風連の青木さんより

青木先生の幼稚園では、大きな壁画をつくりたいという意欲はあるが場所がない、等の問題があり、大きな壁画がつくれるこぼと幼稚園がうらやましかった。また、えの具を使っていたのだが、えの具を使う前にその性質などを調べてやっているのか。荻島先生より、えの具は週1度、順をおって筆から使用していったので、今日は特別そのことに対して説明しなかった。

6. 討議のまとめ—森田先生より—

- ・子供に、最初からえの具を使用するというのは、とても進歩的で良かったが、その上にクレヨンを重ねたりするのもおもしろい発見があったのしい。また、えの具はきれいな色ばかりだったので、もっと、どす黒い色を使ってやってほしかったし、先生方が3人もいるので、子供達を3組に分けて保育した方が良かったのではないか。そして1-7番までやることを子供達は、おぼえきれなかったのではないか。また、最後にばんざいをしたのは良かったが、拍手をしてもりあげても良かったのではないだろうか。

分科会 A-3

幼稚園・保育園（総合）

司会者	岩間 昇（旭川）	吉田 俊雄（札幌）
助言者	伊藤 恵（札幌）	
提言者	老久保小夜子（旭川）	
記録者	大西 恵子（旭川）	高橋由美子（旭川）

1. 分科会テーマ つくる心のひろがりと深まりを求めて
2. 提言主題 子どもの生きる自然な環境
3. 提言要旨
 - ・子ども達は与えられすぎて創造力と創作力をなくしている。
 - ・日本の心のいい所をうえつきたい。
 - ・幼稚園が人生の中で一番いい所である。
 - ・遊び道具をあまり与えず、また、あまり手をかさないで子どもの自然の姿を大切にす。
4. 公開授業 ◎題材名 舟づくり（5歳児） ◎指導者 小原 啓子（ユリアナ幼稚園）
◎指導者より
 - ・助言をあまりしないで子ども達の自由に作らせた。
 - ・なるべく手をかさず、自分達で作らせた。
 - ・5月の段階から舟づくりをはじめました。
 - ・失敗してはじめて自分の舟が浮かばなかった原因を知り、次回作るときには気をつける事と思えます。
 - ・これからも、いろんな教材を生かして、子ども達の望むものを取りあげていきたい。
5. 研究討議の内容
 - ・保育前の子ども達の導入がすばらしかった。
 - ・作っている時、子ども達は大変静かで、子ども達同志の会話もあまり見られなかった。
 - ・子ども達の座り方によって、もう少し子ども達同志の会話も出てきたのではないか。
 - ・舟づくりで一番生き生きしていた子どもが、失敗という言葉でかたづけられてしまい、もう少しその子に対して対処してほしかった。

◎幼稚園に対しての質問

 - ・園の中に知的発達のおくれた子はいすか？
毎年、何人かの子を受け入れています。少人数のため健常児といっしょに保育をして、今までの障害児は成長し、だいたい小学校へ入っています。
 - ・ユリアナ幼稚園では総合というものをどう取られているのか？
物を子ども達に与えず、自然の中で育ててあげたい。教育の中では英語、書道、体操を園でおこなっているが、自然の中で覚えるのが一番いいため、子ども達に無理やり教えていません。そのため子ども達は楽しみながらやっています。
 - ・英語・書道・体操は幼児の活動に本当に役立つのか？それより内面的なもので、きれいなものを見て感動したり、イメージをふくらませたり、そういう物を総合活動として大事なのではないか？

「総合」について分科会Bに引き続く。

6. 討議のまとめ

- ・先生がそばにいてくれるだけで子ども達はしあわせに取り込めるのではないか。そのことを教えられた。
- ・舟つくりの最後に先生が子ども達に「やった」と言わせましたが、その言葉が子ども達から出てくるのが一番の理想であり、「やった」という気持ちが大切である。

分科会 A-4

幼稚園・保育園（造形あそび）

司会者	大口 章子（旭川）	鈴木 将夫（札幌）
助言者	辻 悦平（札幌）	
提言者	飯澤 ちず（旭川）	
記録者	新徳弥世生（旭川）	山内 悦子（旭川）

1. 分科会テーマ つくる心のひろがりと深まりを求めて

2. 提言主題 「楽しくあそぼう、すすんであそぼう」を造形活動に結びつけるとりくみ

3. 提言要旨

- ・幼稚園の実態から幼児が自主的に遊び、自分の思ったことを素直に言ったり、表現したりして友達とかかわり、生き生きと活動できる環境作りを工夫し取り組んできた。
- ・環境作りの中で幼児が自由に好きなものが作れるように製作コーナーを設け、幼児が友達とかかわりながら遊びに必要なものを意欲的に作ったり、作ったもので遊べるように教師も加わっておこなったことで、クラスだけの活動が他のクラスへと広がりを見せた。
- ・一日の流れに柔軟性をもち、日常、幼児が自然にくり広げられている遊びを取り上げ、全クラスの交流へと進め、幼児が十分に活動し満足感が得られるようにゆとりを持っておこなった。
- ・実践を進めて教師からの方向づけがないと遊びが持続しないので、ごっこあそびを多くして友達とのかかわりを深めながらその子の欲求がつかないことがあるので、遊びを通してひとりひとりが興味を持ってできるよう、欲求をみだしてやりたい。作ったりの作業については、教師自身が好きになってアイデアを幼児に与えたり、認めたりすることを大事にして研究を進めていき、楽しい造形あそびをくり広げていきたい。

4. 公開授業 ◎題材名 遠足に行こう（5歳児）◎指導者 飯澤 ちず（旭川市立神楽幼稚園）

◎指導者より

- ・動物園へ遠足に行った経験から、子供達が動物に興味を持ち、大きな動物作りをしたいということで、幼稚園の中に動物園を作ったら楽しいのではないかとということで、半月ほどの計画で廃品やダンボールを利用して作りはじめた。作っていく中で、こういう物を利用したらこんな物ができるのか、ということに気づいたり工夫したり、友達の工夫を認めたりして、いろんな物ができた。期間が長かったのであきて今日の遊びがどれだけ発展するかなという不安があった。作る方に重きをおいていたので、作ることにいつもより夢中になり、予定の時間よりかかり、遊ぶ時間が足りなくなりました。今日、十分に遊べなかったので、作った動物などを持ち帰り、子供の発想を取り入れながら楽しく遊びを広げて続けていきたいと思っている。

5. 研究討議の内容

- ・遊びの時間が足りなかったとか、作るのに時間がとられ疲れがでてきたのではないかとというのは、造形あそびに主眼をおいているのか、ごっこあそびに主眼をおいているのかで、価値観が違うと思う。子供自身が楽しめ、子供自身の活動を取り入れたほうが良いのではないかと。
- ・楽しかった経験や体験が描いたり、作ったりすることのさきえになっていく。
- ・いろいろな素材があって、この素材で何々を作りなさいという取り組ませかたと、これで何々を

作ろうという方向で行く造形活動と、これで何ができるかなという造形活動への取り組みの2つの側面あり、これから何ができるかなという側面が理想のあるべき方向であると思う。

- ・環境作りを重視するだけでは、幼児の活動が広がらない。教師と一緒に作る、遊ぶという教師の姿勢があってこそ子供に影響をおよぼすということが大事である。
- ・子供達が生活の中での興味あることの動機づけということが大切。誘発源としても子供たちの意識によるものと、指導配慮、環境整備によるものといろいろある。
- ・意識として持つものと、実際に指導面であらわし生かすことは難しいと思う。
- ・誘発源となるものの受けとめ方や、方向づけについて考えていく必要があると思われる。

6. 討議のまとめ

- ・造形あそびとは造形あそびが一緒になっていけば造形あそびということではないと思う。
- ・造形あそびとはかならず物を作るとか、形になったものを作らせねばならないということではない。作ったものであそんだ、というのが造形あそびとはいわない。
- ・創造して作りだしていくということを楽しみ、創造し、作りだし、工夫するという習慣をつけていく。これが造形活動、造形あそびである。
- ・幼児の生活そのものはあそびであり、あそびそのものは生活である。
- ・あそびを大事にすることは幼児にとってあそびは生活であるから、その中で知識を広げることにもなり、創造性をやしなうことにもなる。だから、ごっこあそびを広げ、さかんに活動させることは知識や経験を高めることになる。
- ・何々あそびという場合には、目的やねがいを持っているが、幼児のあそびそのものは基本的には目的がなく、「ああ楽しかった」「おもしろかった」である。そういうような考え方を幼児の場合の造形あそびの中に入れていかないと、目的をどんと出してしまうとだめではないだろうか。
- ・楽しかったということの基本にして、その基本の中で子供達が何を工夫し、考えてやろうとする態度や習慣が身につけていくならば、この造形あそびに価値がある。造形あそびの基本的なねらいはそこにあると思う。

公開授業一覧

領域	年齢 学年	題 材 名	氏 名	学 校
造形的なあそび	1	あきかんであそぼう	木村 典義	附 属
絵 画	2	ありさんのくに	栗 岡 ひとみ	北 光
	3	遊びの中から (版画)	長 瀬 優	千 代 田
	3	草むらのできごと	長 田 和 代	日 章
	6	底なし沼(アサムサクト)ーお話の絵ー	宮 崎 晃	緑 が 丘
	6	力いっぱいひっこぬけー人と人のかかわりー	新 井 好 恵	旭 第 三
	6	わたしたちの用務員さん (版画)	伊 藤 有 為 男	神 居
	デザイン・工作	2	ジャンプ大会	佐 藤 修 司
2		この木にと～まれ	土 屋 るみ子	千 代 田
5		音の出るかべかざり	市 野 恵 美 子	高 台
彫 塑	6	一本の丸太から	高 野 亮	緑 新
	6	歯をくいしばって	石 垣 広	永 山

絵 画



絵 画



絵画(版画)



彫 塑



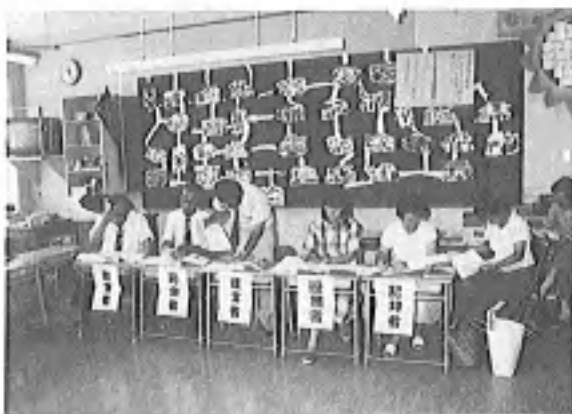
デザイン・工作



彫 塑



絵画(低学年)分科会



デザイン・工作分科会



分科会 A—5

小学校（造形的なあそび）

司会者 小杉 信雄（上川）
助言者 山宮 喬也（網走）
提言者 飯塚 礼二（旭川）
記録者 宮本 義明（旭川）

1. 分科会テーマ つくる心のひろがりと深まりを求めて

2. 提言主題 造形的な遊びの位置づけと発展を願う。

3. 提言要旨

(1) 領域のおさえ

遊びは子どもの生活であり、生命である。遊びの中で新しい体験をし、それを楽しみふけて、さまざまなことを体得し、遊ぶことを通して創造活動の土台作りをしている。

(2) 造形的あそびと材料

人工物や自然物、造形的あそびの材料は豊富であるが、「何が子どもの活動を喚起するのか」を見きわめる必要がある。中でも、土、砂、新聞紙などを使っての全身的な遊びは子ども達に喜ばれる。

(3) 造形的な遊びの発展

旭川では、全校的、学年的行事の中で行われる「夏まつり」「冬まつり」「集会活動」などで、一つのまとまりのある活動として、造形的あそびが多く取り入れられている。

4. 公開授業 ◎題材名 あきかんであそぼう（1年） ◎指導者 木村 典義（附属小）

◎指導者より

(1) 造形的あそびと年間計画

○年間5題材を計画し、時数にして12時間造形的あそびに配当している。

(2) 指導計画

○3年生の「空かんを生かす」単元活動に招待されたことを契機に「あきかんであそぼう」を3時間扱いで計画を立てた。

- ・1時間目は、遊びの見通しをたてる中で、どんな遊びができるか話し合わせる。
- ・2時間目は、本時であるが、一人遊びからグループ遊びへ広めることを意図した。
- ・3時間目は、自校体育館を使用して、みんなで遊ぶことを考えている。

(3) 授業の反省

○一人遊びからグループ遊びへと発展させたかったが、子ども達は一人遊びをすてきれず、グループ遊びに入りづらかったようである。従って、本時は一人遊びだけにして、グループ遊びにする必要はなかったと思う。

○空かんをつぶして遊ぶ発想はなかったが、子ども達は空かんをつぶしてアーチ形の物を作っていた点は、工夫して遊ぶことから良かったと思う。

5. 研究討議の内容

(1) 材料「空かん」に手を加えたことについて

子ども達は、日頃見慣れている空かんには、特別の注意を注がないが、2色による3本の縦線を入れたことによって、今までにない興味、関心を持たせる効果があった。日頃見慣れている材料に手を加えることによって、今までにないイメージを持たせる効果があるので、今後十分考慮していく必要がある。

(2) 棒を持たせたことについて

中央に積み上げてある空かんを、手で持って行くのではなく「棒で転がして自分の場所まで運ぶ」という条件をつけたことによって、子どもは変化する色に気づき、中には空かんの「色集め」に驚く子もいた。本時の授業は、野放しの遊びではなく、どのような方向へ遊びを広げ、深めようとしているか、しっかりおさえられていた授業であった。

(3) 材料の保管について

- ・各家庭に分散し、保管してもらう方法がある。
- ・保管しきれない場合は、材料をおいておく期限を決め、その間十分遊ばせてから処分する方法がある。
- ・造形的あそびと言うと大物材料を想像するが、小物のあることを考えるべきである。

(4) 造形的あそびと評価

- ・優劣をつけることではない。
作品を並べてみて優劣をつけるのではなく、遊びの中で子どもがその題材とどうかかわっているか、又は、授業の中で教師が子どもと、どうかかわっているかを見ることである。
- ・見とどけ、方向づけるもの。
結果だけを良いとか、悪いとか格づけるのは評定であって、評価は、子どもが遊びの中で意欲的であったか、かんを転がすだけに終わったのか、転がすことから並べることへ発展できたかなど、今、子どもがどんな過程を通過しようとしているのか見とどけたり、助ましたり、方向づけしたりしてやるのが、造形的あそびの評価ではなからうか。

6. 討議のまとめ

子ども達がエネルギーに活動したり、夢中になったりしているとき、創造につながる遊びをしていると言われているが、本時の授業で、次の3点がおさえられていたことが大変よい。

- (1) 棒を使って空かんを転がすことが、遊びを楽しめるものにさせた。
- (2) 山のように積まれた空かんを、われ先に取りようとする子どもの心理と、くずれる空かんの音が遊びを一層夢中にさせた。
- (3) 各自が持てる空かんの数を決め、所謂、知的要素をおさえであったことが大変よかった。

教師も、子ども達と一緒に感動できる教師でなければならない。遊びの名人である子ども達と交流しながら、造形の基本的な事柄を捕えるきっかけを、チラリ、チラリと与えながら楽しく、力いっぱい造形活動をしていきたいものである。

分科会 A—6

小学校（絵画A・低学年）

司会者 飯塚 強（旭川）

助言者 西 弘治（釧路）

提言者 高橋 貞一（旭川）

記録者 居島アヤ子（旭川） 坂本 幸（旭川）

1. 分科会テーマ つくる心のひろがりと深まりを求めて

2. 提言主題 一人ひとりの子どもに表現の喜びを育てる生活に根ざした題材のほりおこし

3. 提言要旨

- ・人間本来の姿であったはずの生活に必要なものを、自らの手で創り出し、使うという素朴な感動や興味を呼びおこすために、子どもの発達段階を考慮し、子どもの身のまわりから喜びと興味や関心のもてる成就感があり、持続していく内容の題材をほりおこし与えてやらなければならない。
- ・楽しい遊びと豊かな経験をさせる——経験の掘りおこしと、よりよい人間関係の育成
- ・興味をもたせ動機づける ——色々な角度から観察し、創造させ、みつけ、カードなどに記入させる。
- ・良い作品に多くふれさせる ——校内作品展、市内作品展、市内絵画展の開催、市の道立美術館の利用。
- ・くらしに結びついた題材選び ——校内の集会活動・身体測定・運動会・学芸会・理科の栽培・飼育、友達とやったという共通意識（心のかよいあい）自分で経験したということに興味関心が深く、知識も豊富で人に知らせたい、そしゃくしたいという題材に対する愛着が生まれると考えられる。
- ・地域の特性を生かす ——雪国の冬の仕事、雪像づくり、スキー・スケート・そりあそび、冬まつり、緑豊かな自然に恵まれた街（川の街、大雪山連峰）などから子どものくらしにできるだけかかわる題材をえらぶ。

4. 公開授業 ◎題材名 ありさんのくに（2年） ◎指導者 楽間ひとみ（北光小学校）

◎指導者より

- ・子ども達は、大変暑いのと参加者が多い為、普段の授業より活気がなかった。
- ・当初子ども達は、自己中心的なところが目立ち、手がおもうように動いていなかった。
- ・発見したこと、気づいたことを絵と文であらわす「題材みつけノート」をつけらせると大変喜んだので、日記がわりに毎日かかせた。その結果4ヶ月でかなり自分の思いを表現できるようになった。物事に対する気づく心とみつめる目と、えがく手も育ってきている。
- ・指導案では黒い台紙をして、自分でちぎった白い画用紙に描くとなっていたが、白い紙では四角にこだわるためと、黒い紙のほうが子どもがのったので、黒い紙をちぎり、ありの部屋をつくり、白い紙にはりつけたものに描いた。

5. 研究討議の内容

- ・指導計画の一時間目のありの様子についての話し合いは、どんなありの様子を観察したのか、又どんなしぐさを想像したりしたのか。
- ・合科的あつかいで、「ありさんをさがしてみよう」ということで遊具のある北光アスレチックでありの様子を観察させ、遊ばせたり、ありについて知っていることを発表させたり、地下のへやについて色々想像させた。その結果ぎ人化していった。
- ・学習に先だって子どもたちにみんなの絵をはりあわせて、今日のような集団画になることを知らせておいたのか。
- ・ありの国をつくるとしか言わなかった。そのほうが驚き、興味がわくのではないかと思う。
- ・全てお膳だてして子どもにあたえないほうがいいのではないか。
- ・子どもにどんな学習をしていくのか、みとおしをもたせると学習意欲が増すのではないか。
- ・低学年はみとおしを持たせることも大事だが、一時間、一時間の驚きも大切にしたい。
- ・子どもがななめになった絵を教師が、まっすぐにはった意図は何か。
- ・ありが水平になっていたのではりかえた。
- ・低学年の動物は、子どもの想像性が重視されるが、今日のような観察の結果、写実的でパターン化したものとのように評価したらよいのか。
- ・新しい素材を教材化とあるが、(地域素材の発掘) 図工では何をさすのか。
- ・この地方でとれる木材、粘土などを使うことを指している。このことについては、午後のB12番でさらに話し合っていたきたい。
- ・「みつけカード」は子どものくらしの中で発見したものを素直な目でとらえてかかれていた。そのおどろきを絵に表現していくことはすばらしい。

6. 討議のまとめ

- ・題材の選択は子どもに密着したものが必要であり、子どもの生活にあるものからえらぶべきである。子どもは動くものに興味をもつので、ありなどは適している。
- ・一つのテーマを多角的に追求していく表現技法があるが、そのよし悪しは別として、学習の目あてにあっていないか否かと、授業がうまくいったかどうかと、良い作品ができたかどうかとが大事である。今日の授業は成功であり、学習のめあてにあっており、ねらいにせまるものであった。
- ・子どもがまげてはった絵を教師がなおすべきか否かといわれたら、なおすべきでないと考え。それは、子どもの動きは教師の予想外の動きがあり、それを大事にしたいからである。
- ・図工科の良い授業とは、低学年を例にとれば子どもが遊びの中で、色を使ってイメージをふくらませることができ、物を見る目が養えて、色に感心が深まり、色をつくり出す工夫や苦心が経験できる題材をえらんであたえることである。

分科会 A-7

小学校（絵画B・中学年）

司会者 渡辺 正勝（上川）

助言者 一戸 信雄（空知）

提言者 角 邦雄（旭川）

記録者 森 智春（旭川）

1. 分科会テーマ つくる心のひろがりと深まりを求めて
2. 提言主題 一人ひとりの子どもに表現のよろこびを育てる、生活に根ざした題材のほりおこし
3. 提言要旨
 - ・道の主題を受けて旭川大会のテーマを設定した。
 - ・子どもの実態を踏まえた時、生活に根ざした題材のほりおこしが必要である。
 - ・題材のほりおこしをしイメージをひろげ、あらたな感動をイメージ化させるような手だてが大切であると考えた。
 - ・さまりきった既成の概念を打ち破り、五感を働かせ、自ら判断し、あらたな感動を表現できる子どもを育てるためにも、生活に根ざした題材のほりおこしが大切である。
 - ・気づきを大切にするには、授業中のみならず、事前・事後の取り組みが重要である。
 - ・主題設定に基づき、子どもの実態、めざす子ども像を踏まえ、基礎、基本をおさえながら、生活をもつめる題材を選び実践してきた。今後は、他領域、他教科との関連をおさえることも課題である。
4. 公開授業 ◎題材名 草むらのできごと（3年） ◎指導者 長田 和代（日章小学校）
 - ◎指導者より
 - ・学校環境と子どもの実態について（都市部の学校、自然環境の不足）
 - ・題材設定の理由について（季節を考慮した位置づけ）
 - ・本時迄の取り組み経過について（メモスケッチの採用と活用）
 - ・メモスケッチを本時見せておくか否かについては、よい作品をめざすために見せた。
5. 研究討議の内容
 - ・具体的な作品の中で、テーマとどのようにかかっているのか。——北海道らしい題材として、キタキツネを取り扱った事例もある。旭川市の自然をとり上げ、図鑑等も活用しながら、虫さがし、スケッチ等の積み上げを継続し、子どもたちのイメージを豊かにし、広げようと力を入れてきた。
 - ・子どもの作品が生まれる際につぶやき、途中の取り組みは、どんなことがあったのか。——スケッチの段階では、自分と虫との関係をとらえさせるように、会話文を書かせてきた。
 - ・メモスケッチの扱いはどうなのか。——本時、メモスケッチを見せないようにするという考え方もあったが、横においていても、こだわらないという考えで臨んだ。メモスケッチは常時使用するというのではなく、対象とのかかわりを考え、イメージをふくらませるために活用したいと考えている。
 - ・虫と自分との関係が生き生きとしていたが、条件設定はあったのか。——虫を大きくかいたり、

虫と自分とのかかわり、向き、位置（距離）等に留意させてきた。メモスケッチの継続や、O・H・Pを利用して、構図を考えさせる等の方法を取り入れている。

- ・メモをとり、何枚もかいていると、線が生きてこないのではないか。——メモスケッチの段階の感動と本時の新しい感動を大切にしていくことが重要であろう。
- ・本時はフェルトペンを利用したが、竹ペンを使ったり、用紙を工夫することにより、子どものイメージがさらに豊かになり、表現意欲も高まるのではないだろうか。

6. 討議のまとめ

- ・メモスケッチは有効に活用され、事前、事中、事後のつながりがよくわかった。構成がメモスケッチにとらわれるのではないかという見方もあるが、殆んどの子どもが、メモにとらわれずに、虫（対象）と自分とのかかわりをしっかりとイメージし、教師のねらいが、画面構成にはっきりとあらわれていた。
- ・主体は子どもである。子どもが満足できたか否かを最も大切にしたい。その意味でも、子どもが自ら判断し、画面を決定できたことはよかった。自己評価も大事にしたい。
- ・他教科との関連で題材を扱うことはよいことであり、有効である。
- ・表現が力強くなされているのは、学級づくりがしっかりしているからである。学級づくりが基底になっていることが大切である。

分科会 A—8

小学校（絵画C・高学年）

司会者	出倉	功（上川）
助言者	渡部	稔（上川）
提言者	紙谷	恒（旭川）
記録者	伊藤	久栄（旭川）

1. 分科会テーマ つくる心のひろがりと深まりを求めて
2. 提言主題 つくる心のひろがりや深まりは、造形活動の中で子ども自身が積極的に表現をくり返し行う時こそ意味がある。そのような活動を支え進めていくきめの細かい手だてを講じることが大切である。
3. 提言要旨
 - ・つくる心をひろげる——もののみかた、感じ方、考え方に新しい方向を持たせること、自主的な態度、たしかな表現力を身につけさせる。
 - ・つくる心を深める——自分が表現しようとするものへの集中力持続性によって生まれる姿勢や、作品を追求していくなかで修正を加え発展させていこうとする制作態度を高めていく様にする。
 - ・子ども達が五感をはたらかせ、自らの力で獲得させていくための手だてを講じていくことを育てることの中心にすえ、研究を進めていきたい。
 - ・研究の柱——ア、子どものくらしを見直す イ、生活をみつめる題材例
ウ、授業の実践
4. 公開授業 ①題材名 底なし沼(アサムサクト)(6年) ②指導者 宮崎 晃(緑が丘小)
③指導者より
 - ・「底なし沼」は数多くある北海道の民話の中でも旭川に関係ある話として、また、自然を愛する気持ちを育てたいと思い、問題もあるかとは思ったが題材として選んだ。
 - ・下絵はよく書けたと思うが、彩色の段階ではあまり意欲がみられないようだ。
 - ・手直しのきかないようなマヨネーズ塗りから、透明感のあるジュース塗りに子ども達の彩色のしかたを変えたいと思っている。
 - ・学校行事等の関係で、指導時間がうまく取れなかった。④題材名 力いっぱいひっこぬけ(6年) ⑤指導者 新井 好恵(旭川第三小)
⑥指導者より
 - ・子ども達は動きのない絵しか書けない。そこで、4月から時間の確保が難しかったが、3～10分程度ずつ毎日朝の会で、クロッキーの時間をとった。この結果、観察力の伸びた子、そうでない子等、個人差が大きい。描写力はまだ幼稚である。
 - ・モデルの選定については、15分ずつみんながモデルになれるよう仕組んだ。
5. 研究討議の内容
 - ① クロッキーの効果的指導法
最初は、人物全体を書かせても時間がかかり思うように書けない。そこで、身体の部分、例えば自分の足とか手の関節とかさわってみる等、自分でたしかめさせながらゆっくり書かせ、その

後、時間を短く、無駄な線は省略、動きのあるものへ姿勢を変えて、目の位置を変えて等、課題を与えながら書かせていく。

◎ 彩色について

- ・「色をぬりなさい」ではなく、「色で書きなさい」ではないだろうか。
- ・彩色のしかたについては、系統的に指導することが大切である。
- ・子ども達が使っている絵の具は、うす塗りには適していない。半透明なので彩度がさがる。斜めにしてたれない程度の濃さがいい。
- ・絵の具のぬり方については、子ども自身に考えさせた方がよいのではないだろうか。
- ・アニメ的な絵を好んで書くことについては、子ども達が生き生き活動しているのであればいいのではないだろうか。自ら生活していくうちに、造形活動に進んでいける。造形能力はどんな分野からでもつけていけるのではないだろうか。
- ・子どもが「どうしてこの絵を書くのか」これは核になる部分なので、しっかりつかまえて指導していくことが大切である。
- ・先生の書いた絵を提示すると、構図や色の使い方が似てしまう。子ども自身に試行錯誤させながら書かせたい。そして、アイヌの伝説に心を深めさせるようにさせたらと考えた。
- ・今までのクロッキーの成果を生かすためにも、モデルは一組でよかったのではないだろうか。
- ・子ども自身がいろいろな手法を学んでいく手だてをどう与えていくか、指導計画に無理はなかったか、子どもの心情をもっとほり下げるよう、きめ細かな指導が必要である。

(彩色・材料の選び方、造形する心)

6. 討議のまとめ

- ・1年間で子どもをどう変えていくのか。しっかりつかんでおく必要がある。
(子どもの物のみかたを広げる。子どもの感じ方を豊かにする。自分の考え方で創造的につくる)
- ・鑑賞は、常に表現とうらはらにあるもので、もっと力を入れるべきである。
- ・これでなければならぬと言うものはないが、題材のおくにあるものをしっかりおさえて指導することが大切である。
- ・園工の繊いな子どもを作らないようにしたい。
子どもの心を傷つけない。その子のもっている力をみつけ出すなど、子どもが意欲的に活動するよう配慮することが大切である。

分科会 A—9

小学校（版 画）

司会者 根本 正昭（旭川）

助言者 萩原 常良（上川）

提言者 新井 絹恵（旭川）

記録者 川村由美子（旭川）

1. 分科会テーマ つくる心のひろがりと深まりを求めて

2. 提言主題 一人ひとりの子どもに表現のよろこびを育てる、生活に根ざした題材のほりおこし

3. 提言要旨

・今回のテーマは54年度全道大会のテーマの見直しと積み上げ

(1) 児童の実態 情報化時代、物質が豊富で受け身で深く物事を考えず、集団遊びが出来ない

(2) 目ざす子ども像 生活や自然を五感を通して見、進んで美しさを発見しようとする子供

(3) 発達段階のおさえ 児童の興味、地域性をふまえ、一連の計画的ねらいと、縦と横のつながりを重要視

(4) 生活を見つめる題材を選ぶ くらしを深くみつめることにより、発想を広げ、気付いた事、感動したことを意欲的に表現させる。

・授業案の作制に当って、経験のほりおこし、学級作りを土台に感動する場面作りをする。

目標を焦点化する為、気付いた事をカードに書かせる。クロッキーの下書きを多方面からやらせ力をつける。3年では体の動きを中心、6年生では下絵を重要視し、今回は白コンテを使用した。下絵作りについて論議して欲しい。

・旭川における版画指導のあゆみ及び20回より行っている版画集による意識の高まりについて、版画集による長所・市全体に広がりを見せ技術も向上した。短所・似た作品が多く出来る。

4. 公開授業 ◎題材名 遊びの中から（3年） ◎指導者 長瀬 優（千代田小）

◎指導者より

・低学年では伸び伸び描いていたが、3年生になると要求と技術がともなわず、消極的になるので思ったように描けるよう指導したい。

・身近な興味ある遊びを題材に選び、体の動き、方向など詳しく観察させた。

・4月より描く力を伸ばす為、クロッキーをやり、ある程度成長した。

・描く材料を種々に変えてみた。（画用紙、色画用紙、鉛筆、割りばしペン、ふで等）

◎題材名 わたしたちの用務員さん（6年） ◎指導者 伊藤有為男（神居小）

◎指導者より

・人と人とのつながりを描くということで働くおじさんの題材を選んだ。

・5年生で週1回のクロッキー、6年生では週3回のクロッキーで人物を大体的確にとらえるようになった。

・材料をえんぴつ、コンテ、ふでと変えて児童の発想を広げようと試みた。

・ふでを使用すると思っさり描くようになり、粘り強くなった。

・目あてを持って描かせ、目あてが達成されたか、次におらうことは何かとカードに書かせた。

- ・今回、白コンテで下絵を描かせたが、 $\frac{1}{2}$ の児童が意図したように描いていなかった。

5. 研究討議の内容

- ・3年生の授業において、①前学年までとの内容の相違 ②動作表現は素晴らしいが、大きさについての指示不足の点 ③ボール紙の使用効果について
- ・下絵は黒い紙に白で描くと出来上がりのイメージがあらわれる。よって版木には薄ずみをぬって、黒い線で描く方が良い。版木に白コンテで線を描くと彫ったところと粉らわしくなり意味がない。
- ・下絵は上手だが、版画に出来上がるのを喜ばないのは、従来の版画制作方法に指導者が固執するからではないだろうか。スケッチをそのまま版にしなくても絵画として自由に創作したり、直接彫刻刀で下絵に緻密にこだわらず空間などを彫って加えていっても良いのでは。インクも黒に固定するのではなく、赤や青などいろいろあっても良いのでは。
- ・主題にせまるのには、単に技法のみに走るのではなく、描いている自分自身の気持ちと相手に対する気持ちが動きの中に深く生かされているのでなければならない。
- ・順次性をおって指導していれば、3年生では紙版画、6年生では木版画の完成となるので、この時期では、児童の自由な自発性を持って作品を創作していっても良いのでは。

6. 討議のまとめ

- ・絵画の中に版画が残っている理由をしっかりとふまえて、教師自身の版画観をしっかりと持つこと。
- ・下絵を緻密に転写して、その通りに刀で表現しようとするのではなく、刀を使って絵を描くのだというつもりで、表現方法をもっと広げて彫っていくと良い。

分科会 A-10

小学校（デザイン・工作）

司会者 築山 尚明（上川）

助言者 佐藤吉五郎（札幌）

提言者 青柳 明雄（旭川）

記録者 弘田 洋子（旭川）

1. 分科会テーマ つくる心のひろがりと深まりを求めて

2. 提言主題 遊びをひろげ、くらしを楽しくするデザイン・工作学習

3. 提言要旨

- ・幅広い造形要素をもつデザイン・工作活動を通して育てたい。育ててほしい子どもの姿、提言主題のおさえ、それに迫るための研究の手がかり（大会誌P104～106）
- ・実践のあゆみ——題材の掘り起こし、地域・生活に根ざした素材「木」への取り組み、授業実践、成果と今後の課題（大会誌P106～109）
- ・公開授業における木の生かし方

4. 公開授業 ◎題材名 ジャンプ大会（2年） ◎指導者 佐藤 修司（近文小）

◎指導者より

- ・子どもたちの「飛びたい」「飛ばしてみたい」という願いをかなえてやりたいので題材化した。
- ・子どもたちの「飛ばしてみたい」「うまく飛ぶまで、がんばって作りたい」という気持ちの高まりと、次時が夏休み後になるということもあって、遊ばせるほうに時間をかけすぎてしまった。そのため、本時のねらいの一つである、定木を使って直線を引かせる指導が不十分であった。

◎題材名 この木にと～まれ（2年） ◎指導者 土屋るみ子（千代田小）

◎指導者より

- ・仲よく、楽しく、のびのびと飾る作業をしてくれることを願っていた。
- ・チャームを聞き取れず、スタートが遅れ、時間内に授業を終わらすことができなかった。しかし、子どもたちの気持ちは聞くことができたので、次時で感想の発表をさせたり、本時の学習を生かしながらお話作りをさせていきたい。

◎題材名 音の出るかべかざり（5年） ◎指導者 市野恵美子（高台小）

◎指導者より

- ・木が堅く、彫刻刀を十分使いこなせないため、作業が予定通り進まない時もあったが、子どもたちは材料が木であることには抵抗がなく、意欲的に喜んで取り組んできた。
- ・全員が成就感をもてるように、アイデアスケッチの段階で、時間をかけて個人指導をした。
- ・苦勞して作った物への愛着やがんばって作りあげた思い出をもってくれることをねがい、更に、発想をひろげ、もっとこうしたいという意欲をもち続けて発展させてくれることを期待している。
- ・制作カードは、制作意欲を中断せず、子どもの重荷にならずに、ねがいを具現化していけるものになりたいと考えているが、まだ、不十分である。今後、続ける中で育てていきたい。

5. 研究討議の内容

- ◎ 一題材の中でどのように子どものねがいをおさえ、単位授業間の中にどのように位置づけてい

ったか。

- ・「飛びたい」気持ちの高まりを、人形、スキーづくりで表現させ、直線を引いたり、かたむきを考えたり、工夫することが、自分のねがいを満たしてくれることを遊びを通して気づかせ、満足するまで修正を加えながら遊ばせる。
- ・子どもの夢やねがいをこめた小鳥作りであり、木作りの共同作業でも、各グループの個性がみえてきている。なによりも、子どもらしさを出せるように進めてきた。
- ・苦労を重ねるごとに、子どもたちのねがいが具体化され、ふくらんできた。子どものねがいを題材化していくことも大切であるが、ねがいを育てあげていく授業・題材も大切ではないか。
- ・デザイン・工作では材料・用具などにかかわるきびしい条件があると共に、発想の自由性がある。授業の中で一見画一的に見える段階であっても、発想の自由性はそこから生まれ、発展していくと考えている。3つの授業には、その可能性が十分あると思う。

◎ 木を素材とする取り組みをどのように進めているか。

- ・木を扱う場合、基礎基本をどのようにおさえ、子どものねがいをどのように結びつけていくかが大切である。ねがいを具現化させるための技術指導をどうすべきか悩むところである。
- ・材料としての可能性は高いが、学年を考えて扱わなければならない。実践した結果、3、4年生で材料、道具経験を十分させることを中心とする題材をやり、高学年でねがいを積極的に構築していく素材として扱うとよいと考えている。子どものねがいを具現化させる時、用具をさけてとおれないので、基礎基本をどのようにかかわらせるかが課題となっている。
- ・道具の扱いになれさせるための時間をうみ出す授業のあり方や、基礎基本の系統性を確かなものにしていかなければならない。

6. 討議のまとめ

- ・子どものおもいが大事な領域である。木材を骨とする指導体系をつくったほうが旭川の風土、条件に合っているように思う。低学年では素材にふれる体験を授業の中で十分させる。中学年で素材にふれながら道具になれる。高学年で心にふれ、自分のねがいを表現していけるようにする。
- ・道具になれる、材料になれるという条件をしっかり踏まえたうえで、個性が発揮されていくものである。そこで、条件を授業の中に体系づけていくことが必要である。
- ・木にふれ、道具にふれ、苦労して作った、工夫して作った、できたという思い出は、作品がなくなっても、子どもの中に残っていく。思い出をつくることは大事な教育活動である。それ故に、条件は学習内容であり、その中に教師のねがいがしっかり位置づけられていなければならない。
- ・授業について、飛ばす、飾る、音を出すことに子どもたちの気持ちの高まりが十分見られた。
- ・雰囲気づくりが効果的であった。教師のねらいをもっと打ち出したほうがよい。
- ・材料経験をひろげたことは、的を射ている。十分遊ばせてやるほうがよい。
- ・子どもたちの考え方や応用したアイデアを取り上げていたが、更に、十分大切にすることが大事である。

分科会 A-11

小学校（彫 塑）

司会者 宮下 林（旭川）

助言者 佐伯 遼（室蘭）

提言者 吉永 一江（旭川）

記録者 増田 正子（旭川）

1. 分科会テーマ つくる心のひろがりや深まりを求めて
2. 提言主題 目・手・心を働かせて表現する喜びを（地域素材を生かした題材のほりおこし）
3. 提言要旨

- ・旭川のすばらしい自然環境を子どもたちに積極的に享受させるため、子どものくらしに結びついた題材の見直しを進め、地域や生活の中にある素材を取り上げてきた。
- ・子どもの心をゆり動かすために、動機づけや題材名の工夫をしてきたし、授業以前の活動場面を広げることなどから感動の場を設定してきた。
- ・素材や題材の工夫などを重ねるうちに、目・手・心を働かせて表現する活動に結びつき、少しずつではあるが授業に参加する態度や意欲が高まってきている。

4. 公開授業 ①一本の丸太から（6年） ②指導者 高野 亮（緑新小学校）

①指導者より

- ・この題材の前にジェルトン材を使って制作してみたが、彫りやすかったが画一化された作品しかできず、物足りなさが残った。
- ・自然木の丸太を取りに出かけたところ、非常に興味を示し、意欲的に取り組みはじめ、いろいろな顔の形を見出し出していた。
- ・はじめは、彫刻刀など小さい道具で作業を進める子どもが多かったが、作業が続く中で自ら必要性を感じ、木工バイス・のこ・サフォームなどの大きな道具を使うことができるようになり、また、作品の全体を見回しながらつくることができるようになってきた。

②歯をくいしばって（6年） ③指導者 石垣 広（永山小学校）

③指導者より

- ・こどもたちは、意欲的に友だちの顔を見直したり、触れてみたりしながら、歯をくいしばってがんばっている友だちの顔づくりに取り組んでいた。
- ・力が入った感じを生き生きと表現するために、全体と部分の調和を考えながら、どっしりとした塊の感じをとらえさせたいと考えた。
- ・前向き・横向きなどのデッサンを何回もしたり、塑像する時にいろいろな角度から見回すことによって、顔部全体と部分とのつながりなどを、こども達自身気づいていくことが、できるようになってきた。

5. 研究討議の内容

研究討議の柱

“つくる心のひろがりや深まりを育てる手だてはどのようにしたらよいのか”

- 1) 新しい地域素材を教材化する。

- 2) ぐらしに結びついた題材を選ぶ。
- 3) 楽しい遊びと豊かな経験をさせる。

討議1) こども達にとって地域素材を使うことと市販されている教材を使うことのどちらが、意欲的に取り組み満足度も高いのだろうか。今回の「1本の丸太から」という授業では、こども達自ら自然木を採集に出かけ、自分でつくりたい部分を選び切り取っているが、この時からすでに意欲が生まれ、ふくらみは始めている。また、同じ様に1本の丸太からこまづくりをした3年生の取り組みについての報告もあった。

討議2) それぞれの恵まれた地域の特性を生かした題材のほり起こしという事も大切であると思われる。今までの木や粘土の彫塑学習に加えて雪国では雪や氷と親しむ中より様々な題材が生まれてくるだろうし、大いに取り組ませたいものと考えられる。

討議3) 新しい地域素材を教材化して、題材をほり起こした時に、「歯をくいしばって」のうでずもう大会のような事前の活動がこども達の意欲づけとして必要なのではないだろうか。また、小枝や木切れを取りに行き、遊びながら作品をつくるという豊かな経験も大切であると思われるし、そのような活動の場を多く設定しなければならないと思われる。

6. 討議のまとめ

上記のように討議されたのだが、素材ということについては、地域によっては手に入らないものもあると思うが、我々指導者はできるだけ地域素材を教材化し、取り組みやすいように十分な手だてを考えて、こども達に与えるべきであると思われる。そして、ぐらしに結びついた題材・学年に合った題材を立て、児童の発達段階や興味などを踏まえて、順序立てていかなければならないであろう。

今回は、「つくる心のひろがりと深まりを求めて」というテーマの方向で進んでおり、授業の中、提言の中でもそれが押さえられていたし、また、こども達も喜びを持って意欲的に取り組んでおり、とてもすばらしい研究の取り組み、成果だと言えよう。これからも、こども達が目・手・心を働かせて表現する喜びを得るよう一つ一つの授業を大切に積み上げて行きたいと思う。

公開授業一覧

領域	年齢 学年	題 材 名	氏 名	学 校
絵 画	1	私と友だち (版画)	品 田 潤	東 陽
	3	校舎・心に残る場所を描こう	加 藤 隆	六 合
デ ザ イン	1	人工物からの構成	菅 原 敏 光	永 山
彫 塑	1	動物をつくる(ヤギ)ー石こうのじかづけー	大 槻 茂	東 光
	2	頭像をつくるーテラコッター	坂 野 潤 治	春 光 台
工 芸	1	ウッド・クラフト	飛 弾 野 弘 尚	東 明
工 芸	3	自由制作「大作を作る」	西 田 武 文	華 女 高
	2	照明具の制作(金属工芸-メタルレースによる)	橋 詰 忠 晴	東 高

絵 画 (中学)



絵 画 (中学)



彫 塑 (中学)



彫 塑 (中学)



デザイン (中学)



工芸 (中学)



工芸 (高校)



工芸 (高校)



彫塑分科会 (中学)



工芸分科会 (高校)



分科会 A-12

中学校（絵 画）

司会者 牧野 和夫（旭川）

助言者 大久保正義（旭川）

提言者 川合 薫（旭川）

記録者 鳥本 捷夫（旭川）

1. 分科会テーマ つくる心のひろがりと深まりを求めて

2. 提言主題 対象とのかかわりを深めながら、自己表現を大切にする授業のあり方

3. 提言要旨

- ・子どもの持つ感性と自己を表現する意欲を持続させるためには、対象とどう出合わせるかが重要である。
- ・創造活動は日頃から想いを練り温めておく過程が必要である。自分でとらえたイメージをあたためふくらませる授業前の取り組みを大切にしたい。
- ・導入時の取り組みとして、作文・制作カード・参考作品などを通して子供の想いを高め、交流させ、表現の方法を明らかにさせたい。

4. 公開授業 ◎題材名 校舎・心に残る場所を描こう（3年）

◎指導者 加藤 隆（旭川市立六合中学校）

◎指導者より

- ・スライドによる校舎の様子の説明
- ・六合中は全面改築をま近にひかえている。姿を消していく現校舎をしっかりと自分の目でとらえさせるとともに、3年間の歩みを見つめさせたかった。
- ・前年度は校舎の片隅にあるもの（ストーブ、靴箱の中のくつ、リヤカー等）身近なものに目をむけて描いてきた。その発展として本題材をとりあげた。
- ・ひとりひとりのイメージを定着させるための、作文、制作カードの使用。

5. 研究討議の内容

- ・子供に提示した3枚の参考作品を選んだ理由とその使い方は。
- ・描きたい場所を決めた動機、ねらいがはっきりしているもの。感想の引き出せるもの。
- ・細い筆で描いている生徒が多いが、アドバイスがあったのか。
- ・2年までの指導で身につけた子供の財産である。筆は自由に選ばせ使わせている。
- ・心に残る校舎ということであれば、外観を描く生徒があってもよいのでは。
- ・時期的なものや天候、指導面などもある。生徒との話し合いの中でしばらくこんでいった。
- ・イメージには広い意味があり、何がイメージなのか、それを題材とどうとらえるのか、非常に難しい問題である。
- ・どうして選ぶのか、どう表現したいのか、作文、制作カードなどを通してはっきりさせたい。
- ・校舎を題材として取りあげたことはすばらしい。絵画の場合教え過ぎてグメになることは多いが、スライドを見せながら教師の見方をぶっつけていくことがあっていい。一層のイメージの定着につながる。

- ・題材設定にあたっては、教師のもつ造形的・情動的、子供に対する思いやりなどのイメージが総合的に盛り込まれ、動機づけを与えることにつながる。
- ・立体的に授業は構成されていた。
技術と心情はからみあっている。子供が悩んでいるのはどちらなのか見きわめる必要がある。透視図法などの指導がこの授業の中に少し入っていたら、作文で表現されていた気持ちが生かされたのではないか。
- ・どちらかという、対象に対して叙情的ではなく、叙事的にあつかう授業として組み立てている。
- ・9時間、10時間に至る授業で意欲を持続させながら、しかもイメージをふくらませ、高めていくことは大変である。時間の経過とともに感動も薄れていく。場所の設定については人物などを入れ、生活の匂いを出す工夫も大切である。
- ・これらの題材の出た理由の一つは、造形活動を通して中学生に与えたい基本的、基礎的能力を高めることにある。
題材を決める場合には、教師のイメージ、願いが準備されなければならない。そして子供の側に必然性があってはじめて表現の喜びや、造形する心が養われる。
- ・紙の大きさや、表現材料など既成のものにとらわれず、どんどんそれを変えていく努力も必要である。

6. 討議のまとめ

一人ひとりをよく見つめながらの個別指導が重要である。子供の持つイメージをコントロールするのではなく、教師自身が発想を変え、あるいはイメージを広げていくことが求められる。用具や材料なども既成概念をやぶり、生徒に選択の幅をもたせたいものである。さらに、授業の中だけでなく、日常生活の中で進んで美術的なものに取り組んでいく子供を育てていく努力も必要である。

分科会 A-13

中学校(版画)

司会者 入井 峰生(旭川)
助言者 坂田 武夫(札幌)
提言者 及川 輝夫(旭川)
記録者 鳥本 淳子(旭川)

1. 分科会テーマ つくる心のひろがりと深まりを求めて
2. 提言主題 対象とのかかわりを深めながら、自己を大切にする授業のあり方
3. 提言要旨

- ・題材を身近な暮らしの中から選び組み立て、黒い中に明るい部分をとらえて描く仕事をしている。
- ・線の集合体による明暗の表現から彫りの工夫を心がけている(裏に黒画用紙を貼ったガラス、60°の三角刀を使用)。
- ・ひとりひとりのイメージが見えるよう導入時に作文・制作カードを使用。
- ・彫ることを考えた絵づくり、暗いといわれる版画の進め方、中学校でどの辺まで求めるべきか。

4. 公開授業 ①私と友だち(1年) ②指導者 品田 潤(旭川市立東陽中学校)

②指導者より

- ・クロッキーを通して友だちを描き、特徴や考え方までとらえさせる。
- ・黒い紙に白鉛筆、ポスターカラーで下絵練習をした。
- ・仲良しの友だちの作文(描きたいこと、感じたこと、知っていること、気をつけたいこと)を書かせた。
- ・彫りは最低のことだけ教えて自由に彫らせたい。
- ・授業後は作品集づくり(友だちを大切に、作品を大切に)を考えている。
- ・今日の授業では自分なりの工夫で彫っていたし、少しずつ作品も良くなってきていると思う。

5. 研究討議の内容

- ・三角刀の線が細いのは、特に指導しているのか。それはなぜか。
○線の集まりが面になることがつかめるので下絵の段階から意識して描かせている。
- ・木版で線の集合体で明暗をとりあげる理由は。
○描いた通りに彫れ、刷れ、できるという成就感が得られるため今まで取り組んできたが、木版の美しさを求める点が問題で特性を生かした彫りを求めている。
- ・デッサンもしっかりしていて非常にうまいが、知的に整理されていて木を生かした材質感が見えないのがさびしいのではないか。
○今までは絵づくりを考えてきた。材質感について考え出したのは昨年からです、今日の授業にもそれはあったと思う。
- ・作品の感想として、線の集積の感じを強く持った。暗いといわれる評価の理由は何か。
○黒い板に描くせいか、黒い部分の多い作品が多くメゾチントのような感じになる。切り出して引っかいたり、平刀でそぐ子もいるが、色々な方法が使われ、その中に木目が出ることもあり、彫りの深さにも変化がでる。これも木版の良さだと思うが。

- ・中学生は物を見て表現する時期なのでその方法もなかなか良いと思うが、それを残しながら思い切った表現、新しい方法を見つけていくのが良いと思う。作品を多く見せることも必要と思う。
- ・陰刻が多いから暗く感じるのではないか。技術指導からくるワンパターンの感じ、小手先の技術が優先されたため生命力が押さえられている感じがする。しかし方法としては悪くないし、すばらしいものがあるので、これを殺さないで、両方の良い所を生かし子供の成就感と結びつけ指導していくと更に良くなると思う。子供は技術的なものも要求しているし、とても参考になった。
- ・題材の開発について
 - 新しい題材を見つけるのではなく、学校生活の中から見直しや深くかかわっていく方向へ進めている。
- ・テーマの選び方も大切だ。友だちを表現する時、手を入れる指導があるとやらせた感じが出て子供の持つ心が無くなるので人間をつかむ事がむずかしい。働く人の場合も作り物くさかったり、テーブルの上に並べられたものを描くのも子供とのかかわりあいを考えるとむずかしい。
- ・授業の感想として、子供のほめ方がやわらかく子供を大切にしている。又、子供が、こうしたいという自主性を大切にしている。子供のねらい（なぜこの構図か、なぜこの彫刻刀を使ったか）に、はっきりした意図が見えなかったが、それがはっきりすると更に良い授業になったと思う。

6. 討議のまとめ

技術的には本当にすばらしいし、版面の力もしっかりついている。今まで成就感が得られるために線の集合体で表現する方法がとられてきたが、出来ばえを意識し過ぎずに木版本来の美しさや、多様な表現にもっていくために、刀の使いわけをする方向へ広げたい。

又、テーマに基づいた授業であるためにも、もっともっと子供中心に確かめ合わせ、話し合せて良いし、失敗をおそれず子供の自主性を認め、子供同志で見つけさせていくことが今日の教育のあり方として必要であろう。

分科会 A-14

中学校（デザイン）

司会者	大西 勤（上川）
助言者	吉田 一雄（旭川）
提言者	大口 優（旭川）
記録者	吉本 博二（旭川）

1. 分科会テーマ つくる心のひろがりと深まりを求めて
2. 提言主題 見とおしをもち、ねがいの表現できるデザイン学習
3. 提言要旨

- ・領域のおさえ 現代の情報化社会におけるデザイン学習の見直しを図り、本来のデザイン学習である人間生活の美と用を結びつけ、豊かな感性を養う分野であることを認識させたいと考える。そのために、教師の大人の感覚での指導がもち込まれ、子ども自身のアイデアが生かされない授業の組み立てがなされている現在の指導を再検討すべきではないだろうか。子どもの豊かな発想を生かし、発展させ、条件や、適切な技法を駆使し、計画的な表現活動ができる領域であり、中学生にとっては大いに取りくませたい領域である。
- ・実践のあゆみ 昭和51年度から54年度の全道大会、旭川大会の研究を基盤に、研究の視点を3点にしばった取り組みの発表がなされた。

1. ねがいの表現できる題材設定 子どもたちが表現したいねがいを教師自身が把握し、ねがいの価値感や、どう表現させてやるか等を具体的にかみくだいた題材の掘りおこしが必要であろう。実践例として自己表現を中心課題とした「わたしのレコードジャケット」や「主張するイラストレーション」の作品の中から子どものねがいや表現の喜びなどをうかがうことができた。
2. 見とおしのもてる授業作り 子どもと教師との意志の疎通がなければ授業は成り立たない。そのために一題材の流れを最後まで見とおす手だて、制作の計画性、到達度を子ども自らが理解できる制作カードの利用も必要と考える。
3. 表現を生活に生かす デザイン学習はややもすると基礎学習に終わりがちであるが、制作した作品を日常生活の中に飾る、使うなどの目的で生かす題材の掘りおこしを試みてきたところ、自分の作品に愛着を持ち、次の学習に対しての意欲も身についてきた。

- ・成果と課題 きめ細かな教材の掘りおこしや場に応じた手だてを加えることによって、子どものねがいが表現できうるのではなかろうか。また、美術だけの時間だけでなく他教科、特活等で感性のある子どもを育成しなければならないことを全教師集団が共通理解をもち、指導にあたる必要があると考えている。

4. 公開授業 ◎題材名 人工物から構成しよう（1年） ◎指導者 菅原 敏光（旭川永山中）

◎指導者より

- ・観察表現から単純化へ変換させる指導計画で新しい美の秩序をつくりあげてくれることをねらった。
- ・構成学習で、自分で発見した形をもとに構成の学習が中心で、OHPの機器を使用し、子どもが

納得いくまで追求させてやる授業を組んでみた。正方形の中に構成させることは、多方向、縮小、拡大によって自分のアイデア、新しい形の組み合わせの気づき等を工夫でき効果はあったと思う。

5. 研究討議の内容

- ・身近な生活の中からの題材は自然物と人工物のどちらがデザイン学習に向いているのか。
 - ・授業の流れ、作品の見とおし、正方形を使用する意図、材料は何を使用するのか。
 - ・掲示作品の中に数字を組み入れたとはどんな意図があるのか。
 - ・正方形の中に色々工夫した構成をさせ、制作過程を吟味しながら進め、総合的な作品に発展させる。そのためには、題材設定を吟味し、デザイン学習本来の姿を吟味し、発達段階に応じた指導計画が必要と思われる。
 - ・発展教材としてレコードジャケット、校舎内の美化等を組み、デザイン学習の意識、意欲を出させる。
 - ・デザイン学習では平面デザインを多く取り入れているが、工芸デザインの分野を開拓してはどうだろうか。専門的なデザインをさせるのではなく、中学生の能力、技術力をふまえ、基礎的な見方、感じ方ができればよいのではないだろうか。
 - ・紀要15頁に教材の選定とあるが、中1から中3迄、デザインでは何を教えていくのか。実態をふまえた指導計画、題材設定をすべきである。
 - ・各学校の評価の仕方はどうなっているのか……5段階評価、多学級における成績のばらつきの問題、題材に積極的に取り組めない子の評価をどうするのか等の悩みが述べられた。
 - ・研究大会の作品展示の仕方をもっと工夫してはどうか…優秀作品だけに限らず、一学級全員の作品を展示することによって、評価の方法の手がかり等を得ることができる研究となるのではないか。
 - ・制作カードによる生徒自身の自己評価も大切であるが、教師自身が授業評価をすることが基本であるとともに、事前に一題材の指導計画を練り、一連の作品を生徒の身と心になって制作してみなければ、よい授業の構築はなされないだろうとの貴重な意見が述べられました。
 - ・色彩指導のあり方が話され、配色カードの作成(自作)、混色の仕方の指導、それに伴う用具はどうあるべきか…学年の系統性を考え1年生から基本的な技法、知識を指導すべきであり、用具についても、私物、校具の区別をはっきりし、物の基本的な使い方を身につけさせなければならない。また、中学生から専門家用の材料を使用させ、素晴らしい色彩効果、筆触等を学ばせ意欲と自信を持たせ実践している学校の報告がありました。
 - ・各地の実践の成果が沢山発表される中で、デザイン学習の応用(体育科のゼッケン作成)や、レタリング学習の発想の転換(明朝体、ゴシック体に限らず)が必要ではないか。
6. 討議のまとめ 授業中心の討議であったが、美術教育の基本をふまえるとともに現代っ子の性格を十分把握し、年間指導計画を毎年作成し、学年の系統性を考えた授業作りが大切である。更につけ加えるならば、生徒自身が美に即応でき「遊び心」を育てる教科にしたいと結んだ。

分科会 A—15

中学校(彫 塑)

司会者 寺原 実(旭川)

助言者 米谷 哲夫(札幌)

提言者 原 完(旭川)

記録者 長野 晃児(旭川)

1. 分科会テーマ つくる心のひろがりと深まりを求めて
2. 提言主題 新たな発見、感動をよびおこす主体的彫塑学習をめざして
3. 提言要旨

- ・10年前にも大きな粘土を使って頭像をやったが、指導過程を見直そうと研究を続けて来た。
- ・技能、造形要素よりも、子どもの側に立って、どんな題材が良いか考えた。
- ・見かけなくなったヤギを、ちょっと連れて来たのが、今回の授業。対象に触れて見る体験を大切に、又、対象とどんなつながりをもっている題材か、を大事にした。
- ・「イメージ」「ねがい」という言葉だが、ヤギは動作からつかみやすく、頭像は「ねがい」と結びつけにくいものだ。
- ・見通しをもって意欲的に、ということで、学習カードを作らせた。言葉や図の中で、分ることは初めから分らせるという、学習ノートのものである。
- ・良い題材をみつけ、対象と触れさせ、学習カードを使わせるということをおねらってみた。
- ・頭像の授業で、テラコッタにするため、塩ビ管、角材を今大会に向けて作ったので紹介したい。

4. 公開授業 ◎題材名 頭像をつくる—テラコッター(2年) 指導者 坂野 潤治(春光台中)

◎指導者より

- ・14学級の本校で、生徒は長続きしない、めんどくさがる、という傾向があるので、観察を重視して彫塑の授業を行っている。
- ・授業する中で、子供の動きが見れるように、と授業を工夫した。
- ・対象のイメージをとらえさせ、学習カードから「ねがい」が常にとらえられるようにと考えて授業を行って来た。
- ・今回、700gの粘土6個を使わせたが、可能な限り大きな作品を作らせたい。造形要素はあまり表へ出さず、大きな作品を最後までつくれば、と考えて授業をやった。きょう初めて生徒を立てて制作させたが、本時の反省ということが欠落しなかったか心配だ。

◎題材名 動物をつくる(ヤギ)(1年) ◎指導者 大隈 茂(東光中)

◎指導者より

- ・25学級規模だが、生徒は、動物に関心を示さなくなって来ている。ヤギを飼育してみて、野菜やグイズをやる子もあり、生きている動物に、じかに触れさせることは大切だと強く感じた。
- ・めあてをもって活動できる授業を考えた。「ヤギのオッパイ小さいね」「赤ちゃん産んでないからだよ」等、図鑑で見ると、実際に飼うのとでは、随分違くと生徒との対話から感じた。
- ・石膏に慣れさせるように工夫したが、「面白い」「ヤギらしくなってくる」「次の時間頑張りたい」等、生徒が言っているのもので、良かったと思う。

- ・サビの来ない、アルミ線、ステンレス針金線を使った。

5. 研究討議の内容

- ・質問「自己評価のカードにとりくんだのは？」答「前回の大会でもとりくんでいるが、この授業のためということでは、2年前から。」
- ・授業者「後ろからのデッサンは、視点など難しいので省いた。が、毛髪、頭は首と後頭部のつけ根、正中線など、へらなどではからせた。」
- ・提言者「彫像は、施設など、不備な点が多く、旭川では十分に取り組んでいない。」
- ・頭像に題名をつけるのは賛成だ。悲しいとか、楽しい顔、表情をつくらせると良い。強調、省略など考えると、もっとよくなる。
- ・ヤギは表情が出る。——授業者「心材で基本型を作らせ、曲げたり、引っ張ったりさせた。」
- ・頭像の表情は、とらえなくてよいのではないか。正面がつくりにくい。斜めを意識させないと横と正面のつながりがつくりにくい。
- ・旭川は、2人共、まじめな取り組みだ。頭像はアイデアがあって面白いが、私共は、ビニールに砂を入れて後でキリでつついて砂を出す方法をとっている。ヤギは計画性をもっているが、布などをテンブラにして貼ってもよいし、角など、石膏で作って差し込んでもよい。
- ・北海道の実践は、素晴らしいと思った。教え込むことと考えさせることを分けて考えていて、頭像も、ヤギもおさえるところ教えるところを指導者がピタリとおさえている点、素晴らしい。生徒の心をゆり動かすのは、計算には出てこない。こうやったらダメだったから、こうという点が良かった。回転台がないのかと思ったら、心棒でくるくる動いたのが素晴らしい。今まで心棒が回る授業はなかった。粘土の量が多いのにびっくり。耳と首のつながりに問題がある。心棒によるのか、表情と動きにつながるのかと思った。
- ・色々、本当に気づかせてくれてよかった。モデルの位置と制作者の位置で、作品に対するモデル配置がよかったし、イスの上に作品をのせていたのは良かった。生徒の背丈に合わせる工夫がほしかった。
- ・頭像では、首までのおさえを心棒でどうおさえるかが問題だ。

6. 討議のまとめ

- ・工夫されたことが、どう流れて、どう伝わってくるかが大切だ。
- ・中学校の頭像は、なぜ立っているのか。おているのは無いのだろうか。教材屋に使われているのではないか。考えてる、泣いてる、手や顔があって良い。
- ・「ヤギ」は、いろいろ表情があった。大変良かった。
- ・東光中のじかづけ、春光台中の大きな粘土、共に工夫を教えていただいて有難かった。
- ・旭川の取り組みが深まって行くので、今後が楽しみだ。

分科会 A—16

中学校（工 芸）

司会者 小松 吉隆（上川）

助言者 伊藤 功（上川）

提言者 山理 利春（旭川）

記録者 菅 導信（旭川）

1. 分科会テーマ つくる心のひろがりと深まりを求めて

2. 提言主題 素材を生かし、楽しく豊かに制作活動をさせるには、どうしたらよいか

3. 提言要旨

- ・領域のおさえ——生徒ひとりひとりの意欲を高め、創造性を促す学習活動の場であるとともに、発想をより確かな構想へと高める個別指導の場でもある。
- ・研究のねらい——生徒ひとりひとりが「何をどのように表現していくか」を主体的に探究することに主眼をおき、生徒の個性、能力に焦点をあてた授業および、美しいものに興味、関心を持たせ鑑賞力を高めるための工夫等を行った。
- ・具体的な手だて——試行学習、学習目標分析表の体系化、観点別学習状況評価カード、制作カード、個別指導の充実等についての提言。
- ・実践例として——第1学年「紙を糊んでつくる」の指導案および実践の結果と考察、成果と課題の提言がなされた。

4. 公開授業 ◎題材名 ウッド クラフト（1年） ◎指導者 飛弾野弘尚（東明中学校）

◎指導者より

- ・21世紀は機械文明から生物文明に移る時代であるというおさえに立ち、生き物の持つ優れた性能を見直していきたい。
- ・日常の生活用品の中においても「用と美」への反応を豊かにさせていきたい。
- ・木材の良さを再発見させ、自分で加工していく楽しさと意欲を高めてやりたい。
- ・ウッド クラフトを通して、生産技術ではなく生活技術を学ばせ、工芸に興味を持たせると同時に、日常の生活の中に生かしていくきっかけをつかませたい。
- ・意欲づけのための参考作品の提示は毎時間必ず行うようにしており、また、技術的に高度になりすぎないように、観点をしばった目標の設定等を心がけている。
- ・「自己評価カード」は、造るよろこびを確認したり、コミュニケーションの場としても活用している。

5. 研究討議の内容

- ・（はじめに）研究討議は公開授業を中心に進められ、特に授業の中で女子生徒に多く見られた。マンガ・キャラクターに対する教師側の受けとめ方や、指導姿勢についての意見交換へと移行して行き、活発な論議に終始しました。

以下、その流れにそって記していくこととします。

◎（授業について——参会者から）

- ・材料や道具が合理的に工夫されており、生き生きとした授業が展開された。

・学年別工芸カリキュラムについてどのようになっているか。(パズル・紙工芸・ウッド クラフト等
をとり入れて行っているが、今までのところは、いろいろ工夫して、素材や題材を毎年変えるよう
心がけて行っている。)

・集成材を素材として取り入れた理由は？(いろいろあるが、くるいが少ない、強度が高い、色違い
の美しさの利用等の理由で取れ入れた。)

◎ (まんが・キャラクターの取り扱いについて)

(条件つき許容意見)

・工芸領域の中では、題材によって、まんがのキャラクターが現れやすいものもあるが、画一的には
禁止していない。模倣であっても、作品にぴったりしたものもあり、そこからきっかけをつかんで、
独自のなものへと発展していくこともあるのではないだろうか。

・本時のウッド クラフトのように、自分の部屋で自分だけが使用するようなものを造る場合、子ど
もによっては、まんがのキャラクターにうずもれた環境にやすらぎを感じているものもあり、将来
においても愛着を持っていくことも考えられるし、そこから工芸、ひいては造形に対する興味があ
いてくる場合もあるのではないだろうか。

(反対意見)

・造形活動において、まんが・キャラクターはいっさい認めないということで指導している。独創性、
創造性を高めるため、抵抗があってもおしつける ((例)条件学習) ようにしている。

・工芸領域の場合は特にアイデアスケッチ以前の段階での指導が必要であり、私は、「世界に一つし
かないものを造ろう」ということで指導している。また、一つのキャラクターをつくるのに制作者
が大変な努力をしているということにも気づかせるようにしているし、制作過程の中でも、自分
の考え方が出てくるような教師側としての手だても必要だと考えている。

6. 討議のまとめ

・授業については、参考作品、道具の工夫、適切な導入等により、楽しく、質の高い授業が進めら
れた。

・マンガ・キャラクターについては、いずれかの段階で脱皮させてやる手だては必要であるが、個
人差や実態、教材によっても、その取り扱いの比重が異なり、結論は今後にもたねばならないも
のと思われる。

分科会 A-17

高等学校（工 芸）

司会者 平田 和也（旭川）

助言者 荒井 善則（旭川）

提言者 橋詰 忠晴（旭川）

記録者 長尾 教逸（旭川）

熊本 高工（新潟）

西田 武文（旭川）

1. 分科会テーマ つくる心のひろがりと深まりを求めて

2. 提言主題 ・青春時代の宝物として、工芸作品を制作しよう。

・校外展への取り組み。

3. 提言要旨

・本校工芸学習の特色と願望

・本校における工芸のあゆみ

4. 公開授業(A) ◎題材名 照明具の制作、(2年) ◎指導者 橋詰 忠晴(旭川東高)

〃 (B) ◎題材名 自由制作「大作を作る」(3年)

◎指導者 西田 武文(旭川藤女高)

◎指導者より

(A) ・約70点の生徒作品を展示するが電気工事不十分であったため、作品全部に点燈することが出来なかった。

・33年間の教員生活の反省にたち、常に工芸教育と心の問題にふれ、生徒たちに満足感を与えるための積み上げの毎日であった。

・東高工芸科年間指導計画表を配布し、これに基づく工芸授業を紹介。

・工芸を選択してくる生徒は指導教師の厳しい姿勢を理解して来るようである。

・3年生になるとレベルの高いものに挑戦している。

(B) ・陶芸は58年度から教科に取り入れている。

・何か生徒が真剣に打ち込めるような内容をと考え行うことにする。

・授業は3単位で行っている。

・題材を与えると熱中して取り組むことのできる生徒たちである。

・電気がまが故障しがちなもので、時間との競争である。

5. 研究討議の内容

・東京では工芸教育を盛んにしようとの声はあるが工芸教員の確保が思うようにならず、なかなか進まない。

・千葉県内では約40校もの工芸の専任がいる。

・大規模高校が増え、芸術3教科では間に合わなくなっている。

・8間口程度の高校にも工芸教科が必要である。

・工芸教育は一般職員の理解をなかなか得られにくい面が多い。

・授業展開の中で、ビデオ等の器具を活用すると生徒達の受けもよいようである。

6. 討議のまとめ

- ・大学で工芸教育法を教えてきたのだが、今回の橋詰先生の授業内容は日本一である。
- ・工芸教科は日本の伝統（文化財）が生きてくる大切な教科である。
- ・陶芸でも古い民芸等を取り入れる必要がある。
- ・地域に住まう活動家や工芸のプロを活用するのも大変よいことである。
- ・チェコスロバキヤでは午後民間の自由学校を持ち、子供達はそのアトリエに出かけて自由に活動している教育形態が見られる。
- ・論議はあるが、コンクールを目当てに行う指導も期待して行きたい。
- ・東海大工芸科は木工から出発したインテリア、グラフィック、コンピューターに発展する。作品のレベルが年々高まり、それに形体のデザインや技術的な面に深まりが出てくれば申し分ない。そのためにも地元の学生が多く来てほしい。
- ・オリジナリティーと技術とをいかに結びつけるかが大切である。
- ・高校での工芸が不足しているが、美術教育には必要な分野であるので、是非充実拡大する方向に進めたい。
- ・文化会館の展示作品には実にすぐれたものが多かった。

分科会B

・内容／各地の実践報告と交流

会場	校種	分科会 番号	領域	司会者	提言者	助言者	記録者
幼稚園	が園	1	造形あそび	徳島市東条 今野 正 治 札幌市東区 永井 基 子	札幌市東区 金 田 時 子	札幌市東区 長谷川 伝 札幌市東区 田村 幸子	大宮市中央区 古小高 利 枝 札幌市東区 中 島 真由美
		2	絵 画	徳島市東区 守 野 綾 子 札幌市東区 小 尾 高	札幌市東区 水 下 恵 子	札幌市東区 佐々木 理 恵	札幌市東区 鈴木 淳 枝 札幌市東区 山 崎 祥 子
		3	総合活動	徳島市東区 岩 間 昇 札幌市東区 吉 田 優 雄	札幌市東区 坪 井 龍 彦	札幌市東区 鹿 島 健 一 札幌市東区 小 関 利 雄	札幌市東区 ユリアナ 大 西 恵 子 札幌市東区 高 橋 由美子
		4	デザイン・工作	徳島市東区 大 口 章 子 札幌市東区 鈴 木 寿 夫	札幌市東区 向 井 三 枝 子 札幌市東区 豊 田 ゆり子	札幌市東区 高 橋 栄 吉 札幌市東区 白 井 國 毅 札幌市東区 大 谷 錦 美	札幌市東区 柳 美 枝 札幌市東区 新 徳 弥 野 生 札幌市東区 山 内 悦 子
小学校	が校	5	絵 画 A (構 想)	徳島市東区 大 河 内 英 明 札幌市東区 石 井 久	札幌市東区 岡 具 義 孝	札幌市東区 青 山 清 輝 札幌市東区 花 野 實	札幌市東区 森 光 小 幸 札幌市東区 坂 本 幸
		6	絵 画 B (観 察)	徳島市東区 黒 沢 暲 札幌市東区 鈴 木 和 雄	札幌市東区 佐 藤 靖 雄 札幌市東区 増 田 祝 造	札幌市東区 早 弓 弘 行 札幌市東区 辰 己 文 一	札幌市東区 近 一 个 角 邦 雄 札幌市東区 水 山 尚 小 札幌市東区 伊 藤 久 榮
		7	版 画	札幌市東区 森 原 富 貴 札幌市東区 嵯 子 留 也	札幌市東区 加 藤 玲 子 札幌市東区 小 泉 誠 札幌市東区 長 岡 吾 郎	札幌市東区 松 島 輝 男 札幌市東区 川 島 留 也 札幌市東区 中 嶋 崇	札幌市東区 朝 日 小 森 孝 子 札幌市東区 千 代 田 小 川 村 由美子
		8	デザイン・工作	札幌市東区 柴 山 尚 明 札幌市東区 富 田 泰	札幌市東区 宮 森 俊 治 札幌市東区 浜 谷 悦 子	札幌市東区 舟 着 昭 弘 札幌市東区 小 野 俊	札幌市東区 柴 和 小 黒 沢 宏 光 札幌市東区 日 章 小 原 内 寛 子
		9	彫 塑	札幌市東区 宮 下 林 札幌市東区 中 島 欣 也	札幌市東区 花 田 正 雄	札幌市東区 伊 藤 美 世 札幌市東区 寺 本 吉 明 札幌市東区 上 尾 重 夫 宮 坂 元 祐	札幌市東区 近 二 小 吉 永 一 江 札幌市東区 水 山 尚 小 宮 本 義 明
		10	総合 A (指導計画)	札幌市東区 原 良 三 札幌市東区 鶴 賀 孝 三	札幌市東区 伊 藤 善 彬 札幌市東区 相 田 隆 久	札幌市東区 泰 良 孝 夫 札幌市東区 武 田 好 文	札幌市東区 菅 明 小 青 柳 明 雄 札幌市東区 千 代 田 小 木 村 悦 子
		11	総合 B (造形的活動)	札幌市東区 小 杉 信 雄 札幌市東区 成 瀬 登	札幌市東区 青 木 新 治 札幌市東区 阿 部 実 行 札幌市東区 山 口 正 勝	札幌市東区 湯 川 守 忠 札幌市東区 富 川 忠	札幌市東区 北 光 小 氏 家 貞 札幌市東区 水 山 小 阿 部 英 子
		12	総合 C (地域・素材)	札幌市東区 神 田 耕 治	札幌市東区 松 森 淨 治 札幌市東区 迎 土 名 ヒ 子	札幌市東区 吉 田 義 晴	札幌市東区 森 光 小 山 科 明 雄 札幌市東区 立 文 小 鈴木 茂 雄
		13	総合 D (作品を語る)	札幌市東区 渡 辺 正 晴 札幌市東区 伊 藤 務 紀	札幌市東区 飯 塚 礼 二 札幌市東区 渡 辺 貞 之 札幌市東区 毛 馬 内 国 夫 雄 札幌市東区 栗 林 和 雄	札幌市東区 横 場 昌 三 札幌市東区 森 内 富 久 志	札幌市東区 豊 田 小 弘 田 洋 子 札幌市東区 水 山 尚 小 大 谷 錦 也

会場	校種	分科会 番号	領域	司会者	提言者	助言者	記録者	
緑が丘 中学校	中	14	絵画・版画	聖心女学院 宮崎 弘 七尾中学校 近堂 俊行	秋田大学 大竹 東 秋田大学 岡沢 邦彦	秋田大学 秋山 修 秋田大学 岡崎 武敏	聖心女学院 二本 勉 聖心女学院 二本 勉	
		15	デザイン	聖心女学院 川口 裕平 秋田大学 奥野 郁男	聖心女学院 吉本 博二 聖心女学院 宇野 義行	聖心女学院 片桐 武敏 聖心女学院 山口 武敏	聖心女学院 船一 春一 聖心女学院 船一 春一	
		16	彫刻	聖心女学院 寺原 実二 秋田大学 島 界二	秋田大学 多田 敏一	秋田大学 滝尾 幸一 秋田大学 滝尾 幸一	秋田大学 原野 中 秋田大学 原野 中	
		17	工芸	聖心女学院 小木 正勝 秋田大学 加藤 五十雄	秋田大学 浜本 弘志 秋田大学 上 祐 さら子	秋田大学 浅野 利 秋田大学 浅野 利	秋田大学 藤田 功 秋田大学 藤田 功	秋田大学 藤田 功 秋田大学 藤田 功
		18	総合 A (指導計画)	聖心女学院 本間 篤 秋田大学 荒谷 博文	秋田大学 村谷 利一 秋田大学 名川 正彦	秋田大学 三谷 哲司 秋田大学 出水 邦	秋田大学 三谷 哲司 秋田大学 出水 邦	秋田大学 三谷 哲司 秋田大学 出水 邦
		19	総合 B (地域・素材)	聖心女学院 氏本 利光 秋田大学 石岡 博昭	秋田大学 佐藤 公毅 秋田大学 永関 和雄	秋田大学 池本 良三 秋田大学 池本 良三	秋田大学 池本 良三 秋田大学 池本 良三	秋田大学 池本 良三 秋田大学 池本 良三
		20	総合 C (作品を語る)	聖心女学院 一ノ戸 義徳 聖心女学院 後藤 昌治	聖心女学院 大高 幹二 聖心女学院 長谷川 美	聖心女学院 小滝 秀 聖心女学院 小滝 秀	聖心女学院 小滝 秀 聖心女学院 小滝 秀	聖心女学院 小滝 秀 聖心女学院 小滝 秀
		高校	21	総合	聖心女学院 川口 幸和 秋田大学 林 弘義	秋田大学 佐野 千尋 秋田大学 大江 秀博	秋田大学 大石 吉友 秋田大学 大石 吉友	秋田大学 大石 吉友 秋田大学 大石 吉友
大学	22	総合	秋田大学 上 余 雄也	秋田大学 川村 善之	秋田大学 岡本 高工	秋田大学 岡本 高工		

分科会スナップ



分科会 B-1

幼稚園・保育園（造形あそび）

司会者	今野 正治（旭川）	永井 恭子（札幌）
助言者	長谷川 伝（札幌）	田村 幸子（奈良）
提言者	金田 時子（新潟）	
記録者	古小高利枝（旭川）	中島真由美（旭川）

1. 分科会テーマ 身近にある素材を生かし、つくる楽しさを味わわせるためには、どうすればよいか。

2. 提言主題 身近にある素材を生かし、つくる楽しさを味わわせるためには、どうすればよいか。

3. 提言要旨

・沼垂幼稚園では、主体的表現のできる子供をめざして日々保育にあたっている。

子供は、遊びの中で感動したこと、見たり、聞いたりしたことが、子供の心の中にその子なりの楽しさとなって疑問となって、ため込まれ、素材や、友達の影響や、教師側の言葉かけが、きっかけとなって、描きたい、作りたい、飾りたいという心の動きが造形あそびにつながって表現されていくと考えられる。実践例を通しての沼垂幼稚園では、樹木や草花などの自然に恵まれています。自然とのふれ合いの中でも、草花から受ける感動があそびの中に自然のかたちで取り入れられ、何かに見たてようとする姿より本物らしくしようと工夫する姿の中に、幼児の表現への意欲や、喜び、造形への芽ばえが感じられる。また、日常で廃品を使って望遠鏡や、写真機、おみこしづくりなどの造形あそびが発展している。実践を通してわかったことを3つの項目にまとめると、1つ目に、素材と幼児のかかわりの面でどうだったのか。2つ目には、環境構成の面ではどうだったのか。3つ目として、教師の援助の面ではどうだったのか。以上のことがあげられる。これら4歳児、5歳児に分けてみると、4歳児では、まだ素材を見近なものに見たてて造る。また製作する時の用具はいつも出しておき、目のふれる場所に置くこと。教師側は、その子その子の能力に合った援助をしていくことと、ほめてやるのが大切なことである。これに比べ、5歳児は、造りたいという目的に向かって素材を選択していくし、友達や先生の影響で造形本能力が刺激されるので、大きなものが造れるような素材や種類を多く用意すること。また教師側は、子供同志の刺激を大切に、認め、はげましていくことが大切なことではないだろうか。

子供は、くり返し、くり返し、心ゆくまで遊び込ませてやることで、一人ひとりの心に喜びと張り合い、満足感を与え、造形への意欲を培っていくと考えられます。

4. 研究討議の内容

・身近にある素材をいかすことについて（初歩の段階のハサミや、のりの使い方）

沼垂幼稚園では、入園してからの1週間はハサミなどを与えず、家庭に持ち帰り名前をつけて園に持ってくるようにしている。それから約束ごとを全体に指導し、また個々に指導していくことで造形の活動段階を踏んでいる。

・あそぶという中で子供はどのように育っていくのだろうか？また幼稚園教育の中での親のあり方はどのように変わっていくのだろうか。

（助言者 田村先生より） 最近、大人も、子供も手の働きが鈍ってきている。子供は生まれ

た時から手の働きをしているのにまわりの大人が危いからといってやらせないのはいけないと思う。ハサミなどを使うことによって、子供自身が安全性を十分考えられるようになる。

- ・様々な素材を使う（各幼稚園ではどのような身近な素材を使っているのだろうか？）

大半の園は、廃品物を利用して（例えば、卵のパック、プリンカップ、トイレトペーパーのしんなど）壁面や、刺あそびなどをしたりしている。また自然にある素材としてどんぐりや、まつばっくりなどを利用して造形あそびが発展している園もあった。

- ・子供にあそびをみつけ出させるという意見に対して、幼稚園教育では、本来的には子供自身でみつけ出していけないと困った状態になってしまう。子供は、あそびそのものが生活であり、あそびを通していろいろなことを学びとったり、経験していくものである。この幼稚園では、毎日のカリキュラムを作っているわけではなく、生活の流れの中で子供の欲求や興味にあわせて造形活動を行っているとのことでした。この幼稚園に対し、そのようなことは理想的なことであって、子供の欲求や、興味ばかりあわせていくと子供達自身しまりのない人間になっていくのではないだろうか。またカリキュラムはないというが教師のカリキュラムはあると思う。教師は、カリキュラムの子定を「僕がこうしたいんだ」というようにもっていかなければならないと思う。この意見に対して、子供の活動に片よりのある場合は、こちらでしむけていくようにしている。また子供がイヤなことに対して逃げていく場合は、指導をきちんとするように心がけるという答えが返ってきた。

5. 討議のまとめ

- ・遊びについて（助言者 長谷川 伝先生より）

遊びは、目的をもった行動ではないが、結果的には子供にとって何かをつくりだすという嬉しいことにつながると思う。幼児の場合、今この子が何を必要としているのかということを経が認めてあげることが大切なことではないのか。また、教師側は、子供の五感をみきわめ、指導していき、親と接していくことが大切なのではないだろうか。

- ・身近にある素材を味わわせるためには（助言者 田村幸子先生より）

身近な素材とは、季節や地域、行事によっても異なるし、それは気楽にとりくめるものである。それに関連して場の設定をどうすればよいのかが考えられる。環境をどうととのえていくか。どんなものを提供していくか。どのような刺激を与えていくか。それは生活に密着したものであり、無理なく行えるものである。また、こちらから与えずぎず、新鮮なものであることが大切である。教師は、子供の表現意欲を認め、誉める、励ますことによってやってみようという気持ちになり、それによって次の工夫につながっていくと思う。また教師は、子供にいろいろな経験をさせていく上で放任ではなく、教師の方でタイミングをつかむこと、家庭とのつながりもだいじにしていき、その中でこそ良い造形活動、良い遊びができるのではないだろうか。

分科会 B-2

幼稚園・保育園（絵画）

司会者	守野 綾子（旭川）	小尾 喬（札幌）
助言者	佐々木理温（札幌）	
提言者	木下 恵子（鶴川）	
記録者	鈴木 淳枝（旭川）	山崎 祥子（旭川）

1. 分科会テーマ 感じたこと、考えたことをのびのびと絵に表現させるには、どうすればよいか。

2. 提言要旨

- ・技術の向上を図るのではなく、子供を育てているのである。
- ・幼稚園で大切なことは、子供が絵を描くのを好きだ、楽しいと思う様にするすることである。
- ・絵画表現の根源エネルギーは、絵が好きということではないか。
- ・心の中に何の目的も持たずには、子供達を良い場面でとらえることができない。
- ・それぞれの園の環境をふまえて、職員の園内研修がとても大切である。
- ・お互いの授業を公開しあうことは、大変プラスになることが多い。
- ・明確なねらい、「絵画を通してこの様な子にしたいんだ」というものを持つ必要がある。

3. 研究討議の内容

・旭川こぼと幼稚園の本田先生

「子供の描く物をのびのびとやりたいとは思っていますが、感覚のズレ（テレビマンガのロボットなど）の絵をどうのびのびと描くのか、どうとりあげれば良いのか。」

・木下先生

「別にかまわないと思う。そこでまた違う刺激を与えたりする。園の方で違う方向の絵を描かせていけば良いのでは……。」

・白糖のすもと先生

「良い絵、悪い絵を見分けることができなければ、教師は指導できないのでは」

「子供の線描きは、家庭で皆やっているのではないか」

「女の子は人の顔を多く描き、一方的なかたよりがあるのでは」

・木下先生

「女の子は花や人から絵画に入っていく、男の子は車などから入っていくことが多い。」

「線描きは、持たせればするが与えなければしないので、子供の様子を見てその経験をさせる。また筆圧がないので線あそびをさせる。」

「形はどうであろうと、その子が精一杯表現していれば良いとする。」

・佐々木先生

「教育は1人ひとりの子供を育てるという基盤に立っている。」

「そこに表現されているのが自分であれば、大きく描いていなくても良いのではないか。何もわからないままの状態が大きく描いたり、また乱暴であっては仕方ない。」

「パターン化された絵について、影響力を受けやすい子がいるので、それを否定しなくても、その中から何かを引き出しプラスがあれば良いのではないか。」

- ・京都の保育園の先生

「1つの題材から絵を描かせすぎではないのか。」

「あそんだ、その体験の感動がいつまでつづいているのか。」

- ・木下先生

「体験指導が大切ということから掲示しただけであり、普段はそんなに何枚も描かせない。」

- ・神奈川の浅川先生

「何かを描かせるためにあそばせる。というのはおかしいのではないか。」

- ・木下先生

「教師の気持ちにもゆとりが必要であり、本当の意味で個々の気持ちをわかってあげることが必要だと思う。」

- ・野幌の幼稚園の先生

「ザリガニの周りの色は、子供達が自分で選ぶのか。」

- ・木下先生

「たくさんの色をつくっておいて、その中で子供達が自由に選択する。」

4. 討議のまとめ —佐々木先生より—

- ・私達がやっているのは教育であるが、教えることではない。育てはぐくむことである。
- ・1人ひとりの子供を育てるということですが、たくさんの子供達のいる中で、1人ひとりの子供の見識をもつことが大切である。
- ・絵画では、感ずる心を育てることが必要である。
- ・感ずる心を育てるのは、「自然」である。
- ・もっとゆっくり、子供をじっくり見て、心をとらえて育てて行って欲しい。
- ・子供が素直に描きたいものを描けばそれで終わりである。余計な背景（バック）は必要ない。

分科会 B-3

幼稚園・保育園（総合活動）

司会者	岩間 昇（旭川）	吉田 俊雄（札幌）
助言者	鹿島 健（札幌）	池田 一良（京都）
	小関 利雄（返子）	
提言者	坪井 龍彦（旭川）	
記録者	大西 恵子（旭川）	高橋由美子（旭川）

1. 分科会テーマ 子どもたちの豊かな造形表現を育てるうえで望ましい経験や活動をどうすればよいか。

2. 提言主題 子どもにとっての造形活動

3. 提言要旨

- ・総合活動としての造形——日常生活をとおして感動、刺激となる体験をたくさんさせていく中で、ふさわしい題材を生み出したり、活動がつくり出されたりしていくのが望ましいと考える。
- ・表現活動の中の想像と創造——まず一人ひとりの子どもの想像力を引き出し生かしながら造形的感覚を育てていくうちに、その子らしい表現や意欲につながり、それが創造と呼ばれるものになるのであろう。
- ・造形活動の視点——(1)表出的な活動をさせる場合、固定したり、型にはめたりしない。
(2)その子なりのイメージを大切にすること。
(3)材料や用具に抵抗なく触れさせる。
(4)子どもの感性を十分に引き出し、生かすようにすること。
(5)生活の中で感動体験を数多くさせる。
(6)基礎的な活動をたのしませたり、十分にさせたりすること。
(7)失敗を恐れさせない。
- ・表出活動から表現活動へ——造形活動に無理なく自然に向かえるようにするには、材料や用具に抵抗なくふれさせたり扱うことをたのしませたりすることや、かく、つくるの活動の前に体をつかったあそびを十分にさせる、子どもの感情や表現の仕方を尊重し、かく、つくる活動にたのしくとり組ませるなどのプロセスをふませることが必要である。
- ・子どもの生活経験から発展したあそびの事例として「宅急便あそび」のスライドをみる。
- ・まとめ——幼児の造形活動は、かく、つくるといった活動の背景に、必ず子どもたちのごくありふれた日常生活の中での生活経験や、その中で感動やイメージのたくわえがあるのであり、それを大切にしていくことで、「感じる心」を育てることにつながっているのではないかと。そして先生が美しいものに、いっしょに感動したり、いっしょに気づいたりすることで、子どもの表現や書情が豊かになり「感じる心」も育っていくのではないかと。

4. 研究討議の内容

・提言についての質問

グループ構成、また、あそびの中でのグループはあるのか？

グループ構成はしていない。子どもには一人ひとり個性があるので、自然発生的にはでてくる

が教師側からグループはつくらない。

- ・自然発生的あそびを重視（一斉保育の反対）する活動を行っている園はあるか？

愛媛今治幼稚園では一日中好きな部屋に行って好きなあそびをすることができる。

ある程度危険のともなうことでも見守る。自発性を尊重する。

- ・総合活動とは、何なのか？

総合活動とは、子どものあそびではないだろうか、あそびの中からひき出したり生みだしたりするものではないか。

5. 討議のまとめ

感じる心を育てるためにはどうすればよいか。それは先生がもっと形容詞をつかうこと。

まず観察力を身につけるためには、どうなってますか？ときけばいい。思考力を身につけるためには、どうしてですか？ときけばいい。感情をきくにはお花をみせて、泣いてる？ 笑っている？ときけばいい。直感を育てるには、何ににてる？ときけばいい。先生がもっと子どもへの問いかけ、表現を考えることによって感じる心が育っていくのではないだろうか。

分科会 B-4

幼稚園・保育園（デザイン・工作）

司会者	大口 章子（旭川）	鈴木 将夫（札幌）
助言者	高橋 栄吉（札幌）	白井 園毅（札幌）
	大谷 勝美（旭川）	
提言者	向井三枝子（愛媛）	豊田ゆり子（東京）
記録者	新徳弥世生（旭川）	山内 悦子（旭川）

1. 分科会テーマ 子どもたちの夢を育てる製作活動をさせるためにはどうすればよいか。
2. 提言主題 子どもたちの夢を育てる製作活動をさせるには、どうすればよいか。
3. 提言要旨
 - ・今の子供は、幼児期に必要な体験活動が少ないので感動する子が少なくなっているのではないか。
 - ・子供たちが「こうしたい」「こうしたい」という自分の願いや目的をもつことも夢としてとらえていきたい。
 - ・子供たちの日常生活や遊びの中で、どう感じとり、想像し発展させていくか、じっくり見守りながら、楽しい製作活動を促す配慮や手だてについて探っていきたい。
4. 研究討議の内容
 - ・幼児の遊びの中でのデザイン性（造形性）の芽生えについて。
 - ・表現意欲を高めるために取り組ませたい活動について。
5. 討議のまとめ
 - ・幼児の場合、初めはぬたくりを太い筆でさせたり、筆をきれいに洗うなどの基本が大切である。教師は、その子なりの方向づけをしてあげたり、次から次へと発展させて遊びに作るものを変えながら発展させていくことが望ましい。また教師が前もって準備し教師の方向へ引っぱっていかうとすると、教師のイメージが強くてでしまうことがある。造形活動を行う時、いつも子供に与えていたら意欲がなくなるので時期をみて与えるとよい。また、子供が要求してきたら、教師はいつでも出せるように用意しておくことが大切である。目に見えない準備があつてこそ対応してくる。材料や造形性が連続して子供達の中で育っていくことが望ましい。
 - ・今の子供達は、感じない子が多いと言われるが、豊かな感性を育てることが必要で、何かを発明させたり、驚かしたりして感動させるのが一番ではないか。造形性の芽生えの前に感動の場を与えることが大切であり、子供が夢中になって遊ぶことが造形性の芽生えにつながるのではないか。
 - ・遊びにはどのような種類があるか分けてみると、
 - だまっけていてもグループになったり、だまっけていても一つの集団の中に入っている。（望ましい遊び）
 - 一番低次なのは、人の遊びを見て遊んでいる。（傍観的遊び）
 - ひとり遊び、グループで遊んでいても、ひとりひとりまちまちである。
 - となりの子の遊びを見て遊ぶ。（並列遊び）人間性を大事に遊べる子を育てることが大切である。
 - ・教師がのめりこむと、子供の作品が似てくる傾向があるので、一人ひとりの子供の個性に応じた

援助を教師がしていくことが大切なのではないか。

- ・幼稚園での製作活動を行う場合、○用具を整理する ○道具を大切に扱わせる ○安全性に気をつける ○色や形に気をつける——などに配慮して指導するとよい。

造形性を高めるためには、感性を磨いていき、内容が豊かな中から生まれてくるようにする。

子供の生活経験を広げてあげることが、表現の幅を広げていき、良い絵が生まれる。

デザインの土台は装飾で、身の周りを飾ることから始まる。子供の生活を広げることが、作る心の広がりになる。

- ・幼稚園の子供達の表現意欲を高めるには、描く・作る・色・形が大切で、デザインと絵画の場合、彫塑が入った表現で、自分の心の内面の世界を表現する。平面的に表現したものが、絵画であり、版画である。
- ・デザインの芽生えは、にぎったり、ねじったり、こわしたり、やぶったりして、自分の意思表示を色と形で表現し、飾ったり、作ったりするのが自分の願いである。
- ・経験活動が少なければ主体性はでてこない。発想は子供の側から出させるのが望ましい。保育者は、はさみで切る・ころがす・こわす・見せるなどの刺激を与えてやり、望ましい方向に引っばっていき、ヒントを与えることが大切である。

分科会 B—5

小学校（絵画A・構想）

司会者	大河内英明（旭川）	石井 久（函館）
助言者	青山 清輝（岩見沢）	花崎 實（大阪）
提言者	両貝 義孝（水戸）	
記録者	坂本 幸（旭川）	紙谷 恒（旭川）

1. 分科会テーマ イメージを広げ、子どもの心を生き生きと表現させるためには、どうすればよいか。

2. 提言要旨 提言者 両貝 義孝

(1) 基本的な考え方

これまで図画工作科では、子どもの直接体験を重視して、豊かな心をはぐくみ、心がひびき合うような感性を育てることが大切であろうとの考えに立って「心を育てる授業」をめざしてきた。そのために、学校をとりまく「自然」「もの」「人」に、教材としてどうかかわらせていくかの面から教材の開発を進めてきた。

その教材開発の具体的視点は①総合学習の展開に伴う子どもの興味・関心・必要感をもとに教材を開発する。②総合学習も含めた子どもの学校生活での体験の中から生まれてくる興味・関心・必要感をもとに教材を開発し、生活から学習を構想し、生活に戻すという「生活の学習化」「学習の生活化」を図る、の2点であった。

本年度は、今までの研究を深めたり、「人」に教材としてどうかかわらせたりしていくかの面からさらに取り組んでいきたい。また、「自ら学ぶ力」を育てるための授業構成についても追究していきたい。子どもの心に感じる内面的な喜びや、成就感を育てながら、子どもが、楽しく生き生きと自分の活動できる教材や場の構成を追究することが、子どもたちの創造力を伸ばすことにつながると考えている。

(2) 本年度の研究視点

ア. 子どもと子どもの心のひびき合いを育てる教材の開発をする。

イ. 学ばせたいことを、学びたいことに変えていくために、授業構成の中で繰り返し試す場を設定する。

ウ. 子どもと子どもが授業の中で認め合い、助け合えるような場を設定し、表現力を高めるための学び合いの姿を育てる。

(3) 実践例 題材「那珂川物語をかこう」 第5学年

ア. 授業構成にあたっての考え

5年生は4月から那珂川についてかかわってきた。河口の那珂湊まで歩いたり、中流の御前山に行って川遊びをしたり、源流の茶臼岳に登ったりしてきた。

この5年生が五感を通して一年間探ってきた「那珂川は生きている」という総合学習のまとめとして、手作り和紙に手作り絵の具でかく方が、夢や感動や願いを味わいながら創造性を培うことができるだろうと考え、この授業を構成した。

イ. 授業の過程と考察

○和紙を作ろう……紙すきは、秋に鳥山和紙を見学に行く前に1回、そして1月に2回目をやった。1回目は薄く、すき間があいていたりしたが、2回目は紙すきを見学し、説明を聞いてきた後なので、慎重に時間をかけてやり、子ども達も満足する紙ができた。

○絵の具を作ろう……本当に絵の具が作れるのかと半信半疑だった子ども達も粉末がしだいに溶けてどろどろになってくるにつれて真剣な顔つきになってきた。まほう使いの気分という女の子もいた。

○混色を工夫し、那珂川物語をかこう……自分で作った和紙に自分で作った絵の具で色をぬる時は手がふるえてしまったという女の子。これが感動のためのものであったら、とてもうれしいことだ。

3. 研究討議の内容

司会：紙を作った感動や絵の具を作った感動が絵をかくイメージにどう結びついているのか。

花篤：原始美術では岩のでこぼこをうまく使っている。和紙を使った場合も同様に、素材からのイメージが強くて、構想絵画としての必要な要素は多分不足であったであろう。

雨貝：素材とはどういうものかということについて研究をしているが、身近にあるものについて改めて見直してみることが必要ではないかと考えている。

司会：地域に密着した素材を生かすことで、絵画的なイメージをふくらませることができる。

那須：絵をかく時の子どもの心をつかみながらイメージを深めさせる方法を教えてほしい。

花篤：生活体験を通して深めていくことが大切と思う。その時に、見たこと体験したことを色や形におきかえさせることが必要である。

司会：イメージをふくらませるには、絵をかかせる以前に意図的に生活体験をさせるなどの取り組みが大切である。ただそれをやりすぎると画一的になる心配がある。

青山：構想画のイメージをひろげるために、フロクタージュ・デカルコマニー・コラージュ等いろいろな経験をさせ、そのことを使って実践させたことがあった。

花篤：今日の話し合いでは、イメージについての概念が広がったので、話がかみ合わなかった部分があったのではないかと。牛を外から見ただけで、それを絵にかきなさいといってもなかなかかけないと思う。牛をひくとよだれを出す、等のことが子どもも先生も実感としてわかれば、すぐに色や形におきかえることができるであろう。

4. 討議のまとめ

絵をかくイメージを広げ、生き生きとした表現活動をさせるには、子どもの生活体験を大切に五感を通したものを色や形におきかえるイメージ経験をさせることと、素材経験を深めることの両面から取り組ませることが必要と思う。

分科会 B—6

小学校（絵画B・観察）

司会者	黒沢 謙（上川）	鈴木 和雄（苫小牧）
助言者	早弓 弘行（空知）	辰己 文一（奈良）
提言者	佐藤 靖（札幌）	増田 悦造（群馬）
記録者	角 邦雄（旭川）	伊藤 久栄（旭川）

1. 分科会テーマ つくる心のひろがりや深まりを求めて
2. 提言主題 対象と自分とのかかわりの中で求め深めていく表現活動をさせるには、どうすればよいか。

3. 提言要旨

(1) 提言1 (佐藤 靖)

最初の出会いに喜びを持たせ、基本的な扱い方をていねいに指導しながら、用具に無関心にならないようにしてあげたい。一形式的な構えよりも心に訴えて—

前学年までは、自分のイメージしたものや印象的なものをこだわりなく描き、それらを基底線上や画面の上下に並べながら、自然のうちに大小関係や前後関係をとらえて表現してきた。しかし、表現過程の中で、ものの形態にくわしさが不足している。やや複雑な動きになると、実際に動作化したりしてその関係をつかもうとしている。重ねてものを表わす場合には、あまり順序を気にしない。などの姿も見受けられる。このような実態や個人差も考慮しながら、低学年から中学年へと移行していく中で、イメージを補強したり、ふくらませたり、また、はば広い表現方法を促していくために、『見る』活動を徐々に学習の中に組み入れていく必要がある。

○一学期の実践から

- ・色と筆で遊ぼう……自由な雰囲気の中で水彩絵の具の美しさを味わう。
- ・山の上のお城へ……小さなお話を聞き彩色を工夫する。
- ・1本の本を見て……ゆっくり見つめ、自分の発見したことを大切に線描する。
- ・木の向こうに見える倉庫……対象とのかかわりの中で、画面を順序よく組み立てていく経験をする。

(2) 提言2 (増田 悦造)

対象との関わりを、触れ合う活動ととらえ、自分の感じたことを対象の形と色を見つめながら触感をもって、立体としてとらえさせ、平面たる絵画表現の中に描かせようとした。

○実践事例 6年生 題材「自画像をかこう」

本主題に基づき、子どもたちともしっかりと関わりが深いと考えられる人物画の学習を構想した。

- ・授業としての題材の構想（全体6時間予定）

①見つめる→②触れる→③描く→①②③のくり返し→完成

鏡
ライトによる陰影づくり } …… 手で触れ凹凸
の確かめ (試行錯誤)

- 見るということと触れるということ。

平面を立体として手で触れさせ、さらにそれを鏡で見つめさせていくことで、よりはっきりと

認識させていこうとした。触れるということは、手の触感を通し、目でとらえたことを、はっきりと認識することになるであろうと考えたからである。

4. 討 議

- 佐藤先生の子どもの心を大切にしている指導は大切なことだ。
- 増田先生の自画像を指導するのに、子ども達が、見つめ、触れ、視覚と触覚によって表現する。子どもの感動を大切にすることは大事なことだ。
- 3年生に重なりを指導するのは高度ではないか。
 - ・5、6年で図画は嫌いなる。4年まではのびのびと指導し、6年で実物に近い指導が必要である。それで、低・中学年からももの見方を深めておくことと高学年によいので、このような指導が必要である。
 - ・写生会で悩んでいるので、このような指導は、多くの先生方の示唆となる。
 - ・学習指導要領に、3年生でももの前後の關係に気付くこととなっているのでよい。
 - ・縦の指導からも、順序よく描くのが3年生として大事である。
- 3年生の子どもたちは何を追求しようとしているのか、課題をどうのりきっていったのか。
 - ・色と筆で遊ぼう→山の上のお城へ→1本の木を見て→木の向こうに見える倉庫と指導して来たが、分野によって学年のおらいを持って、手だてを加えて指導することが大切である。
- 6年生の手かがみをもとに、顔の凹凸と自分のかかわりかどうか。
 - ・子どもの見ぬけぬけ心情を作文に書かせてもよかった。
- 観察画について
 - ・観察画と想像画を分けるべきではない。本日の提言は両方含んでいる。

科学的に矛盾している絵がおもしろい。矛盾が多い程おもしろいが、なおすのがよいかどうか疑問である。

観察は、対象に対して普段気付かなかったものを気付かせる必要がある。

それは線だと思う。生きた線を教えることだ。死んだ線とは、色をぬるのに便利なための輪郭を描いたものである。

では生きた線とは、屋根なら屋根そのものが表わっていて、強弱を生かした線である。
 - ・3年生の観察画は、もの前後関係を系統性を持ちながら指導していた。それまでに、色と筆で遊ぼう、山のお城への題材を通して、観察して描く、1本の木を見て、木の向こうに見える倉庫を心でとらえ描いていた。

描くことは、形と色で表現していき、色では、重色、混色、空気、対象から受ける感情、色の変化など子どもの良い部分をとらえていく。形では、線にとらわれる作品が最近多いが、はみだしても良いから描かせることが大切である。

そのためには、クロッキーの日常化が大切で、スケッチタイムをもうけて、くり返して描かせることも良い。

分科会 B-7

小学校(版画)

司会者	萩原 常良(上川)	蛸子 信也(札幌)
助言者	川島 信也(旭川)	中嶋 宗(青森)
	松島 輝男(札幌)	
提言者	加藤 玲子(旭川)	小泉 誠(札幌)
	長岡 吾郎(流山)	
記録者	森 孝子(旭川)	川村由美子(旭川)

1. 分科会テーマ 版の特性を生かし表現の喜びを味わわせるには、どうしたらよいか。

2. 提言要旨

提言1 提言者 (加藤 玲子)

- ・生き生きとした感動をよびおこす、絵画領域の題材をほりおこし、あらい出しをした。
- ・学校格差をなくすため、研究の柱をたて題材例をつくり、指導研究をした。
- ・絵画・版画の作品集を編集すると共に、次年度への指導の参考・反省にした。
- ・子どもに「制作ノート」を利用させ、自分の目あてをきめ、その感動を表現させる工夫をした。

提言2 提言者 (小泉 誠)

- ・子どもたちの「知りたい」「わかりたい」「上手になりたい」という気持ちを大切にした。
- ・理科教材の「ザリガニ」を教室でかい、親しませ、環境作りに努力した。
- ・スケッチをさせたり、粘土でつくったり、よくザリガニを観察させた。
- ・「星の夜のおはなし」の版画をつくるにあたって、子どもたちが話し合っ、みんなの願いを盛り込みながら、少しずつ話をつくり、イメージ化してとりこんでいった。
- ・自分たちの作品を、自画自賛しており、表現の喜びを味わうことができた。

提言3 提言者 (長岡 吾郎)

- ・卒業記念作品をつくった実践報告です。
- ・全員を集めて話し合ったのち、代表を決め仕事を分担した。
- ・下描きは、希望によりかいた。
- ・転写・すみ入れなど、各クラスの各班がリレー式に彫り、連絡ノートで、ひきついでいった。
- ・班長は苦勞したようだが完成した作品に満足していた。その他の子には、ものたりないものが残ったようだ。

3. 研究討議の内容

◎板紙凸版について

- ・あつ紙凸版(エッチングボード)凸版や凹版の表わし方がある。刷りは必ず版画プレス機を使うこと。凸版は3年生ぐらいの木版にうつるときの導入にとり入れられている。紙の素材を十分に生かした版だと思ふ。板紙凸版は、紙をはぎとるもので、うすくはいだりして、美しく表現でき

るものである。

- ・「笛をふく子ども」では、まわりを彫っていない。これは低学年でのほりとちがうので統一されていないのではないか。
- ・旭川はこれだけではない。系列がしっかり、おさえられていれば、そのようにならないときもある。
- ・ドライポイントは旭川でもやっていた。
- ・紙版から木版に移行する指導方法に問題があるのではないか。
- ・紙版から木版にうつるつなぎとして板紙凸版があるし、併用版もある。

◎旭川の題材について

- ・表現が感動したものを中心とするのであれば、わたしが中心となるのではないか。
- ・旭川でも、私を中心となっており、自分が柱となっている。
- ・旭川では一步步、みんながレベルアップを目ざしている。教師が変わると子どもも変わるだろう。小泉先生は、子どもに手だてをあたえていた。学級経営がしっかりしていないとよい作品はできない。
- ・刷る喜び、手づくりの喜び、刀の切れる喜びを大切にしなければならない。
まず人間を育てる。――表現力を育てる事を考える。感動をこわす指導はよくない。
小泉さんは子供の感動を大切にした。子供の作った言葉を大切に作らせるとよい。

◎共同作品について

- ・記念作品は大きいので、いたんだり、油がにじんだりするので、長く残すには屏風や衝立にして保存している。絵はがきをしているところもある。

◎その他感想

- ・版面に時間がかかるのは指導のステップのどこかに落としたものがあると思う。
- ・紙版から木版にうまくつなぐため、板紙凸版を入れるとスムーズに入れると思う。

4. 討議のまとめ

- ・紙版から木版へ移行する指導の手だてを研究する必要がある。
- ・集団制作の大作に取り組ませることによって、全員に版画の表現する喜びを味わわせることができた。

分科会 B-8

小学校（デザイン・工作）

司会者	築山 尚明（上川）	富田 泰（札幌）
助言者	舟着 昭弘（札幌）	小岩 俊（東京）
提言者	宮森 俊治（苫小牧）	渋谷 悦子（山形）
記録者	黒沢 宏光（旭川）	垣内 寛子（旭川）

1. 分科会テーマ つくる心のひろがりと深まりを求めて

2. 提言主題 遊びや暮らしの中から生まれた願いを、デザイン工作活動にどのように生かすか。

3. 提言要旨

- ・セットで市販されている教材を使うことに問題があるのではないかと。手づくりの物を教師自ら実践し研究しながら、子ども達に与えて、作ってみんなで遊べるような工夫が必要である。
- ・図工の専科の教師は他の先生方に、技法を指導していくべきではないだろうか。
- ・題材については子ども達と相談しながら決め、楽しい授業になるように工夫する。
- ・図工カードを使い子ども達の意識を高めている。図工を自習にしたり、他の教科の調整にあてがうのは問題である。
- ・4年生が図工を好きにするか、嫌いにするかの境界線である。教師自身が自らやってみて、つまずきの予想をたてるとよい。

4. 研究討議の内容

- ・曜日をヒントに造形遊びをするなど造形活動を展開する場を与える。たとえば、七夕集会でかざりつけとちょうちんづくりにみんなで取り組む。楽しい教材を与えると、子ども達の活動は地域へと広がっていく。
- ・教師のおしつけでなく手がかりを教師がみつけてやり、作ってよかったな、と想いを少しずつふくらませていかせたい。
- ・様々な素材を子どもたちに与え、中広い経験をさせる中にも、年間計画の中に、ときには四つに組む題材を与え、その学年で、しっかり身につけさせることも必要である。
- ・学校教育の中で造形活動はせげめられているが、その解決として、全校行事の中で造形の楽しさを経験させていきたい。実践する場合は、むずかしさがつきまとうことが多いようだ。
- ・グランドジャンボジェットの絵を大きくかき、子ども達に、それぞれの準備（仮装）をさせ、ただ乗りこむことだけでも、子ども達の夢は広がり、生き生きと楽しく取り組む。準備にかなり時間がかかるので年間計画に入れておく必要がある。
- ・木工作に取り組むときに、実物木の紙を与え、イメージ化させると、意欲も高まる。その前に画用紙を四つにおりそのわくの中にアイデアをスケッチをさせ、「ダメ」という言葉は絶対使わず子どもの作りたい物を選ばすとよい。
- ・キーホルダーは年間計画では、木工作という内容だったので、子ども達と話し合いながら、内容を決めた。子どもの暮らしの中から出てくる願いを大切に製作すると、後に書いた作文にも表現されているように、子どもの意気込みが感じられる。
- ・図工ノートを使用すると、子どもの歴史・変革がわかるのではないかと。渋谷先生の実践では、朝

の学習で詩を書かせたり、三角や長四角の紙を与え、発想が豊かになるような工夫をしている。

- ・図工は、デッサンが基本で、描ける技術を身につけさせたい。
- ・キーホルダーは、ハガキを入れた後のイメージまでも想定して設計するとさらにより作品ができるのではないか。

5. 討議のまとめ

機能だけとしては、はがきが入ればよい。しかし、心象面の働きが大切である。目的だけ追求するとおもしろみがなくなる。虫・花などのメモ表現（詩）を大事にして学習されているのが素晴らしい。意図的・計画的にするために、図工カードを使用されているのはよいと思う。渋谷先生の作品は、ふくらみを持った作品である。苦勞して作るから工夫もするし、悩みもする。条件をいかに整理して1つの作品を仕上げているかがよく表れている。

宮森先生の内容は、造形活動を広げていっている。広まりと深まりから考えると、子ども達の心の中に、よく浸透している。2人の先生の実践を合わせると理想的であり、作品の中に、喜び、自信、意欲が表れている。

子どもを知ることから出発することは、子ども達の技術を知ることにつながる。他の先生の技術をもって、自分の学級で実践してみてもうまくいかないことが多い。子どもと、ふだんのかかわりを大切に、いかにして、題材と出会わせるかが大事である。どこで、何を気づかせ、何を経験させるかをしっかりつかまなければならない。

宮森先生の実践は、造形の生活化という面から見て示唆が多い。生活化をすすめるほど、技術にふれる必要がある。小学校の工作の場合、いろいろな道具を使う感覚を育てることが大切ではないだろうか。

分科会 B-9

小学校(彫 塑)

司会者	宮下 林(旭川)	中島 欣也(釧路)
助言者	伊藤 英世(札幌)	寺本 吉明(十勝)
	宮坂 元裕(新潟)	
提言者	花田 正雄(札幌)	
記録者	吉永 一江(旭川)	宮本 義明(旭川)

1. 分科会テーマ 自分のイメージを楽しく豊かに立体表現させるにはどうすればよいか。
2. 提言主題 分科会テーマに同じ。
3. 提言要旨

〈粘土〉—子ども達は喜んで取り組む素材

〈他方問題点あり〉—教室がよごれる、作品の管理が大変

〈そのためにも〉—彫塑で育てたい力をしっかりおさえ指導に当たっている

〈最初の粘土学習〉—粘土のビニールをとり、まるくして山積みにしておく
粘土にふれさせる
この取り組みの中での実態(5例紹介)

〈実態をふまえ、テーマにせまる取組み〉

- ①丸くする。 ②四角にする。 ③うすくする。 ④細長くする。 ⑤穴をあける。

●初歩的な取組みの中から、子どもは粘土に興味をどんどん持ってきた。

●教える中で大切にすること。

- 粘土のほどよいかたさ ○使用する量 ○あとしまつ

〈学年の取組み(系統)〉

・提言資料に具体的に記載。

4. 研究討議の内容

討議の柱

- (1) 立体表現について(イメージを豊かにするために)
- (2) 表現の手だてについて
- (3) 材料、素材面から

〈イメージを豊かにするために〉

- ① 子どもの実態をふまえての指導をたいせつにすること。

技術面で問題ある子には——技術で指導

発想面で問題のある子には——発想で指導

② 市販されている物を使用している事が多いが、地域の素材を使うことが大切。

- 丸太を使っの作品（自然木の中から動物や人のおもしろい形を見つけ出す）
- 地域の粘土を使っの作品（安いから多くの量を与えることが出来る）加工粘土より土粘土。
- 氷を使っの作品
- 雪を作っの集会活動—造形的遊び、学校行事と大雪像。
- ▷地域素材

（市販の素材はプログラムがはっきりしていて素材に対する親しみが生まれてこない）

彫塑学習は素材をしっかり把握した取り組みからはじまる。この場合、市販された素材でもよいが、子どもの関心・興味、作品に対する愛ちやくを考えると、地域素材は大切である。

〈どんな手だてが必要か〉

- 図工制作カード 制作の手だてを考えている。
 - ・カード使用のメリット
 - ・ねらいをはっきりさせる
 - ・ふり返えらせる
 - ・問題点—書くことへの負担、書くことによって、目、手、心を育てる学習に通じなかった（札幌）
 - ・カードを使用してイメージに通じる取り組みをしている。工夫したこと、修正したこと、困っていること、計画的な作業が出来るようになる（青森）
- 授業以前の子どもたちの活動場面を広げてやる。

〈材料・素材面から〉

- 生活や自然に目を向け、その中から素材を自分でみつけだす。
- 抵抗のある素材に挑戦し、困難を克服する。
- 素材の持ち味を生かして、イメージをふくらませる等が大切になる。

5. 討議のまとめ

彫塑学習では、いろいろな素材（特に地域素材）にふれさせ、材料の特質に気づかせることから始まり、授業以前での活動場面を広げたり図工カード等の手だてを加えることにより、子供のイメージを豊かに立体表現させる事ができるのではないだろうか。

分科会 B-10

小学校（総合A・指導計画）

司会者	原 良三（上川）	鶴賀 孝三（札幌）
助言者	奈良 孝秋（石狩）	武田 好文（山梨）
提言者	伊藤 善彬（札幌）	相田 隆久（東京）
記録者	青柳 明雄（旭川）	木村 悦子（旭川）

1. 分科会テーマ 主体的に活動する子どもを育てる指導計画は、どうすればよいか。

2. 提言要旨

提言1 提言者（伊藤 善彬）

・題材のほりおこし

子どもは、見たことや体験したことから得た感動が強いほど、又、新鮮であるほど、それを描きたいという欲求を強く持つものである。子どもの感性を強くゆり動かし表現意欲を起こさせるような子どもの興味関心に合った題材は、教師が子どもの生活に深くかかわって、1日の生活の中で何をし何を考えているのかよく知るによって見つけることができると思う。

又、より質の高い表現をしようとする欲求を育てるためには、子どもをとりまく生活環境を整え、子どもの生活そのものを豊かにしてやらなければならない。それで、学校生活のあらゆる活動に積極的にかかわらせたり、動植物と深いつながりを持たせるなど、授業前の心の耕しを大事にした。

・題材の配列

子どもの発達段階をふまえた系統的なおさえを題材間、さらに学年間に示し、1学期は基礎的、基本的内容のもの、2学期は発展的内容のもの、3学期は、1、2学期の内容を発展的に応用するものを配列した。さらに、各学期とも各学年に共通する題材をとりあげた。

提言2 提言者（相田 隆久）

・専科で図工を担当していると、子どもの学年ごとの発達段階がよくわかるが、その中で特に5年から6年への変わり方が大きいと感じる。6年生は、自分の考えて物事を決めたり実行することを好む時期になってくるので、自発的に取り組む学習が大きな成果を上げるのではないだろうか考えた。それで、一斉指導による授業でなく、子どもの自発的活動に任せ、教師はそれを助まし育てるような教えない教育を実践することにした。

・1年間に7つの教材に取り組ませる。まず初めに、教師が用意したねらいや製作過程を示したプリントを見て、各自製作順や製作に要する時間などの計画を立てる。必要な材料や用具などは自分で用意するもの学校で用意するもの、あらかじめはっきりさせておいて授業にのぞむ。自分より前に製作した友達の作品を参考にしたり、先生に相談したりしながら授業を進め、完成したら反省表をつけて提出する。

3. 研究討議の内容

・子どもの興味関心のあるものだけを与えているとねらいを達することができない。この題材はねらいに合っているか、子どもに感動を与えるものか、子どもの新しいものとのらえを促すものかなど吟味しなければならない。

- ・子どもが本来持っている心情を、ストレートに発揮できる教材もあっていいのではないか。
- ・教師の願いが子どもを縛り過ぎていると気づいて、子どもの自発性に任せた授業形態をとった。授業中子どもの間を回りながらできるだけ対話をするように心がけている。
- ・1年に1度、4～5週間かけて、各自好きな題材に取り組ませている。子どもの満足度は高いし作品を大事にする。出来映えよりも意欲を問題にしている。
- ・うさぎのえさのにんじんを生産するところまで、子どもの心情が高まったのはすばらしい。うさぎと遊んだり世話をすることはできるが、そこまではできない。
- ・近くに遺跡があり、粘土もあることから、全校で焼物をとり入れている。6年生は、土地の名をとった「せりがや焼き」という名の縄文の壺を作りグラウンドで野焼きをしている。
- ・ねらいを持って指導する以上、あるレベルまで高めたいと思うが、子ども達の表現があまり画一的になっても困る。
- ・図工に基準はないと思う。6年生になっても3年生程度の表現しかできない子どもがいてもよいのではないか。表現できたということを確認だけで。
- ・あれもよい、これもよいでは、何でもよくなってしまふ。基準がはっきりしているべきだ。評価にもつながる。この点がはっきりさせられていないのが図工科の弱点である。
- ・子どもが最初に出合うのが題材名である。イメージが広がり、興味関心を呼び起こすような題材名をつけることが大事だ。

4. 討議のまとめ

子どもが大きく変わってきている。人間として必要な資質が育てられていない。図工の窓口から見ても困ることが多い。ものの系統性を追うあまり、人間性を育てる部分がおろそかになっている。教育全般にかかわることだが、心情を育てる取り組みがなされなければならない。

教科性を確立させるために、図工科では何を教え、何を育てるべきか明らかにする必要がある。また、図工科は、何をめあてに子どもをどう育てようとしているのか、関係者以外の人に啓蒙する責任がある。

はじめに目標があって、それに合った題材が選ばなければならない。その逆ならいつまでも図画工作科の進展は望めない。

分科会 B-11

小学校(総合B・造形的活動)

司会者	小杉 信雄(上川)	成瀬 登(帯広)
助言者	湯川 守(十勝)	富川 忠(宇都宮)
提言者	青木 新治(旭川)	阿部 宏行(札幌)
	山口 正勝(川崎)	
記録者	阿部 英子(旭川)	氏家 貞(旭川)

1. 分科会テーマ 日常の生活と結びついた造形活動をさせるには、どうすればよいか。

2. 提言要旨

◎提言1 提言者(青木 新治)

- ・雪を素材にした造形活動を集会の中でおこなっている。
- ・工夫しておもしろく楽しめる雪像を、たて割班で作る。
- ・具体的活動について、原案作りから、完成した雪像をグループ毎に鑑賞、各班対抗の騎馬戦をして楽しむまで。
- ・スライドで雪像作りのようす、集会のようすを紹介。

◎提言2 提言者(阿部 宏行)

- ・体験活動の重視。原料からものをつくる過程を子ども達に実際に体験させるため羊を一頭借りて、毛をかって毛織物をつくる。牛乳パックの紙で塗はがきを作る。上手に作れないが、つまづきをのりこえる力、試行錯誤による理解や納得を大事にしたい。
- ・友だちや教師から教えられるだけでなく、近所の人、専門家から教えてもらうのがよい。
- ・実際に体験する、試行錯誤による理解や納得、つまづきからのりこえる力、人から学ぶ心がものをつくる中で省いてはならないものである。

◎提言3 提言者(山口 正勝)

- ・体験活動に根ざした豊かな活動を生み出すためにも、子どもと教師で創り出す造形活動を。
- ・造形活動とかかわりのある学校行事をもう一度見直していきたい。
- ・実践例 七夕集会と竹馬作りの取り組みを写真、子ども達の感想文で紹介。
- ・スライドによる実践活動の紹介。
- ・日常化は、学年単位、学校単位で取り組むのがよい。

3. 研究討議の内容

- ・教育現場に5つの病がある。それを克服しなければならない。
 1. 大変病
 2. 慣習の奴隷
 3. 後追病、進取の年性、フロンティア精神が必要
 4. 言うだけ、実行することが大切
 5. ホワイトカラー、ブルーカラーである。この5つの病いを克服しなければ子どもの気持ちの中に入った創造的活動はできないだろう。ホワイトカラーではなくブルーカラーであることを忘れてはならない。(東京都 古市先生)
- ・図工の教師は子ども達といっしょにやらなければならない。一緒にしようとする先生の足を引っぱったり、絵かきになった先生がいる。
- ひと言ずつのほめ言葉が子ども達の意欲をかきたてていく。(長野 青木先生)

- ・教師のやった仕事を子どものやった仕事らしく見せることが多い。子どもがほんとうにやりたいことをやっているか。生活のリズムの中でどうしくんでいくか。しくむ場、内容、時間をどうとらえていくか。ゆとりの時間、内容をどう整理していくか。(旭川市 木村先生)
- ・やらせる部分が多いのではないか。もう一度見直していくときでないか。何か提案すると大変だと言う。大変を大変でなくするにはどうしたらよいか討議し、大変を克服しなければならない。5つの病にとりくみたい。(青森 相馬先生)
- ・大変病をどう克服していくか。
ワラで縄作り、うさぎの飼育など勤労体験学習の取り組みの紹介。これらの体験学習を造形活動に結びつけていきたい。(山形 堀先生)
- ・粘土遊びから。大量の粘土を使って2時間の図工をすると後仕末など更に2時間他の教科がつぶれてしまう。
先生が先になってどろんこになってやらなければならない。スケッチも子ども達は一緒にしようときそいにくるが、その気持ちを大事にし、子ども達から外へ行くようにしむけ、子ども中心に考えていくことをこれからも大切にしていきたい。(横浜 山口先生)

4. 討議のまとめ

- ・造形活動が、全校的とりくみの中でマンネリ化しやすいが、集団の中の個をどう生かすかが大切である。
- ・造形性を培うためには試行錯誤を繰り返す中で、悩み苦しみ、さらに挑戦する中で自ら発見していくことが大切である。気づき考え実行することを教師自らやっていくことが大切である。
- ・評定のための評価におち入らず、豊かな心を育てるために造形活動をいかにしていくか。
- ・子どもの変革より、教師の変革が造形教育を進展させるのに大事である。
- ・学校生活の見直しと全教師が一致協力していくことが大事である。
- ・学校だけではできないこともある。地域・PTAなどの手助けを借りる。
- ・子どもの自主性を大事にし、素材や題材を選んでいく。
- ・日常生活の中で、子どもの感覚をねり、想を広げていくことが大切。

(湯川 守先生・富川 忠先生)

分科会 B-12

小学校（総合C・地域・素材）

司会者 神田 耕治（旭川）

助言者 吉田 義晴（北見）

提言者 松藤 浄治（旭川） 辺土名ヒデ子（那覇）

記録者 鈴木 茂雄（旭川） 山科 瑞穂（旭川）

1. 分科会テーマ 地域環境を生かした造形教育はどのようにすればよいか。

2. 提言要旨

・提言1 提言者（松藤 浄治）

現在の生活は便利さや効率・利潤などを追求するあまり、生活に必要な物は大概商品として準備され、買う事によって生活を維持する事ができるようになった。その結果、手作りの持つ温かさや優しさの文化は、衰退の一途をたどる様になってきた。しかし、子供達は自分の手で物を作る事をいとわない。私は以前から木材をどの様に活用させたらよいかを考え実践してきた。児童の発達段階、加工能力、作業時間、費用、時期など困難な条件が重なったが、加工しやすい棒状、板材、径木、薄皮、紙、ポプラやドロの軟材などで実践してきた。木材はあたたかさ、美しさ、加工や接合の面から教材として優れたものを持っており、今後も教材として積極的に活用していきたい。又、木材としてばかりでなく、樹木として、森林として、我々が忘れかけていた自然のたくましさや、優しさを見なおす点でも良い教材になろう。

・提言2 提言者（辺土名 ヒデ子）

郷土の格調高い伝統工芸であるびん型のよさを知らせ、それを受けつぎ、守り育てていくという心を養うと共に、郷土文化の誇りを持たせたいという意図で、びん型を教材化することを進めてきた。びん型が郷土の中で生まれ育った背景や、先人の偉大さにふれさせると共に、現代っ子の目と心でとらえ、各自のアイディアを積極的な姿勢で表現させるにはどうしたらよいかについて考えてみた。その結果、個人文集の表紙にびん型を取り入れ、学級経営の工夫、国語（作文）教材と関連して指導した。資料集めに始まり、図案のスケッチ、色調の工夫、用具の整備取り扱い、工程・手順の明確化、教師のびん型の実技研修、製本などの努力の下に、びん型の表紙による文集ができた。子供達は宝物のように大切にしている。今後の問題点としては、豊かな表現をさせるための材料・用具やその使い方、図案の単純化や強調の段階での指導と思われる。

3. 研究討議の内容

◎地域社会の特色あるものを教材化するため、どのような手だてを講じたらよいか。

- ・地域の伝統的なものを教材化する場合だが、子供達は簡単に作れると思うと、大人の先人の苦勞がわからないのではないかと。津軽ぬりも「ばかぬり」と言われるくらい先人の苦勞があるのに、教材化すると絵の具のようなもので、2、3日で簡単にできるのは、学校教育として良いのだろうか。
- ・子どもができるものにおきかえてやるのも教材化として大切なのではないだろうか。また、教材化したから簡単とはいえず、たいへんな作業を伴うものも多い。子供が教材化されたものの作業をおぼえる、先人の仕事を肌で感じとるのもたいへんなようである。

- ・造形活動のすばらしい学級は、良い学級経営をしている。地域素材を取り上げる時は、まず、学級をきちんと育てることが必要だと感じた。
- ・北海道は、冬のイメージ、雪のイメージが白と黒との世界で、白黒の版画教材と共通するものがある。また、氷のブロックでいろいろなものを作るのも、北海道ならではの素材と思う。
- ・団地の中の学校では、空地に米やいもを作り、犬、ねこ、ニワトリ、うさぎを学校で飼うという事で、素材を生かすというより、補充している感じである。
- ・東京では、地域素材がないという環境で、そのうえ、紙が多いので紙に無感動になっている。どんな感性を持たせ、何を育てていくのかきちんとつかんでおかないといけないという感じである。
- ・高山では赤ちゃんの時から回りに彫刻刀がごろごろしているという。
- ・地域素材指導の時は、図工だけで間に合わないので、合科をしたらよいのではないか。
- ・合科と考えるのではなく、社会・国語混ぜ合わせて集約して表現していくのが図工と考えた方がよい。合科と考えると図工科が否定され消されていくのではないか。
- ・地域素材を考える時、先人から学ぶということで、人間関係を作る、つまり人をも含めて地域環境と考えた方がよい。(わらをなう、こまづくりなど)

◎素材や用具、工具の効果的な活用

- ・工具の開発が教師には必要なのではないだろうか。
- ・道具の使い方(彫刻刀や接着剤)に日常苦勞している。
- ・石を彫るのに古い彫刻刀、金さりのこを使っている。
- ・授業では乾燥材を使っていたが、木の質によっては生のものを使ってみるのもよいのではないか。
- ・小刀でほうの木を切る時、なかなか切れないので小刀の様な使い方を逆に学んだ。
- ・竹トンボを作りたいのに素材もない用具もないという悩みがある。

4. 討議のまとめ 助言者(吉田 義晴)

- ・指導者の情熱がなければ、どの教科も育たないし、また、指導者がその教科を好きでなければその教科も育たない。教師が子どもに信頼感を持たれるようになってほしいし、また、教師が地域に密着するようになってほしいと思う。地域素材を取り入れる時、その地域素材を教材に持ち込む目的は何かと考えねばならないし、挑戦してみようとの気迫を持ってほしい。そしてでき上がった作品には、すぐ評価を下すのではなく、どこが難しかったなど、子どもと語り合っほしい。

分科会 B-13

小学校（総合D・作品を語る）

司会者	渡辺 正勝（風連）	伊藤 暢紀（札幌）
助言者	橋場 昌三（留萌）	森内富久志（東京）
提言者	飯塚 礼二（旭川）	渡辺 貞之（深川）
	毛馬内国夫（札幌）	栗林 和雄（長野）
記録者	大谷 伸也（旭川）	弘田 洋子（旭川）

1. 分科会テーマ 子どもたちの、みずみずしい感性をどのように受けとめ、発展させていったらよいか。
2. 提言要旨 子どもの作品を持ち寄り、題材や指導のあり方、作品の見方について語り合う。
 - (1) 提言1 提言者（飯塚 礼二）
 - ・子どもの作品を通して、旭川が取り組みを続けて来た「生活に根ざした題材の掘り起こし」をみる。各学校で写生会を設定し、春は、学習している友だち、遊んでいる私たちなど学校生活を中心とした題材、秋は、動植物、建物など、子どもたちがくらしの中でじっくりとあたため、蓄えてきた対象とのかかわりを題材としている。
 - ・子どもの絵には見る人の心を和ませてくれる魅力がある。
 - ・見る人によって異なる子どもの絵。
 - ①上手、下手を問題にする子ども
 - ②子どもの絵を作品として選り分ける第三者
 - ③絵を描くことを通して成長を願う教師
 - ・子どもが絵を描くことで育てること。
 - (2) 提言2 提言者（渡辺 貞之）
 - ・現代の子どもたちの多くは絵を描くことが嫌いになっている。そういう現実の中でどのようにして子どもたちに生き生きとした絵を描かせるかということが、最も今日的な課題である。絵を描かない、或いは描けない子どもは「描く気がない」ことが根元的な原因になっている。
 - ・絵を描く気がおきないという要因になっているもの。
 - ①描く行為がいつも同じで、マンネリ感を持っている。
 - ②表現行動が、表現したいことと結びついている意識がない。
 - ③表現することがおもしろくない。
 - ・子どもの表現技能というものは、主体的な創造行為の中で必然的に要求されて高まるものであると思う。
 - (3) 提言3 提言者（毛馬内国夫）
 - ・子どもの表現意欲を高める題材——子どもたちの生活の中で汗を流した共通体験の題材化
 - ①子どもに造形的なたくわえをつくっておくことが大切である。
 - ②造形的なたくわえを積みあげの中で、自分の表現をつくり上げようとする態度を養う。
 - ③発想のひろがり、表現方法のひろがり意欲につながり積極的に取りくむようになってきた。
 - (4) 提言4 提言者（栗林 和雄）
 - ・みずみずしい感性を引きだす指導のあり方

- ①主題をしっかりつかませる。 ②ねらいに基づいた表現の手だてを教師も描き感得させる。
- ③色で描く、教師のつぶやきの中で彩描の方法を教える、次に手ばなす。
- ④教師が②、③を真剣にやってみせる。後半は個人指導をする。

・色弱の子どもの個別指導についての実践

3. 研究討議の内容

- ・大らかさの中に繊細さのあるすばらしい2年生の絵の指導は、特別なことはしていない。絵のできた時に指導したり、順番をきめて描かせるなどしてきた結果によるものである。
- ・1年生の場合、鼻から描かせることはむずかしい。大人でも鼻を描くことはむずかしいと思う。
- ・低学年の絵には生き生きと描かれているものが高学年になるにしたがって個性がなくなっていくように思われるのは、高学年になるにしたがって観察力が高まり実物に近づけようとする気持ちも育って来る。個々の子どもが同じ思いから出発して自由に表現していく低学年と異なり、より本物に近づけようとするためではないだろうか。個性とは変化ではないと思っている。
- ・低学年では、バックの効果を期待しないで自由にしている。クレヨンとえの具を併用させる場合は、同じ色でも違いがあることや、深みが出てくることを感じ取ってほしいと期待している。
- ・子どもの目の高さで指導するのが大切である。子どもの造形性、子どもの気持ちを考え、学年の発達段階に気をつけることである。
- ・地域性が出ていて、それぞれ感心した。専科も学担もねがいは同じである。
- ・教えずぎ、描かせすぎは、子どもが苦痛になるのではないか。みずみずしい感性は、簡単な指示だけのほうがよく、ちょっと気づくことで育つのではないか。
- ・これがよい絵と決めてはいけないと思う。子どもが自然にわかることが一番よいと思う。感性を欠かないように技法指導をしなければならない。
- ・図工教育は人間教育ではないか。子どもと教師とのかかわりが大切である。教師の愛情やねがいが子どもを伸ばしていく。教師は最大の環境である。

4. 討議のまとめ

- ・造形活動は遊びであると考え。子どもは遊び人間である。遊びを文化的見地から考えてみる必要がある。特に現代はそれが要求されていると考える。
- ・授業の中に遊びが入ると子どもたちが生き生きとしてきて、学習効果があがる。絵の中で子どもがどれだけ遊んだかを見る。遊びと同じような充足感は表現していく子どもの快感となり、絵はかろやかになる。発表された絵はかろやかに描かれている。
- ・遊びのある授業を進めていくには、教師の緻密な計画性と創造力で子どもの遊びを先取りしていかなければならない。
- ・自己表現とは、自己の内面の誠実な客観化であると言われている。これを繰り返すことで意欲が変わり、波及していく。
- ・子どもの感性は教師の姿を見て育つ。表現の中の光るものに感動し引き出してやることである。

分科会 B-14

中学校（絵画・版画）

司会者	宮崎 弘（旭川）	近堂 俊行（七飯）
助言者	秋山 修世（函館）	間綿 武敏（大阪）
提言者	大竹 東（秋田）	岡澤 邦彦（札幌）
記録者	鳥本 捷夫（旭川）	川合 薫（旭川）

1. 分科会テーマ 表現のよろこびや確かな造形能力を育てるのには、どうすればよいか。

2. 絵画提言要旨と討議の内容

- ・ 描画指導において、合理的な図法等の応用から入ることが、知的好奇心のある生徒には効果的であり、対象を多角的・積極的に観察できる態度を身につければ、対象へ働きかける感覚は鋭くなり、表現内容は豊富となり、表現のよろこび、完成の充実感が増すものと考えられる。
- ・ 授業前の取り組みとして、アンケートを実践した。①両用紙の表裏を教わっていない。②パレットの使い方が決まっていない。③「原色」「混色」は半々であった。④水入れは足元が多かった。⑤細かい筆を使用してきた者多く、重ねぬりの経験はかなりあった。等の結果から指導していくうえで配慮し、今までの概念からの脱皮をはかった。
- ・ 「一本のびんを描こう」という実践で生まれた絵について、絵具の使い方、技術練習課題、学年系統等についての討議があった。

3. 絵画討議のまとめ

作品には「主題」がある。主題というのは個人が描きたい託したいというもので、途中で動機づけられたものを確実に出していく為に要求されるのが技術である。はじめに主題があって、それを実現する為に技術が後から要求されてくる。この順序が大切で、技術が先行すると色々な問題点が起きてくる。アカデミックな西洋の美術教育では、中学生段階までに技術的なことを教えることはなく、高校生頃になってから徹底的に指導をする。表現主題は教えるものではなく、本人がとらえて出していくものという考えが徹底している。

日本人は「技術」というものに執着する体質がある。技術に対する信仰心・追究心というのは西洋人の目的として技術を勉強するというのではなく内面があるように感じられる。技術学習そのものを否定することは出来ない。しかし、教育美術においては子どもの主題を常に前面に打ち出しながら、それに技術をフォローアップしていくことが本筋でないと考える。

現場では、どうしても小学校と違うんだということで、分野別にせまい通路におしこんでしまうような実践が行なわれている。もっとテーマに迫る為の表現法を考えなければならない。中学校へ来ると絵が描けなくなる原因は二つある。一つは、主題をつくる時感情だけでなく合理的、知的に操作しなければならないと思うようになること。もう一つは、技術的なまよいがでてくることである。中学校へ来たら極端に絵の描き方は違うという指導は好ましくない。楽しく表現しようとする美術の授業を大切に、描こうとしていた気持ちをそのまま生かすようにしなければならない。

4. 版画提言要旨と討議の内容

- ・ 版画は、形をとらえる力が要求されるので1年生として難しい。特に最初のデッサンを木版画として下絵にかえていくところで苦勞した生徒が多かった。対象が顔であるから明暗の差をつけ

て、かげで表現することが難しいかもしれない。立体感を出す為の彫刻刀の使い方も苦慮したところである。

- ・安易に制作に入る生徒が多いことから、下絵には十分時間をかけて形を追求していく態度を養いたい。彫刻刀の使い方や彫りの多様性を示すなかで工夫してほめることを期待した。
- ・資料の提示、彫りの計画、ためし彫りを十分に行なう工夫をはかった。
- ・美術教室の資料、マップを使った学習課題への取り組みの状況把握についての説明。
- ・版画の彫りは、何割くらい彫るのか、濃淡でとらえるのか、あるいは明暗でとらえるのか。

5. 版画討議のまとめ

版画の彫りについて、濃淡で考えると、白と黒にわけると、つまり彫るか彫らないかで終わってしまう二通りしかない。それが明暗でとらえられるようになると色彩が明暗にイメージの中で転換できる。

版画は白黒のおもしろさだというのが、創造する色彩のおもしろさだと思う。沢山彫られていて、そこをどういう色に自分は感じながら画面を見ているかという、イメージの遊びである。それによって一つの版画がどの様にも解釈できるという、暗くでも、暖かくでも、あるいは又、力強くでも自分のイメージの中で色をうめあっている。それが版画の楽しさだと思う。彫りの割合が問題となってくる。彫りをうまく成功させる為には、ものの明暗をどうとらえているということが前提に子どもになれば難しい問題である。又、版画はできた作品だけでなく、彫りの中で、手に触れる、目で触れるという制作のプロセスを大切にしていかなければならない。

下絵とのかかわりについては、版画くらい課程を重視する題材はないわけで、下絵を立派にできる子どもも大切にすると、下絵ではなかなか筆をはしられない子どもでも彫りの段階での活躍を期待している。つまり、視覚的感性と触覚的感性を生かした指導をしていかなければならない。日本の伝統的なものに「もと絵」というものがあり、いかに忠実にもと絵に近づけるかということが重要なことであったが、板に直接下絵を描いたり、彫りの段階で工夫させるなど、多様性についても考えていかなければならない。

版画でなければ表わせない、版による絵をつくっていかなければならない。つまり彫刻刀で絵を描いていくことを大切にしていかなければならない。

分科会は、2人の提言の先生の実践作品を中心に、絵画・版画の問題点について、旭川としては珍しい暑さの中で、熱心に話し合いが行なわれました。参加者は33名。

分科会 B-15

中学校(デザイン)

司会者	川口 裕平(旭川)	奥野 郁男(札幌)
助言者	片桐 勉(苫小牧)	山口 亮一(横浜)
	武藤 忠春(東京)	
提言者	吉本 博二(旭川)	宇野 義行(東京)
記録者	山野 照人(旭川)	鍛冶川 明(旭川)

1. 分科会テーマ 発想を重視したデザイン活動をさせるのには、どうすれば良いか。

2. 提言要旨

(1) レタリングの応用——私のコースターをデザインする。

大規模校で、施設整備が整っているとは言えない条件に加え、生徒達にも様々な問題がある。自らが創り出し、喜びを味わうことができない子。持続性、計画性に乏しく、自分の物を大切にしない子が多い実態から、生徒達が自信をもち、感動する授業を創り上げようとした。

デザイン学習の中でもレタリングは、1年生がレタリング、2年生ポスター、3年生はレコードジャケットと発展するが、1年生は基礎としてのレタリングをコースターの製作に応用することで子どもに興味と関心を持たせ、更にくらしの中に生かせればと考えた。

実践の中での子どもの反応は、次回に別な形のコースターを作りたいとか、紙では木に弱いのでベニヤで作りたい。また作品は家に持って帰り、教師に貸してくれない(研究会に持ってこれなかった作品もある)などもあった。

これらのことから

ア. 教師と生徒の間に意が通じている授業

イ. 何をやったかがわかる授業

ウ. 何か新しいものを得たという満足感のある授業

この3点を重視した制作活動の多い授業の設定が必要である。

(2) カレンダーをデザインする——自然物や人工物をもとにした構成

江戸川区という地域は、スポーツの盛んな地域であるが、一方では文化面では置き去られている感がある。生徒は美術や音楽に抵抗を示し、特に根気がない。その中で、子ども達の感情を育てることが課題となっている。

カレンダーを題材にした時、北海道と違って四季の移り変わりが乏しい。そこに発想の狭さがあったのではないかとされた。しかし、そうであっても日本の古来からの美しさを感じとらせたいという願いがある。

実践の中では、発想に結びつける形の単純化や構成の意味がよくわからず、キャラクター商品のようなものがでてきたりした。それらは観察をもとにした表現をさせることで克服していけるとされた。色彩については、六色入りチューブのポスターカラーを使用し、トータルカラー(色見本)を参考に(トーン別分類表も作らせた)混色させたが、この作業自体にも興味を示す子どもも多く効果的であった。

3. 研究討議の内容

- ・授業の評価という観点から、作品の一部を提示されても、その授業が本当にうまくいったのかどうか確認できないと思うが。

これについては、旭川、東京とも学校行事等の関係などで、どうしても一部分しか持ってこれない現状であるということであったが、すべての作品提示が必要な時もあるが、観点を明らかにして提示するという意見もあり、全造連でも考える必要があるという助言がなされた。

- ・アイデアスケッチの段階ですぐ指導してしまい生徒の発想を駄目にしてしまうことが多いが、どのようにしたら良いか。

子どもに考えさせることをポイントにして、生徒の作品を見てこうしたら良いという部分はまず置いておくこと。「もっと良くするためにはどこをどうしたらいいと思うか。」と助言をして考えさせる。そして方向が決ったら、深まりを持たせるような指導も加えておくが良い。

- ・色ぬりに時間がかかり興味を失ってしまう生徒がいるのだが。

ポスターカラーの扱い等は発達段階に応じての指導があるが、それを教師がおさえておくこと。途中であきらめないための一つの方法として、ビンのポスターカラーと適度な筆などを持たせると、子ども達は、専門家の使う物が使えらると思うとそれだけでも喜びを感じるものである。そのようにして出来た作品は他人にとって駄作であっても、本人にとってはそうではない。このように子どもが感じていることを教師が感じとってやる必要がある。極言だが、毎時間の自己評価よりも大切なことである。更に生徒にやらせる前に自分でやってみることが、新たな発想につながっていくことを忘れないでほしい。

- ・レタリングで言えば、ゴシック体、明朝体の学習を打破したい。もっと子ども達の発想を大切にレタリング学習の方法があるのではないだろうか。

それには発想の手がかりはいたるところにあるのだから、その手がかりを基に独自の発想をどんどん取り入れて行って良い。

4. 討議のまとめ

「発想を重視した……」というテーマにたどりついたと思われるが、まず言いたいことは「指導者自身が発想の転換をする」ということである。

そのためには、

- ・応用編を考えてみる。(コースター)
- ・課題に対するイメージを他の手段で表現させる。(文章、連想ゲーム、地域の特色も生かしながら)
- ・年間指導計画の縦の流れをきちんとおさえる。

これらのことをやっていくことが必要になるだろう。

つまり子ども達にばかりに望むのでは解決に至らない。教師自身の豊かな発想こそが問題解決の糸口になるということを押えておくべきである。加えて、中学生の現在に生きている姿、現状からの精神的な回復を望んでやまない。

分科会 B-16

中学校(彫 塑)

司会者	寺原 実(旭川)	島 昇二(札幌)
助言者	滝本 幸一(札幌)	尾上 治(東京)
	鶴田 善久(名古屋)	
提言者	多田 紘一(札幌)	
記録者	原 完(旭川)	長野 晃晃(旭川)

1. 分科会テーマ つくる心のひろがりと深まりを求めて

2. 提言主題 生き生きと豊かに立体表現をさせるには、どうすればよいか。

3. 提言要旨

- ・きょうの旭川の授業は素晴らしい。札幌では、とても、きょうのようなのは、挑戦できない。汚れるし、仲々取りくめない。ヤギが草の上におころがっているのにビックリ。札幌の1年生で、ピーマンの写生表現をやっているが、それでも制限される。
- ・彫塑は、材料、題材えらびに最も苦勞する。きょうの授業の作品を、途中で、どう保管するか、大変なことだ。
- ・札幌では、美術教室を使えるのは半分の時数で、残りは普通教室。多目的教室を美術室に代用しているところも、多くて半数。
- ・札幌では、実践を持ち寄って討議している。分野ごとに地区ごとに実践し、ことし2年目である。秋頃には、まとめたい。情意、認知、技能面から、それぞれの働きをまとめてみようと考えている。また、典型的題材があれば、みんなでもまとめて実践しようと話しあっている。

4. 研究討議の内容

- ・800人規模のうちの学校では、美術で落ちこぼれが多いが、彫塑は好きなようだ。
- ・1,200人のうちの学校では、美術教室が2つあるが、1つは作品保管庫となっている。プレス機は、怪我するといっているので使っていない。
- ・本物の粘土を使わせたい。1年では粘土クッキーと、鳥。2年では実物大の土粘土で頭像をつくる。展示などに使用したあと、こわしてしまう。3年では選択美術でも粘土をやる。
- ・千葉市では年間、彫塑1題材くらいで、1年で手、2年で頭像、3年で卒業記念モニュメントを石膏でつくる。美術室は、殆んど1つで、何人かで話し合いながら、やっている。熱に、70~80%行っており、4教科は手を抜く生徒が多い。
- ・作品の保管場所がない。1年で手。2年で頭像と、動きのある人物。3年では彫塑をやれない。きょうの授業は工夫がある。バケツにビニールを入れるなど、勉強になった。
- ・1,300人の学校だが、生徒が多いと何も出来ないし、設備もよくない。予算は取っているのだが、生徒数が減らない。
- ・900人の私の学校では、1年で手・動物。動物では図鑑を参考にするのが多くなる。2年では、プロポーション、骨組の基本型を教えてしまう。バレー回転レシーブなど。後始末。生徒はいやがるが、やらせる。
- ・670人の私の学校では、美術室が2つあり、2人でやっている。2年生で、1人10kgの足にとりく

んだ。木工ボンドを2～3回くりかえしてぬると丈夫になる。彫塑は、デッサンだけでいやになる子があるので、即、粘土に入ってしまう。1・2年で美術を好きにさせ、3年で卒業させたい。美術の学担で良かった、と言われたい。

- ・私は、デッサンをやってから入っていく。2・3年になると、ツツパリと、まじめな子のグループが出来る。3年になると、忘れものをする子が半数、こわす子がクラスに2人くらいいる。作品を作りあげる以前の姿勢を早く作らせたい。
- ・人数は少ない方がよい。非行問題が解決しない。
- ・しつけは、1年の時にしっかりやっておく。忘れものは取りにやらせる。
- ・導入では、資料—カレンダー（動物・風景等）などを取っておく。子どもの作品なども取っておいて、パッと見せる。出来るだけ、先生が言わないで、子どものものを見せることが一番大事だ。しつけは、1年でくずれると、2・3年でなおらない。座席表も大事だ。ワルに声をかけられるのも美術の時間だ。性格判断の資料となる。
- ・23年から美術をやっている。先生が一生懸命やる事が一番大事だ。生徒には、一生懸命かいたのがいい絵だと教えている。

5. 討議のまとめ

- ・生活面での土台の上に学習出来る。学習くずれの問題に、全国的にアプローチしなければならないと思う。
- ・彫塑学習では、「イメージ」づくりが大変である。
- ・札幌に、広い面積の「彫刻の森」が出来たので、PRしてほしい。（作品数、百点）
- ・教育課程審議会で審議されているが、美術、2・2・1を確保せねばならない。
- ・今回の授業で、自己評価を含め、学習カードがものすごい。
- ・要求水準の見極めが大切だ。子供に合っているのか、いいのかの。
- ・生き生きとした生徒の活動が大切だ。今回の頭像でも相手のモデルを好んでいるかの問題。そうでなければ、表面的処理になる。心情面を訴えれば、少々狂っていてもよい。制作の流れは、中断してはいけない。生き生きにつながることだ。
- ・生徒の作品について、これはうまい、いい作品だといって、取り上げてはいかないか。みんな、真似をする。それに代る言い方はないか。
- ・忘れものをしてはいけないものを1年で与えておくと、それにこりて、生徒は2・3年で忘れぬようになる。抵抗が多く、不可欠なもの、嫌がるものを、はじめに与えておく。

分科会 B-17

中学校(工芸)

司会者	小木 正寿(旭川)	加藤五十和(札幌)
助言者	浅利 泰基(上川)	新谷 純輔(札幌)
	工藤 裕功(東京)	
提言者	渋谷 弘志(釧路)	上柿さち子(京都)
記録者	杉山 徹(旭川)	土屋 誠(旭川)

1. 分科会テーマ 素材を生かし、楽しく豊かに制作活動をさせるには、どうすればよいか。
2. 提言主題 (1) ノッカーをつくろう。
(2) 全校で取り組む陶芸教室

3. 提言要旨

- (1) 学校は開校7年、生活環境はあまりよくないので、教材は学校でそろえている。工芸の教材は1年生・ノッカー(木)、2年生・オカリナ(焼き物)、3年生・カスタンネット(木)と学年別に配当し実施している。

ノッカーをつくる場合、指導のねらいとしては、用途を考え楽しく使えるものを製作するということと、動く機構を理解し計画的に作る態度を育成することである。まず発想の段階では「打つ」ということから木ツツキ、鳥、手(ボクシング)などのデザインが多くみられる。このデザインを基本にして切る(糸のこ)技術的なことも考え単純化させる。その後型紙でつくる、木取り、穴あけ、彫刻、仕上げ、装飾的なことも考えフェルト、ビー玉(目)の使用も考えた。完成作品については、実際に使用しその機能について話し合わせると共に工芸作品の生活化についても考えさせる。

また3年生のカスタンネットは音楽で使用、好評であったことの報告があり、ノッカー、カスタンネットの作品が紹介された。

- (2) 生徒の実態については、開校12年の学校で学力はあまり高くない。美術科においても発想が貧弱で、創造性に欠ける所があり、また学習意欲も低調で主題追求の持続性に欠けていた。そこで美術科では特に、美術ノート活用の工夫、美術教室の雰囲気づくりに工夫し、植物、水性動物(魚)を飼育栽培し、構想、スケッチに役立てている。また地域の特性を生かし、身近にある京都競馬場の厩舎に行って馬の観察から生き生きと描かせ、それを工芸の資料へと発展させている。(音楽に近いので陶芸に力を入れている。)

陶芸教室については学校行事の中に入れ全校で実施している。1年レリーフ(陶板)、2年小物入れ、3年植木鉢(共同製作)が課題で馬をデザインの中に入れることを条件としている。実際の指導の段階では、前日までの授業の中でアイデアスケッチから下絵の完成、製作の順序の説明、成形の方法、焼成の方法(映画、炎と土による)などの説明をし、当日は美術係による用具、教材の配布、成形方法の説明により実施している。焼成については業者に委託、秋の文化祭に展示する。またこの陶芸教室については地元の新聞にも紹介され賞賛された。

結びに、工芸学習を通して、すべての生徒にそれぞれが素晴らしい能力を持っているんだということに気付かせ、やる気を出させ、私もできるという自信を持たせることが、美的直観力や造

形感覚を高めることだと考えている。

この後にスライドによる競馬場及びその周辺、馬の世話、スケッチの状況、学校の紹介があり、さらに全校陶芸教室の作品の一部及び新しい陶紙の作品も紹介された。

4. 研究討議の内容

- 工芸のアイデアスケッチの段階から流行のキャラクター（スヌーピーなど）が見られる場合の指導について……。
 - ・他人の発想をまねることが良い作品と考える生徒のいることの実態と、創造することの大切さを知らせる授業の重要性の確認。
 - ・ノッカーの場合は「打つ」ことを強調したのでキャラクターは出てこない。
- 全校陶芸教室の取り組みはうらやましい。生徒の取り組みは、まじめで意欲的、特に3年生の反省文の中に協力することの大切さがうかがえる。
- スケッチブックや美術ノートの使用について……。
 - ・スケッチブックを3年間使用しているので、アイデアスケッチの段階で1年で描いた馬を3年で使用することも有効であると同時に、たてのつながり（1年2年3年と）が重要であると思われるし、発想の補助としても非常によい。

5. 討議のまとめ

- 授業や作品から旭川の質の高さがうかがえて大変よかった。また、学校が荒れたときの美術教育の重要性（特に工芸）を再認識する。
工芸の授業では発想、構想の取り扱いが大切で、ばらばらな知識をまとめることから全体の心算をとらえ、イメージの中を広げ主題をとらえるといった段階が考えられるので、今後さらにイメージについての研究を進める必要がある。
- 工芸の発想は形から機能を考える場合と機能から形を考える場合の二面があり、自由な発想のための条件整備が必要である。
全校体制の工芸の取り組みもこれからの課題の一つと思われるし、条件が合えば野焼きなども興味深い教材の一つではないだろうか。
- 工芸は多くの作品にふれること、授業環境の整備とそれを生かすこと、そして自分の生活の中に、心を豊かにする工芸作品をとり入れることが大切である。
絵画や彫塑、デザイン、工芸、鑑賞は円錐に例えると底辺であり螺旋状にまわりながら頂点に立つのが美術教育ではないだろうか。

分科会 B-18

中学校（総合A・指導計画）

司会者	本間 篤（旭川）	荒谷 博文（札幌）
助言者	三谷 哲司（札幌）	出水 操（東京）
提言者	村谷 利一（札幌）	名川 正彦（仙台）
記録者	五十嵐一之（旭川）	山理 利春（旭川）

1. 分科会テーマ 主体的に活動する子どもを育てる指導計画はどうすればよいか。

2. 提言要旨

(1) 提言1 「すじ道のわかる授業の実践」(村谷 利一)

札幌市教研を中心として、ブロックに分け、領域毎に研究を進めている。研究の具体的な方向として、札幌市の中学校教育課程の年間計画基底を基に、各学校で計画を作成している。計画作成にあたっては、次の点を留意している。

- ① 創造的な喜びを深く味わわせることに重点を置き指導内容を精選する。
- ② 小学校との一貫性に留意し、指導内容相互の有機的な関連を図り、より総合的な観点から題材を構成する。
- ③ 心象的な表現と適応的な表現、平面的な表現と立体的な表現の扱いに極端な偏りが生じないようにする。
- ④ 表現と鑑賞は表裏一体の関係にあるものとおさえる。
- ⑤ 第三学年における表現題材は、第一学年及び第二学年での履習内容を考慮して、絵画及び工芸に力点を置くことにする。
- ⑥ 内容が高度なもの、広範囲にすぎる教材は扱わないように留意し、できるだけ地域の素材や生活に生きる教材、身近な主題を扱うようにする。
- ⑦ 教科書との関連を積極的に図る。

「すじ道のわかる授業の実践」のとりくみから、授業の実践記録をまとめ、指導事例集の作成をめざしている。また、基本的指導事項の視点を①情意、②認知、③技能としている。

(2) 提言2 「表現力をのばす確かな造形活動をめざして」(名川 正彦)

指導要領をよりどころとし、題材配列表、目標分析表に指導の重点を要約し、何をどのように指導すべきかを明確化した。

形成評価を実践しているが、指導の各段階で評価をし、その試みとして、自己評価カードを取り入れるている。

仙台市教研全体として、目標分析表を作成することを実践し、各学年毎に取り組んでいる。また情意面の重視から、目標分析表の作成にあっている。

3. 研究討議の内容

○テーマの主体的な活動を授業の中でどのように子供に動機づけているか。

村谷

・主体的な活動、意欲づけとするために、鑑賞から導入しているが、題材によっては、情意、技能面からの場合もある。

名川

- ・身近な題材、興味、関心のある題材を主とし。何をどのように進めるかを生徒に明確にさせる。
- ・自己評価カードは、教師が感想を記入し、個人に整理させている。
- ・目標分析表は時間がかかるし、自己評価カードにも時間がかかるが、効率的な面からどうか。また、生徒の変容は。

名川

- ・目標分析表は、学校の実態によって、また、市内で分担し合って作成している。いずれにせよ、目標を明確化することで、対話的な授業の成立に役立っている。
- ・一学期一題材、生徒個々に意欲感、満足感を持たせるようにしている。
- ・参会者より、一学期一題材の取り扱いについて賛否両論があり、助言者の意見を求める。

(助言者：三谷 哲司)

- ・今、必要なことは何か、どのようなことをしたら力がつくのか。
- ・過去において市教研で全員が指導案をつくり実践し合ったが、その結果「高めたい力」とは何かが焦点化された。
- ・子供の立場で物を考え、内容と方法とが一致した指導でなくてはならない。

4. 討議のまとめ

感動する教材をどのように組み立てていくか、子供に苦勞をさせることで達成感を与える指導はどうあるべきか、教材の生活化等のいくつかの課題の達成には、我々教師の創意工夫が必要である。

写生的な表現を求めていく授業においては、事前の多様な基本的な指導が必要である。構成、構図をしっかりと教えることが大切である。何故描くかを導入の段階からのおさえを出発点に複合題材としての考え方で進めていく必要がある。

題材の指導内容をしっかりとおさえ、一つ一つの題材がもっている要素を考慮すべきである。また鑑賞に対する授業をもう少し捻げていく授業が組まれてもよいと感じた。

分科会 B-19

中学校（総合B・地域・素材）

司会者	石岡 博昭（札幌）	氏本 利光（旭川）
助言者	池本 良三（苫小牧）	
提言者	佐藤 公毅（苫小牧）	永関 和雄（東京）
記録者	菅 導信（旭川）	及川 輝夫（旭川）

1. 分科会テーマ 地域環境を生かした造形教育は、どうすればよいか。

2. 提言要旨

(1) 提言1 提言者（佐藤 公毅）

- ・工業地帯に隣接する住宅地に位置し、生活経験の狭い自主性のない子どもたちが多く、こうした実態をふまえて次のような基本的な考えに立ち実践をすすめている。
- ・教科の基礎、基本をおさえ、1年では自分の周りから題材を選び絵画、彫塑表現を、2年では目的、ねらいをもったデザイン、工芸表現を、3年では主体的個別化をめざしたい。
- ・失敗の経験を持たぬ子が多いが、試行錯誤が許されるような計画をとり入れた。

(2) 提言2 提言者（永関 和雄）

- ・自然を生かした素材の殆んどない状況が大都会の地域性と言える。
- ・平和都市宣言をした機会に、新宿をもう一度とらえ直させ、新宿と平和を結びつけたポスター（1年）制作させた。
- ・生涯教育という視点に立ち地の利を生かした美術館鑑賞を個人の課題とし、生徒に見せたい展覧会は積極的に紹介し、夏休みの宿題としている。
- ・家庭（地域）とのコミュニケーションを図るため、教科として「from 美術館」を発行して理解と協力を求め、成果も見られる。

3. 研究討議の内容

(1) ポスターにおけるコピーの取扱いについて

1年生では、文字はできるだけ少なく、レタリングの負担軽減を図る必要がある。コピーという考え方も充分指導が必要である。

(2) 各地の実践交流

助言者より、全国各地の地域差もあり、題材・素材をとらえての交流に限定すると討議も難しくなる。地域の環境づくりに積極的に働きかけを行っていると云った実践も含めて、地域にこだわらずに交流することにしてはどうか。

東京・品川区——町工場のある中に住宅があり、親代々が住んでおり地域や学校を大切にしようという意識や結びつきが強い。マスコミ等の発達から、次第に地域差がなくなっているのではないかと考える。生徒自らが創造しようとする意欲や力に欠けており、キャラクター商品などのデザインをヒントにしたアイデアの工夫をさせている。

北海道・日高——東京の実践に、カラーカード（色見本帳）によるデザイン学習の実践があったが、あれはやはり東京の色ではないかと考える。地域でのとりくみを大切にする意味から昨年1年がかりで、町にある色を季節ごとにあつめて、色手帳をつくった。大都会の中にも

雑草や自然はあると考える。そうした自然に気づかせる教育や指導も、描かせたりつくらせたりすることと同様に大切だと考えている。

司会——体験させ、広げていく活動が造形力に結びついていく。旭川での山羊の実践などにもそうしたことが言えるが。

北海道・旭川——山羊の飼育を通じた立体表現の実践に代表されるが、ただ単に対象を観察するというだけでなく、授業以前のこうした経験や体験が大きく授業に影響していくと考えている。授業も大切であるが、こうした生徒の造形活動を広げていく取組みについて研究をすすめている。確かに、今の子どもたちの経験や、見たり、つくり出したりする力が弱いと言われているが、我々の取組みの見直しをもっとすべきではないのか。

助言者——今の話合いを通して感じることは、中学校の教師は、小学校を経験する必要があるということだ。その逆も言えるのだが、もっと小学校の実践に学ぶべきだと感ずる。見て描かせると言うが、単に見せるだけでは駄目だ。体験も感動も中途半端では、子どもは育っていかない。視点をすえて育てることが必要であり、ポイントをわかりやすく示すことも大切だ。

北海道・胆振——統合中学校に在るが、地域の小学校の取組みに格差があり、連けいを図る必要を感じている。また、自然環境にも恵まれているが、その良さを感じるまでになっていない生徒が多いのも残念である。

東京・提言者——環境や条件が整っていることもあり、積極的に美術館の鑑賞活動をすすめているが、本来一人で行くべきものであり、これを強く守らせている。

(3) 地域環境を生かした、写生会の取組みはどうなっているか。

北海道・後志——年1回、学校行事として行なっているが、写生時間が足りなく、彩色に充分力を入れられないで悩んでいる。

北海道・渡島——以前には、学校行事として実施されていたが、現在は授業での校舎周囲の写生だけしかやっていない。指導者のねらいが徹底されず、対象や構図も思うように表現されず、今後写生地の工夫をする必要がある。

助言者——地域環境を生かすことが大切であるが、写生会を実施するにあたって、もっとねらいを明確に示してはどうか。「空と船と電信柱をかこう」と言って描かせたことがある。構図を言わなくても、こうして示してやることにより、遠景の組み合わせができてくるものだ。「船の尻をねらおう」という仕事の中からはばらしい作品が生まれてきたこともある。

分科会 B-20

中学校（総合C・作品を語る）

司会者	後藤 昌治（留萌）	一ノ戸義徳（旭川）
助言者	小林 暁（札幌）	滝沢 秀雄（東京）
	須藤 周彦（千葉）	
提言者	大口 優（旭川）	高谷 幹郎（青森）
	長谷川英二（室蘭）	
記録者	沢田 透（旭川）	本田 幸市（旭川）

1. 分科会テーマ 子どもたちのみずみずしい感性をどのように受けとめ、発展させていくとよいか。

2. 提言要旨

- ・40人学級であれば40人全部違う絵が描けるのが願い。
- ・絵の表現には色々種類があった方が良い（題材によって表現をかえる）
- ・どの絵が良いと言えるのか
- ・ある程度の表現能力は教師がつけてやる義務がある。
- ・下の生徒の指導法はどうあるべきか。
- ・絵をきれいになる子ばかりはつくりたくない。よってどう指導すべきか。
- ・指導しない野ばなしは問題がある。
- ・旭川で取りくんできた作品展や事業部の取組みについて。
- ・学年の指導段階の徹底。

3. 研究討議の内容

- ・豊かな人間性やみずみずしい人間性など先生の人間を育てる考えで指導すべきである。
- ・下の子どもに対して「まえより上手になったね」などはげましの言葉を与えるのが望ましい。
- ・教師の姿勢はどうか、これが大切だ。（教師がいったい何を指導したいのか）
- ・コミュニケーションが大切。
- ・中学生らしい絵は概念でできているのはだめで、これから子どもとともにつくるべきである。
- ・描けない子は多様であるが、指導の方法は、その子、個に逸する指導が望ましい。
- ・うまい絵を描くというより、いい絵をかこうと考えるのがよい。

4. 討議のまとめ

- ・本当にいい絵とは自分の心を正直に表現したもの。
- ・教師の姿勢が何より大切で授業に対する取組みによって子どもの感性を高めることができる。
- ・教科書は、どっちつかずの作品でああいう絵は描いてもらおうと困る。
- ・表現とは、内にあるものをあらわすのが表現である。

分科会 B-21

高 校 (総 合)

司会者	川口 幸和 (旭川)	林 弘堯 (北見)
助言者	大石 吉友 (奈良)	
提言者	佐野 千尋 (札幌)	大江 秀博 (東京)
記録者	木村 勝男 (旭川)	

1. 分科会テーマ 青年期の造形教育において発想を助け創造性を高める取りくみは、どうすればよいか。

2. 提言主題 「描くこと」「作ること」に熱中させたい。札幌真栄高校 佐野 千尋

3. 提言要旨

開校4年目を迎えた札幌真栄高校で美術教育に情熱を傾けておられる佐野先生は、中学校より転出されてきた先生ですが、その豊かな経験を生かし、新設校の生徒の実態に合ったきめ細い指導を实践されている。授業での参考作品や多くの資料を用意されて、題材の選択や授業の構成について次の事項を提言されました。

- (1) 生徒たちの生活観につながるものがあり、興味や関心を引き起こす題材。
- (2) 題材、技法、用具、材料などの観点から、生徒にとって未経験な要素を選択し組み入れること。
- (3) 制作上の力点の置きどころ、あるいは手掛りを明確に提示してやること。
- (4) 生徒の実態にそぐわない高度な題材や技法はさけるべきであり、むしろ平易なものであってもその発想の展開、構想の深まり、制作あるいはそれに伴う技法上のさまざまな取りくみの中での内容や質を高める配慮をすること。
- (5) 教師自身も最も身近にいる造形する人間としての姿や態度を示すこと。また発想や制作意欲に繋げるべく、試みとして「遊び」の要素を組み入れている。

※用意された資料の内容 ・昭和61年度美術I日目年間学習表(「反省と感想」「自己評価」の欄あり)。年度当初生徒全員に配布しスケッチブックの裏に貼付させている。
・美術I履修生徒の選択理由アンケートの結果
・各単元の制作過程表、自己評価表
・「平面構成」の学習課題 No.1 No.2
・「木彫キューブ」「あたまと手のトレーニング」等の手びき書
・鑑賞……日本の古建築の見かた、見どころ
古仏の見かた、見どころ
見学旅行レポート(テーマ……建築、彫刻各一点。スケッチも貼付すること)

4. 提言主題 「自然を大切に学ぶ」 東京都立東大和高校 大江 秀博

5. 提言要旨

青年の自立を見守るべき高校教育における現状には、幾多の問題を抱え込んでいる。都市文明と管理社会といわれる現代、青年の創造力が弱くなったといわれるようになって久しい。特に受験

偏差値による生徒の精切りの弊害が重なり、教育困難校といわれる学校では授業成立以前の問題が山積みし、教師を疲労させている。このような中でも美術教師からいろいろな授業の工夫が報告されて、一定の成果を上げていると思われる。そこで私は次の提言をしたい。

○現状の諸問題の解決のため美術教育において「自然を大切にし、学ぶ」ということを基本に置きたい。表現のアプローチはいろいろな角度があって当然でその座表は無限であるが、自然の美しさに心を開き、愛し、学ぶことこそ「生きる」泉であり、創造の泉である。

具体例としては、写生に戸外に出る、少々遊んでもよい。もっといえば安全なら池に落ちててもよい。要は生活体験が創造力のもとであり、このことと表現技術の修得を統一させることである。現代の生徒は自然にふれることが少ない為感動が少ない。また自分をアピールすることも少なく物静かである。

又自然破壊、公害についても時間を設定する。クラブ活動で「自然を大切に」という設定で風景写生、地域の林や野草の観察、地域の広葉樹を使って木工制作、周辺の池や川の淡水魚の飼育、観察を始めているが、これらを連携させて初歩的な域から一歩おし進めたい。

自然と直接触れる機会を多く持ち、その豊かさや厳しさを体得させ（自然の無限さはまだまだ現代科学や文化の比ではない）、人間を深めることこそ大切な生き方だと思うし、美しい風土を造形化することを私の美術教育の出発点としたい。

6. 研究討議の内容

橋詰…佐野先生が現在一番こまっている事はありますか、たとえば授業のあと始末等で。私の学校では基本的な事が出来ない生徒がいるものですから。

佐野…現在特に困難を感じていることはありません。あと始末は終了10分前に実施しています。

池田…全国高等学校美術工芸研究会が11月27日～28日の2日間、大分県で開催されます。今回は教育改革や単位数の事など多くの問題を含んでいます。

司会…提言された佐野先生、大江先生のきめ細かい、また熱の入った発表で、研究討議の時間が十分確保できず、内容を深める事が出来ませんでしたし、中途半ばで終了した事をおわびいたします。

7. 討議のまとめ

午前中の授業研究は大変レベルの高いものでした。佐野先生の経験豊かできめ細い実践報告。大江先生の現代の生徒がかかえている問題点、「自然を大切にし学ぶ」というユニークで熱の入った発表を大いに生かしながら美術教育の新たな出発点としたいと思います。お二人の先生大変ごろうさまでした。

分科会 B-22

大学(総合)

司会者 上条 雄也(旭川)

助言者 熊本 高工(新潟)

提言者 川村 善之(京都)

記録者 八重樫良二(旭川)

1. 分科会テーマ 教員養成と教科教育の充実について

2. 提言主題 大学における当面の諸問題、及び全道連大学部会の今後の活動に関する提言

3. 提言要旨

・提言者より資料の提示に基づき下記に示す諸点に関し、種々の説明、提言が行なわれた。

1. 大学入試と教員養成のかかえる当面の諸問題について

A. 大学入試と教員養成

受験競争の激化と社会状況の変化により、入試をめぐる主に次の点に関し問題が生じつつあるようである。

(1)入試競争の激化と大学、学部の序列化傾向 (2)大学間の格差解消と個性化促進 (3)小学校課程入試の実技試験の是非 (4)62年国大協プラン (5)美術系大学志願者の学校教育外機関(予備校など)での受験準備 (6)その他

B. 教員養成課程のカリキュラム

現状の小学校二級免許では美術科教育をほとんど経験することなく現場指導にあたらざるえない点をはじめとして、中学校、高等学校においても教員資質の充実を計る必要がある。

(1) 小学校教員養成課程

イ. 二級免許所得の“教材研究”を8教科必修とする。

ロ. 図画工作教材研究担当専任教員の確保とカリキュラムの大学間研究交流の促進。

(2) 中学校、高校教員養成課程

イ. 一般教育と専門教育、教科専門と教職一元化の方向。

ロ. 教科教育法、美術・工芸担当専任教員の確保とカリキュラムの大学間交流の促進。

ハ. 美術系大学、短期大学の教師教育の一層の充実、教員としての力量を高める。

C. 今次教育改革への対応

臨形審の審議と併行して進められている教課審の審議が重要な段階にさしかかっている現時点において、全国大学美術教育教員養成協議会(以下、全美教)としても独自の要望を行なう必要がある。

(1) 6年制中等教育は少数英才教育となり、受験競争の激化に拍車をかけるのではないか。

(2) 中・高の選択拡大、単位制高などの多様化、自由化は結果として受験競争の自由化が保障され、かえって美術教育などは圧迫されるのではないか。

(3) 初任者研修制度は使用期間中の指導教員の如何によって特に美術のような教科の場合には、かえってマイナスにならないか。

(4) 都道府県教委の認定する特別免許状制度は、大学の教員養成と教職の専門制を弱めること

にならないか。

D. 就職事情について

- (1) 近年、専任採用をてびかえ、常勤、非常勤講師の多用が顕著であることは問題がある。
- (2) 小学校教員採用試験に実技試験をとり入れる県が音楽、体育、水泳に比べ著しく少ない。
- (3) 教員採用の見とうしの培さは教職課程履修の学生の意欲に大きな影響を与えている。
- (4) 教員養成の立場からも40人学級の早期、完全実施が望まれる。

2. 教科教育の充実について

- A. 大学院の実状。
- B. 研究の国際交流……国際交流の窓口として全造連もその機能を充実すべきである。
- C. 研究の推進……大学と実践の場である現場のつながりを密にすべきである。
- D. 理論的研究の動向

3. 全造連大学部会と一体である全美教の活動について

全造連大学部会、全美教に関する基本的性格の認識、及びそのつながりについての説明。

4. 今後の問題点

これまでの提言と重複しながら問題点の確認、その改善の方策についての提言がなされた。

4. 研究討議の内容

・助言者による補足、または提言に基づく大学部会としての要望に関して説明があり、下記の事項に関して討議、確認された。

- (1) 幼稚園、小学校、中学校、高校にわたり美術、工芸の授業が現状より後退することなく配慮されるべきこと。
- (2) 小学校教員採用試験に図画工作実技が、体育、音楽と同様に採り上げられ、中学校教員採用試験の実技においても重視されるべきこと。
- (3) 中学校、高校美術、工芸における授業時数比からの正常な専任教員数を確保すること。
- (4) 高校普通教育における芸術科工芸を名目にとどめず、全ての高校で開講できる条件を作ること。
- (5) 大学における小学校教員養成課程の教材研究を8教科必修とすること。
- (6) 現職教員の研修については教員養成大学における研究、教育との連携を密にし教育、創作研究などの自主研究を尊重、推進すること。

5. 討議のまとめ

提言が広範・多岐にわたったため、討議は主として部会の要望に関してなされた。限られた時間の中で取り扱うには重要な問題が山積みしているが、現状の大学の置かれた状況、また広く小学校、中学校、高校、大学にわたる美術科教育の諸問題に関し、討議、確認がなされた。

あ　と　が　き

第39回全国造教育研究大会並びに第36回全道造形教育研究大会は、北海道らしくない大変な暑さの中で、無事終了させていただきました。

私たちは、この大会をお引き受けする以前から、子どもたちを取りまく社会の状況や硬直化しつつある学校教育の中で、図工美術教育の果すべき役割を再確認しながら、[°]くらしに結びついた題材を通して、見たり、感じたり、考えたりといった「目や心の働き」を大切にしている研究実践をしまりました。

今大会は、この研究を更に一步進めた研究実践であったと思います。

参加されました多くの先生方にとって、私たちの研究がどれだけ理解され、かつ魅力あるものであったかどうかは疑問です。

しかし、120名という少ない人数と一年間という短い時間でやり遂げたことは、大きな自信と財産を得たと思っております。

この大会を支えていただきました文部省、北海道教育委員会をはじめ教育関係機関、大会役員並びに参加いただきました先生方、ご協賛いただきました各商社の方々に心から感謝とお礼を申し上げます。

昭和61年10月1日

大会実行委員長

千　葉　豊　治

編 集 部

- | | | |
|--------|--------------|---------------|
| ・編集部長 | 鈴木俊昭(緑が丘中) | |
| ・編集副部長 | 伊藤順治(正和小) | 工藤 齊(青雲小) |
| ・編集部員 | 長谷川 食恵(ひとみ幼) | 飯野 絹江(東光幼) |
| | 玉手 聡唯(千代岡小) | 鋤 香代子(永山東小) |
| | 門 脇 元(東光小) | 板橋 正 吾(愛宕東小) |
| | 本 岡 慧子(愛宕東小) | 増 田 正 子(神居東小) |
| | 三 上 瑞代(北嶺小) | 鳥 本 淳子(広陵中) |
| | 新飯田 覚(六合中) | 中 村 由 子(永山中) |
| | 金子 英雄(北星中) | 本 田 赫子(藤 高) |

第39回全国造形教育研究大会 第36回全道造形教育研究大会

旭川大会

発行者 大会運営委員長 柳原寿夫
大会事務局 旭川市立聖園中学校
発行年月日 昭和61年10月1日
印刷所 株式会社 総北海
旭川市神楽岡14条5丁目

